泉にも匹敵する處の藤の大輔の林泉の寄附を受く。貧道の本願忽ちに契ひ成就せしを以て、此の邸宅に名をつけて綜藝種智院と曰ふ。試みに式を造つて記して曰く。

若夫九流六藝濟代之舟梁

【訓方】若し夫れ九流六藝は代を濟ふの舟梁。

【字訓】○九流……儒教・道教・陰陽道・法家・名家・墨家・縱横家・雜家・農家の稱。藝文志に見ゆ ○六藝……五禮・六樂・五射・五御・六書・九數の稱。

【章意】外教の學文藝能は世を裨益するものなることを明す。

【讀義】すなはち夫れ九流六藝は世を救濟し、人々を裨益するものであつて、恰もかの舟が溺れんとするを救ひ、橋が人を渡して裨益するに等しきものである。

十藏五明利人之惟寶

【訓方】十藏五明は人を利するの惟れ寶なり。

【字訓】○十藏……『釋摩訶衍論』第一に曰く、「十藏あり。一には法界法輪藏、圓滿契經の說。二には聲聞藏菩薩藏、總持契經の說。三には如來藏聲聞藏菩薩藏、光明契經の說。四には如來藏聲聞藏菩薩藏補特伽羅藏（仁・義・禮・智・信、）道品契經の說。五には如來藏菩薩藏聲聞藏補特伽羅藏天藏、天子契經の說。六には此の五藏に捨落迦藏を加ふ。（地獄藏）、怖畏契經の說、七には此の六藏に摩羅鳩多耶藏を加ふ、（鬼神藏）、班母契經の說。八には此の七藏に鍵婆陀那跋藏（傍生藏）、龍王契經の說。九には此の八藏に器世界藏を加ふ、器世界契經の說。十には此の九藏に雜亂藏を加ふ」と。これ一切の教法を攝する十種の範疇である。○五明……聲明、因明、醫方明、工巧明、內明。或はまた聲明・醫方明・咒術明・工巧明・因明の稱。

【章意】內教の學文藝能は人を利するものなることを明す。

【讀義】また十藏五明の佛教に說く處の一切の教法、一切の藝能も世人を利益する所のこれ寶である。

故能三世如來兼學而成大覺。十方賢聖綜通而證遍知。未有一味作美膳片音調妙曲者也。立身之要治國之道。斷生死於伊陀。證涅槃於蜜多。棄此而誰

【訓方】故に能く三世の如來兼學して大覺を成じ、十方の賢聖總通して遍知を證す。未だ有らじ、一味美膳を作し、片音妙曲を調ぶる者は身を立つるの要、國を治むるの道、生死を伊陀に斷じ、涅槃を蜜多に證すること此を棄てゝ誰ぞ

【字訓】○兼學……『最勝王經』第四滯地陀羅尼品に曰く「世間の伎術五明の法皆悉く通達する是を菩薩と名く。智慧波羅蜜を成就す」と。○一味……五味の中の一味。○片音……五音の中の片音。○立身等……世間に約す。○斷生死等……出世間に約す。○伊陀、蜜……良賈の『仁王經疏』下三に曰く「梵に波羅彌多（Paramitā）といふ。此には到彼岸と云ふ。聲明論に依つて句を分つて釋して云く、波羅伊（上聲）多、伊多（itā）と言ふは此岸といふ。波羅（Paran）とは彼岸と云ふ」と。伊陀と伊多とは同じ、蜜多は弭多と同じ。

【章意】三世の如來皆綜藝を兼學して佛果を成ぜしを明す。

【讀義】此の故に三世の如來も內外の一切の教法、一切の伎藝を兼ぬ學びて大覺を成就し給へるものであり、十方の三賢十地の菩薩も此れ等を綜通して正遍知の佛果の位を證し給ふたのである。かの一味のみでは美味美膳を作り、備か片音か一音を知るのみにては妙曲を調ぶることは未だかつて出來た驗しはないのである。世間にあつて身を立つるの根本も、國を治むる道も、また出世間にありて生死の苦果を此岸に斷じ、涅槃の樂果を彼岸に證することも此の衆藝綜通の眞理を捨てゝは誰れが達し得られようや。

是以前來聖帝賢臣。建寺置院。仰之弘道。雖然毘訶方袍偏翫佛經。槐序茂廉空耽外書。至若三教之策五明之簡。壅泥不通。肆建綜藝種智院。普藏三教。招諸能者。所冀三曜炳著照昏夜於迷衢。五乘並鑣驅羣鹿於覺苑。

【訓方】是を以て前來の聖帝賢臣寺を建てゝ院を置き、之を仰いで道を弘む。然りと雖ども毘訶の方袍は偏に佛經を翫び、槐序の茂廉は空しく外書に耽る。三教の策、五明の簡の若きに至つては壅り泥んで通せず。肆に綜藝種智院を建て、普ねく三教を藏めて諸の能者を招く。冀ふ所は三曜炳著にして昏夜を迷衢に照し、五乘鑣を並べて群庶を覺苑に驅らん。

【字訓】○前來聖帝……欽明天皇以來の陛下を指し奉る。○毘訶……毘訶羅（Vihāra）のことで、遊行處、住處と譯す。寺のこと。『大日經疏』第三に曰く「僧坊を梵音には毘訶羅といひ譯して住處とす。卽ち是れ福を長ずる住處なり。白衣、福を長ぜんが爲の故に諸の比丘の爲に房を造り、持戒禪惠の者をして風寒暑濕種種の不饒益の事を庇禦して安心に道を行ずることを得しむ」と。○方袍……袈裟のこと。僧に名く。○槐序……槐は槐市で大學、學問處、序は序庠で學校のこと。○茂廉……茂才孝廉の學士。○策、簡……共に書物のこと。○三曜……三光。『佛祖通載』に曰く「三教の優劣を問ふ。士謙の曰く、佛は日、道は月、儒は星なり」と。○炳……明なり。○五乘……人・天・聲聞・緣覺・菩薩乘。

【章意】綜藝種智院を建て、三教を兼學せしむる所以を明す。

【讀義】前來の聖帝が勅願の寺院を置かせられ給ふに至りしも、また藤原鎌足公等の賢臣が寺院を建立して之を仰いで佛道を弘布するに至りしも如上の理由により給ふのである。思ふに僧坊の僧侶はたゞ一づに偏して佛教經典のみを習學し、また槐序の茂廉卽ち世學の士がたゞ空しく外典の書物のみにこだはり學んでゐるけれども、これでは此の兩者共に三教の書、五明の書の如き全般の書物についてはふさがりなづんで通ぜざる有り樣である。此の故に今綜藝種智院を創設して廣く三教の全般に亘りて能者を招く。冀ふ所は三曜にも等しき三教を炳明ならしめて無明の昏夜、衆生の迷衢を照し導かんことを。そして更に五乘の教法皆等しく一樣に一切衆生を悟りの世界へ驅り導かんことを。

或難曰。然猶事漏先覺。終未見其美。何者備僕射之二教。石納言荒亭。如此等院。並皆有始無終。人去跡穢

【訓方】或ひと難じて曰く、然れども猶事先覺に漏れて終に未だ其の美を見ず。何となれば備僕射の二教、石納言の荒亭此の如き等の院並に皆始有つて終り無く、人去つて跡穢れたり。

【字訓】○備僕射……右大臣正二位勳二等吉備の朝臣眞備。僕射は大臣の唐名。○二教……一說には孔・釋の二教。○石納言……大納言正三位兼式部卿石の上の朝臣宅嗣。『續日本紀』三十六に曰く「其の舊宅を捨てゝ以て阿閦寺となし、寺內の一隅に特に外典の院を置いて名けて芸亭と曰ふ。もし好學の徒あつて就いて閱せんと欲すれば恣に之を聽す。仍て篠式を記して以て後に貽す。其の畧に曰く、內外の兩門本一体たり。漸く極むれば異なるに似たり。善く誘すれば殊ならず。僕、家を捨てゝ寺とす。心を歸すること久し。內典を助けんが爲に加へて外書を置く。地は是れ伽藍事すべからく禁戒すべし。庶くは同志を以て入者は空有に滯ることなく、兼ねて物我を忘れんことを。累代の來者塵勞を超出し、覺地に歸せんと。其の院今見に存す」と。○荒亭……芸亭の寫誤なり。

【章意】志は可なれども事の永續せざることを難ず。

【讀義】ある人難じて曰く、其の志は誠に結構であるけれども然れどもかゝる事業は先覺者さへ困難事であるとして殘し漏れてゐるのであるが故に、今此れを創設して見ても終には其の成果を完遂して結實の美を見ること能はざるで

あらう。何となればかの吉備の朝臣眞備の儒佛の二教を學ばしむる事、また石の上の朝臣宅嗣の芸亭に於ける內外二教を學ばしむる事、此の如きらの私學院並に皆始めあつて終りなく、人散り去つて跡滅び穢れたる有り樣なるに徵して見ても自ら明らかである。

答物之興廢必由人人之昇沈定在道。大海資衆流以致深。蘇迷越衆山以成高。大廈羣材之所支持。元首股肱之所扶保。

讀方　答ふ物の興廢は必らず人に由る。人の昇沈は定めて道に在り、大海は衆流に資つて深きことを致し、蘇迷は衆山に越えて高きことを成す。大廈は羣材の支持する所、元首は股肱の扶け保つ所なり。

字訓　○越衆山……若し衆山なきときは蘇迷の高きことを知らず。衆山あつて而して後に其の高きことを成すの意。○所扶保……君は元首たり、臣は股肱たり。其の一体を明にして相ひ待つて成る。

意義　志を同じうする所の賛成者多きときは必ず成功し、發展するに到ることを答ふ。

講義　答ふ。物の興除するか、また廢頹するかは必らず人人が力を勠せ志を同じうするかしないかにかゝつて居り、またその人々をして善心に依りて榮達に昇り、惡心によりて罪惡の淵に沈むかは實にこれ道を學ぶか學ばざるかにかゝつてゐるのである。かの大海の深きことを致すは衆流が集り流れ注いでゐるが爲めであり、また蘇迷盧の高きことを成すは衆山之を支へてゐるが爲めであり、また大家は一木によりて成れるものではなく、衆材の支持することに依りて成れるものであり、また一國の治は、君は元首、臣は股肱、一心同体となりて扶け奉ることによりて成る。されば今此の事業も力を戮せ、志を同じうして協力することによりて興隆し、永續するに至らん。

然則多類者難竭。寡偶者易傾。自然之理使然。今所願者一人降恩。三公勠力諸氏英貴諸宗大德。與我同志百世成繼。難者曰善也

讀方　然れば則ち類多き者は竭き難く、偶ひ寡き者は傾き易し、自然の理の然ら使るなり。今願ふ所は一人恩を降し、三公力を勠せて諸氏の英貴、諸宗の大德、我れと志を同うせば百世繼ぐことを成さん。難者の曰く善し。

字訓　○多類等……『文選』五十二六代論に曰く「百足の蟲は死に至るまで僵れず。之を扶くる者衆ければなり」と。

意義　御恩命を乞ひ奉る旨を明し給ふ。

講義　かく樣なわけであるが故に同志の多くの者類をなして協力すれば亡び難くなり、之に反して類少くして協力なきときは傾滅するに至るはこれ自然の理の然らしむる所である。依りて今願ふ所は上御一人御恩命を降し給ひ、三公力を勠せ、諸氏の英貴、諸宗の大德我れと志を同じうして此の事業を助援致すならば百世の後までも繼續するであらうと。此れを聞きて難者の曰く善しと。

或有人難曰。國家廣開庠序勸勵諸藝。霹靂之下蚊響何益

讀方　或は人有つて難じて曰く、國家廣く庠序を開いて諸藝を勸め勵ます。霹靂の下には蚊響何の益かあらん。

字訓　○國家廣開庠序……『本朝文粹』第二に曰く「延喜中に善相公封事十二條を上る中に大學の生徒の食料を加給せんことを請ふ條に曰く、伏して古記を見るに朝家の大學を立つる大寶年中に始る。天平の代に至つて右大臣吉備の朝臣恢ひに道藝を弘め親たり自ら傳へ授く。即ち學生四百人をして五經三史明法算術音韻醫藥等の六道を習はしむ。其の後代代勅を下す」と。○霹靂……國家的事業の大に喩ふ。○蚊響……私的事業の無力に喩ふ。

意義　國營の大學あれば私學無用無益なりの難を明す。

講義　またある人があつて批難して曰く、國家が國費を以て廣大なる學校を開設して諸學諸藝を勸め勵ましてゐる。即ち霹靂の如き大なる國家的大學の下に於て、蚊響の如き小さき私學を開いた所でそれは無益なことである。

答。大唐城坊坊置閭塾普敎童稚。縣縣開鄕學廣導青衿。是故才子滿城藝士盈國。今是華城但有一大學無閭閭塾。是故貧賤子弟無所問津。遠方好事往還多疲今建此一院普濟矇矇不亦善哉

讀方　答ふ大唐の城には坊坊に閭塾を置いて普ねく童稚を敎へ、縣縣に鄕學を開いて廣く青衿を導びく。是の故に才子城に滿ち、藝士國に盈てり。今是の華城には但だ一つの大學のみ有つて閭塾有ること無し。是の故に貧賤の子弟津を問ふ所無し。遠方の好事往還するに疲れ多し。今此の一院を建てゝ普ねく矇矇を濟はん。亦善かざらんや。

字訓　○坊坊……『舊唐書』卷三十八地理志第一に曰く「都內南北十四街、東西十一街、街に一百八坊を分つ。坊の廣長皆三百步」と。○閭塾……學業を修むる家。○青衿……學童。

意義　貧賤の子弟を修學せしむる小さき私學の必要なることを明す。

講義　答ふ。大唐の城內には坊坊に閭塾を置設して普ねく一般の童稚を敎學し縣縣の田舍に於てもそれ〴〵鄕の學舍を開設して廣く學童を敎へ導いてゐる從つて此の故に學識を有する才子城內に滿ち、多藝の士國に盈ち溢れてゐる程である。然るに我が國の此の華城にはたゞ一つの大學のみありて、各町々に閭塾の設備あることなし。是の故に貧賤の子弟知識を求め問ふ所なく、學問を好む所のもの遠方より通學するに疲勞多くして仲々困難事である。より

て今此の一院を開設して普ねく矇矇を導き濟はんとす、また善からずや。

難者曰。若能果如此盡美盡善。與兩曜爭明將二儀競久。益國之勝計。利人之寶洲

讀方　難者の曰く、若し能く果して此の如くならば美を盡し善を盡せり。兩曜と與んじて明を爭ひ、二儀と將んじて久しきことを競はん。國を益するの勝計、人を利するの寶洲なり。

字訓　○兩曜……日月。○二儀……天地。○寶洲……『十地經論』第四に曰く、「我れ彼の衆生に於て大悲心を生じ、善根力を以て之を拔濟し、一切智慧の寶洲に住せしむべし」と。

意義　果して謂ふ所の功績を擧げ得るや否やを難ず。

講義　また難者の曰く、若し能く果して前述の如くであるとすれば誠に賛美の極であり、至善の極であり、その功績の光明は赫々と輝き、それは日月とその光明を爭ふ程であり、その萬代不朽の名譽は天地の存立と久しさを競ふ程であり、國家を益する勝計であり、人を利する所の寶珠にも喩ふべきものであるが、果してそれだけの効果を擧げ得られようや。

余雖不敏。投一簣哉九仞。添涓塵乎八埏。報四恩之廣德。爲三點之良因

讀方　余不敏なりと雖ども、一簣を九仞に投げ、涓塵を八埏に添へて四恩の廣德を報じ、三點の良因と爲さむ。

字訓　○一簣……一もつこの土。○九仞……一仞は八尺。今は高き山のこと。高き山を作るに九仞まで積み上げしに、最後の一簣になりて中止すれば山ならず。從つて物事を中途にて止めて志を遂げざることを一簣を九仞に缺ぐといふ。○涓塵……涓はしたたり、塵はちり、即ち少分の義。○八埏……八方

の地。今は岡の義と解すべきか。○三點……法身・般若・解脫。

【參意】必らず初志を貫徹する義を明し給ふ。

【講義】余愚陋なりと雖ども計畫せしことは必らずなし遂げ一簣を九仞に虧ぐが如きことはなさず、一簣を九仞に於て投げ上げて以て完成させて初志を貫徹させ、沿塵を積み添へて岡を作さんことをあくまでやり通す決心である。そして四恩の廣大無上の德を報謝し奉り、また他面には三點の良因となして佛果体得の因たらしめんと欲するのである。

招師章

語曰。里仁爲美。擇不處仁焉得智。又曰。遊於六藝

【講方】師を招くの章。

語に曰く、里は仁を美と爲。擇びて仁に處らずんば焉ぞ智を得ん。又曰く、六藝に遊ぶと。

【字訓】○語曰……『論語』里仁第四或はその他古語を指す。○里仁爲美……此の解釋に三說あり、卽ち仁の德に居るを何より結構なることとす。一說には仁の風俗ある土地に居るを何より結構なることとするなりといひ、又一說には我が住むべき里は仁の風俗あるを何より結構なることとするなりといへり。今は第二の解に從ふ。○擇……居處を擇ぶこと。但し第一の解を承くれば無形の居處なり、第二、第三の解を承くれば有形の居處となる。○處……居ること。○智……知に同じ。論語には知とある。○又曰……『論語』逸而第七或はその他古語を指す。○遊於六藝……『論語』には游於藝とあり。藝とは六藝を指す。六藝とは禮儀・音樂・弓術・馬術・書法・算數のこと。

【參意】師を招く章の中、先づ外書に於ける住處を選び、衆藝を學ぶべきを明す

【講義】古語に「人は仁の風俗ある土地に居るを何より結構なることとす。能く其の居處を擇びて仁の風俗ある土地に居らざるむには何とて智者といふことを得べき、智者は必らず居處を擇びて最も貴重大切なる仁の土地に居るなり」とも言はれて居り、また「此の如く仁に依りて道を修め、德を養ひながら人として缺くべからざる禮樂射御書數の六藝に心を寄せて其の學問を完成すべし」とも說示せられてゐるのである。

經曰。初阿闍梨兼綜衆藝

【講方】經に曰く、初の阿闍梨衆藝を兼ね綜ぶ。

【字訓】○經曰……『大日經』第一具緣品を指す。卽ち曰く「時に薄伽梵また祕密主に告げて言く、漫荼羅の位の初の阿闍梨は菩提心を發し、妙悲惹悲あり。衆藝を兼ね綜べ、善く巧に般若波羅蜜を修行し、三乘に通達し、善く眞言の實義を解し、眞言行に於て善く決定することを得、瑜伽を究習し、勇健の菩提心に住すべし」と。○初阿闍梨……入曼荼羅の位に於て十六重の淺深あり是れ最初の傳敎の阿闍梨なるが故にかくいふ。○兼綜衆藝……世間的の種種の伎藝によく通達すること。卽ち聲論・因論・十八明處・六十四能算數・方藥・觀相・工巧の類、緣曼荼羅の所要皆人に假らずして造次の施爲にも闕乏の過無くして然して後に阿闍梨と作るに堪ゆるのである。

【參意】師を招くの章の第二として、眞言の阿闍梨となるも衆藝を兼綜すべきことを大日經を引きて明す。

【講義】また經典に曰く、「初めて傳敎の阿闍梨となるためには一切の伎藝を闕ぐことなく皆兼ね綜ぶべし」とある。

論曰。菩薩爲成菩提先於五明處求法

【講方】論に曰く、菩薩菩提を成ぜんが爲に先づ五明の處に於て法を求むと。

【字訓】○論曰……『十地論』第一を指す。彼の論に曰く「菩薩菩提に於て五種の障あり、乃至、五には無方便智障、善く衆生を化すること能はず、また自の菩提行滿足せざるが故に是の障を對治するに五明の處に於て通達し、分別するが故に、經の如く通達分別一切處法の故に」と。○五明……聲明、工巧明醫方明、因明、內明の內敎の五明を指す。

【參意】師を招くの章の第三として十地論に於ける衆藝を學ぶべきことを揭ぐ。

【講義】また論には、「菩薩菩提を成就せんが爲めには五明の法によりて求むべし」と說示せられてゐる。

是故善財童子巡百十城尋五十師常啼菩薩常哭一市切求深法

【講方】是の故に善財童子百十の城を巡つて五十の師を尋ね、常啼菩薩常に一市に哭す。切に深法を求む。

【字訓】○善財等……善財童子が百城を巡ぐつて五十五の知識に遇つて道を問ひし故事。第七卷華嚴が顧文に出づ。○常啼等……常啼菩薩が般若の爲に一市に啼ける故事。第五卷求內外經書啓に出づ。

【參意】師を招くの章の第四として法を求むることに眞劍なるべきことを故事を引きて明せしもの。

【講義】更にまた敎を乞ひ、道を求むるに當りては眞劍でなければならぬ。かの善財童子は百十城を巡りて、五十五人の師を尋ね求めて聞法せしとかと稱せられ、また常啼菩薩は般若の法を求むる爲めに常に一市に哭せしとか稱せられてゐる程に眞劍に妙法を求めたのである。

然則得智在仁者之處。成覺資五明之法。求法必於衆師之中。學道當在衣食之資。四者備而後有功。是故設斯四緣。利濟羣生。雖云有處有法。若無師者無由得解。故先請師。師有二種。一道二俗。道所以傳佛經。俗所以弘外書。眞俗不離我師雅言

【講方】然れば則ち智を得ること仁者の處に在り、覺を成ずることは五明の法に資る。法を求むることは必らず衆師の中に於てし、道を學することは當に衣食の資に在るべし。四つの者備つて後に功有り、是の故に斯の四緣を設けて羣生を利濟す。處有り、法有りと云ふと雖ども若し師無んば解を得るに由無し。故に先づ師を請ず。師に二種有り、一には道、二には俗。道は佛經を傳ふる所以、俗は外書を弘むる所以なり。眞俗離れずといふは我が師の雅言なり。

【字訓】○四者……一には處、二には法、三には師、四には資(衣食)。○眞俗不離……『大日經疏』第六に曰く「若し能く此の世諦を解する時、自ら當に第一義諦を通達すべし。故に諸佛說法常依二諦といふ」と。○雅言……正言のこと。

【參意】師を招くの章の結文にして、師の大切なることを明す。

【講義】か樣なわけであるが故に智者たらんとするには仁の風俗ある住處を選びて住むことを要し、また覺りを成ぜんが爲めには五明の法によるべきであり、また法を求むるには必ず衆師を訪問して聞法することを要し、また道を學するには衣食の資けを要す。以上の四者が皆具備しなければ學成り難く、此の四者一致して具備すれば功期せずして成る。是の故に此の四緣を設備することによりて群民を利濟することが可能なのである。若し住處あり、法ありとしても師なければ正しき解知を得るすべもなし。故に先づ師を招請しなければならぬ。たゞ師といへど、師には二種あり、一には佛道の師、二には俗敎の師。佛道の師は佛經を傳へ敎ふるものであり、俗敎の師は外書を敎へ弘むるものである。而も此の佛道と俗敎の二者離れず、眞俗不二といふは我師の雅言である。

一。道人傳受事

右顯密二敎僧意樂。兼通外書任住俗士。有意樂學內經論者。法師心住四量四攝。不辭勞倦。莫看貴賤。隨宜指授

【訓方】一。道人傳受の事。

右顯密二教は僧の意樂なり。兼て外書に通せんとならば住俗の士に任すべし。意内の經論を學ばんと樂ふ者有らば、法師心四量四攝に住して勞倦を辭せざれ。貴賤を看ること莫れ。宜しきに隨つて指授せよ。

【字訓】○道人……道人は出家の通名。○僧……求法の資。○兼通外書……兼學して外書に通ぜんと欲する者、○任住俗士……俗博士に一任すべし。道人は其の師に非ず。○四量……慈悲喜捨の四無量心のこと。○四攝……布施愛語利行同事の四攝のこと。

【拳意】佛道人の傳授の態度を規制す。

【講義】一、佛道人傳授の心得の事。顯密二教を學習することは僧たる者の本分の意樂であるが、更に若し兼學して外書に通ぜんと欲するならば俗博士に一任して就き學ぶべし。若し俗人にして佛教の經論に就きて學ばんと願ふものあらば、法師たるもの心四無量心、四攝法に住して勞倦を辭せず、いとはずして、貴賤の別なく、宜しく指導し、傳授すべし。

一。俗博士教授事

右九經九流。三玄三史。七略七代。若文若筆等書中。若音若訓。或句讀或通義。一部一帙堪發蒙瞳者住

【訓方】一。俗の博士教授の事。

右九經九流三玄三史七略七代若しは文、若しは筆等の書の中に、若しは音、若しは訓、或は句讀、或は通義、一部一帙瞳朦を發くに堪えたらん者は住すべし。

【字訓】○九經……一說には三禮・三傳・易經・書經・詩經をいひ、一說には易經・書經・詩經・禮記・春秋・孝經・論語・孟子・周禮を數ふ。○九流……儒教・道教・陰陽道・法家・名家・墨家・縱横家・雜家・農家の稱。藝文志に見ゆ。○三玄……莊老周易をいふ。顏氏家訓に見ゆ。○三史……史記・前漢書・後漢書の稱。○七略……輯略・六藝略・諸子略・詩賦略・兵書略・術數略・方伎略の總稱にして漢の劉歆群書を總べて作りしもの。○七代……晉書百三十卷、宋書百卷、齊書五十卷、梁書五十卷、陳書三十六卷、周書、隋書八十卷、以上を七代史とす。○文、筆……一說には文とは歌詩の歌、筆は銘賦の類。また一說には文は韻屬を稱し、筆は對詞を稱すと。○句讀……『小補韻會』に增韻を引きて曰く、「句讀とは凡そ經書文を成す。語絶える所之を句と謂ひ、語未だ絶えずして之を點じて師詠に便りす」と。昔は句の絶ゆるときは字の旁を點し、讀み分けるときは字の中間に點を打つてゐたのである。○瞳朦……童蒙に同じ。童蒙は幼稚にして蒙昧なるもの。

【拳意】俗教の教師の心得を規制する中、その資格を明す。

【講義】一、俗教の博士教授に就いての心得の事。俗教の教師たるものは、九經九流、三玄、三史、七略、七代、若しは文、若しは筆等の書の中に、若しは音、若しは訓、或は句讀、或は通義等に堪能し、通曉してゐるもので、これらのすべてのどれに亘りても一部一帙皆毎く童蒙を啓發し、教授するに堪え得る者は教師となりて此の院に住せよ。

若道人意樂外典者。茂士孝廉隨宜傳授。若有青衿黃口志學文書。絳帳先生心住慈悲。思存忠孝。不論貴賤。不看貧富。隨宜提撕誨人不倦

【訓方】若し道人意に外典を樂はん者は、茂士孝廉宜きに隨つて傳授せよ。若し青衿黃口の文書を志し學ぶ有らば絳帳先生、心慈悲に住し、思ひ忠孝を存して貴賤を論せず、貧富を看ず、宜きに隨つて提撕し、人を誨ゆることを倦まざれ。

【字訓】○茂士……才德すぐれたる人。○孝廉……孝行にして廉直なること。○青衿……學生。青色の襟の衣服を着するよりいふ。○黃口……鳥の雛の口のきいろなること。轉じて人の年少經驗に乏しきこと。○絳帳……赤きとばり、師の席をいふ。○提撕……後進を指導すること。

【拳意】俗教の教師の教授態度の心得に就いて規制す。

【講義】若し佛道の人にして外典を學ばんと樂ふものあらば、茂士孝廉宜しきに隨つて指導し教授せよ。若し青衿黃口の學童にして文字を志し學ばんとするものあらば絳帳先生、心慈悲に住し、忠孝を念頭に置きて忘るゝことなく、いかなる場合にも忠孝を鼓吹し、貴賤を論ずることなく、貧富を別たず、宜しきに隨つて提撕し、人を教化教導して倦まざれ。

三界吾子大覺師吼。四海兄弟將聖美談。不可不仰

【訓方】三界は吾が子なりといふは大覺の師吼、四海は兄弟なりといふは將聖の美談なり。仰がずんばある可らず。

【字訓】○吾子……衆生のこと。『法華經』に曰く「今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」と。○大覺師吼……大覺世尊の言說をいふ。○四海兄弟……『論語』に曰く「子夏が曰く、商聞く、死生命あり富貴天に在り、君子は敬して失することなく、人を敬うして禮あらば四海の内皆兄弟たらん」と。○將聖……孔子を指す。

【拳意】常に親子兄弟の思ひを以て教授すべきことを訓ふ。

【講義】三界の衆生は吾が子なりといふは大覺世尊の言說であり、四海は兄弟なりといふは將聖孔子の美談である。されば此の聖訓を仰信して親子兄弟の如く思つて慈愛を以て懇切丁寧に教化教導すべし。

一。師資糧食事

夫人非懸瓠。孔丘格言。皆依食住釋尊所談

【訓方】一。師資糧食の事。

夫れ人懸瓠に非ずといふは孔丘の格言なり。皆依食住といふは釋尊の所談なり。

【字訓】○懸瓠……『論語』に曰く「吾れ豈に瓠瓜ならんや。焉んぞ能く繫つて食はざらん」と。○皆依食住……『唯識論』第四に曰く、「契經に說く、一切有情は皆食に依つて住す」と。

【拳意】人間は衣食によらねばならぬ義を内外の聖典を引きて說き明す。

【講義】師資糧食の事。夫れ人は懸瓠にあらざるが故に衣食を要すとは孔子の格言であり、人は皆食に依つて生活するものであるとは釋尊の所說である。されば人間たる以上誰れしも皆衣食を必要とすることは聖言を待つまでもなく明白なことである。

然則欲弘其道。必須飯其人。若道若俗或師或資。有心學道者並皆須給。雖然道人素事清貧。未辦資費。且入相濟此願。生生世世同駕佛乘。共利羣生。天長五年十二月十五日大僧都空海記

【訓方】然れば則ち其の道を弘めんと欲はゞ、必らず須く其の人に飯すべし。若は道、若は俗、或は師、或は資、學道に心有らん者には並に皆須く給すべし。然りと雖ども道人素より清貧を事とす。未だ資費を辨せず。且く若干の物を入る。若し國を益し、人を利するに意有り、迷を出で覺を證することを志求せん者は同じく涓塵を捨てゝ此の願を相ひ濟へ。生生世世に同じく佛乘に駕して共に群生を利せん。天長五年十二月十五日大僧都空海記す。

字訓 ○師、資……師匠及び弟子。善人は不善人の師、不善人は善人の資といふ義に本づく。

章意 志あらん者より資糧の施入を乞ふ旨を明す。

講義 か様なわけであるが故に其の道を弘めんと欲したならば、必ず其の傳道者に食を與ふべし。食を缺ぎては專心に傳道に從事することは出來ぬものである。さればすべからく道俗を論ずることなく、師資を擇ばず學道に志すものは皆等しく給費すべし。理論、理想は正しくそうであるけれども佛道人たる自分は平素より清貧を旨としてゐるが故に未だ充分に費費を辦備することは能はず、よりて且らく若干の物を費用に充當す。されば國を益し、人を利せんとする志のあるもので、迷を去り、覺を證せんと志求するものあらば、涓塵の如き些少の物にても施入して我が此の願を相ひ濟はんことを。さればこの功德によりて生生世世に同じく佛乘に駕して佛果を体得し、共に一切の衆生を利益するに至るであらう。天長五年十二月十五日大僧都空海記す。

一〇三　故贈僧正勤操大德影讃幷序

故贈僧正勤操大德影讃幷に序

訓方 故の贈僧正勤操大德の影の讃幷に序

章意 初に題名を揭ぐ。

講義 故の贈僧正勤操大德の御影の讃文幷に序文。

艤能濟焉。車能運焉。然猶無御人者不能致遠。無柁師者不能越深。道亦如之。導人者教。通教者道。道無人則壅。教無演則廢

訓方 艤は能く濟し、車は能く運ぶ。然れども猶御する人無ければ遠きに致すこと能はず、柁の師無ければ深きを越ゆること能はず。道も亦之の如し。人を導くは教なり。教を通ずるは道なり、道人無きときは則ち壅り、教演ぶること無きときは廢る。

字訓 ○艤……海中の大船。○御者、柁師……能化、師範に喩ふ。

章意 傳法者の德を歎ず。

講義 海中の大船はよく物を此岸から彼岸へ運送し、また車はよく物を運載するものである。然れども猶御する人なければ遠方に運ぶこと能はず、柁師なければ深海を越ゆること能はざるが如く、佛教所詮の道理もまた此れと同樣で、人をして迷より悟へと導くものは教であり、教の中心をなすものは道である。然れどもその道も說き明す所の人なきときは則ち壅がり、演べ弘むることなかりせば廢滅するに至る。

百會未誕瞻部聾一乘之雷千部不生印度瞽八不之日

訓方 百會未だ誕れざりしかば、瞻部一乘の雷に聾ひ、千部生れざりしかば印度八不の日に瞽ひたり。

字訓 ○百會……佛をいふ。即ち呆寶の『寶鑰勘註』第六に『黃帝內經明堂』第七を引きて曰く「百會は人の頂上にある者の身の尊なり。惣じて三百六十五脉あり。皆面に上り、其の氣頂に至る」と。○瞻部……南瞻部洲のこと。○千部……龍猛菩薩をいふ。『止觀』七之三に曰く「龍樹の如きは千部の論を作りたまへり」と。

章意 教法流傳を明す中、今は印度に就いて明す。

講義 百會たる釋尊南瞻部洲の地に生誕し給はざれば南瞻部洲の人々は佛一乘の法雷を聞くこと能はざりし所であり、また千部の論師たる龍猛菩薩印度に生誕し給はざれば印度の人人は八不の智日を證見すること能ざる所であつたであらう。

童壽投鉢支那覺無起藏慈把炬陽谷識不異所謂人能弘道斯言實焉

訓方 童壽鉢を投げしかば支那無起を覺り、藏慈炬を把りしかば陽谷不異を識りき。謂所る人能く道を弘むといふ斯の言實なるかな。

字訓 ○童壽……鳩摩羅什のこと。『名義集』第三に曰く「鳩摩羅什婆此れには童壽と云ふ。祖は印度の人なり。父聰敏を以て稱せらる。龜茲王聞いて女を以て之に妻はす。而して什を生む。什胎に居る日母辯慧を增す。七歲にして出家して曰く、千偈を誦ず。年九歲に至つて外道と論義して辯邪鋒を挫く。廣く大乘を誦じて其の祕奧を洞にす。西域諸王什を請じて講說するに必らず座の側に長跪して什に命じて讚んで登らしむ。符堅の建元九年に太史奏して云く、德星あつて外國に現ず。まさに大德の智人あつて入て中國を輔くべし。堅の曰く、猴開く、西域には羅什あり、襄陽には道安あり、はた此にあらずや。後に將軍呂光等を遣はして兵七萬を率ゐて西のかた龜茲を伐つ。光、什と同じく來る。什、道に在つて數々應變を言ふ。光盡く之を用ふ。光西涼に據る。亦什を請じて留む。姚秦の弘始三年に興、西呂を滅すに至つて方に長安に入り、秦主興厚く之を加禮して延て西明閣及び逍遙園の別館に入る。僧睿等の八百の沙門に勸して諮受せしむ。興萬乘の心を卑て三寶の教を尊ぶ。草堂寺に於て三千の僧と共に手から梵經を執つて之を參定す」と。○鉢……箭鏃の廣長なるもの。今は法に喩ふ。即ち『涅槃經』第八に曰く「盲人あり、目を治せんが爲めの故に良醫に造詣す。景の時良醫金鉢を以て其の眼瞖を刮る」と。○無起……無生のこと、無生は涅槃の義譯。○藏慈……智藏と道慈。智藏は吳國の人、禮亮法師傳たりし時の子なり。嘉祥に謁して三論の微旨を受く。本朝に來りて法隆寺に居り、盛りに空宗を唱ふ。白鳳元年に僧正となる。道慈は性は額田氏、和州添の下の郡の人なり。吳の智藏に事いて三論の學を學ぶ。大寶元年に入唐請益す。經律論多く涉獵す。益々三論の旨を究む。養老元年に歸へりて盛りに空宗を唱ふ。○陽谷……陽谷は日の出づる所、故に日本を稱す。○不異……八不の中の一を舉ぐ。『住心論』第七に曰く「心性の不生を悟り、境智の不異を知る。斯れ乃ち南宗の綱領なり」と。○人能弘道……『論語』に曰く「子の曰く、人能く道を弘む。道人を弘むるに非ず」と。

章意 教法流傳を明す中、支那日本に就いて明す。

講義 かの支那に於ては童壽羅什三藏が法文の金鉢を以て衆生の心眼を療治してより無起の涅槃を覺るに至り、また本朝に於てはかの智藏、道慈の二師三界の迷夜を照らすに法文の炬を以てせしが故に陽谷の人々八不を證るに至りき。して見れば傳法者よく道を弘むといふ此の古諺は誠に眞實なることがうなづかれるのである。

爰有一傳薪者。法諱勤操。俗姓秦氏。母則島史。大和州高市人也。初母氏無嗣中心憂之。數詣駕龍寺玉像前。香華表誠精勤祈息。夜夢明星入懷。遂乃有娠

訓方 爰に一りの薪を傳ふる者有り、法の諱は勤操、俗姓は秦氏、母は則ち島の史、大和の州、高市の人なり。初め母氏嗣無うして中心に之を憂ふ。數駕龍寺の玉像の前に詣でて香華をもつて誠を表し、精勤して息を祈る。夜夢らく、明星懷に入ると。遂に乃ち娠むこと有り。

字訓 ○傳薪……法門を傳ふること。傳法。○島史……姓なり。○高市……郡の名。○駕龍寺……『明書』によれば河內の國天野と觀心寺との間に桐山といふ里あり。其處に駕龍寺といふありと。

章意 勤操大德の俗姓に就いて明す。

講義 爰に一りの傳法者あり、法の諱は勤操、俗姓は秦氏、母は則ち島の史氏の人、大和の州高市郡の人である。初め母氏世子なくして心中之を憂ひ悲しむ。よりてしばしば駕龍寺の尊像の前に參詣して香華を辦じて赤誠を表し、

精進し勤行して息を授からんことを祈る。或る夜夢に明星懐に入ると見て遂に懐妊せる所である。

法師生而未幾耶早棄背孤露無歸母氏鞠養年甫十二就大安寺信靈大德以爲吾師景雲四年秋有勅於宮中及山階度一千僧法師則千勤之一也十六渴慕閑寂厭惡囂塵遂懷忘歸之思躋南嶽之窟比及弱冠親教數召令受具足

【講句】法師生れて未だ幾くならざるに、耶早く棄背しぬ。孤露にして歸無し。母氏鞠養す。年甫て十二にして大安寺の信靈大德に就いて以て吾が師と爲す。景雲四年の秋、勅有つて宮中及び山階に於て一千の僧を度す。法師千勤の一りなり。十六にして閑寂を渴慕して囂塵を厭惡す。遂に忘歸の思ひを懷いて南嶽の窟に躋る。弱冠に及ぶ比ひに親教數召して具足を受け令む。

【字訓】○耶……父。○棄背……死去のこと。○孤露……父なきを孤といふ。父なきあはれなる子。○鞠養……やしなふこと。○景雲四年……養龜元年に當る八月癸巳天皇西宮の寢殿に崩ず。辛巳七七山階寺に於て齋を設くと『續日本紀』卷三十に記さる。○勤……勤策男で沙彌のこと。○山階……山階寺で興福寺のこと。○厭惡囂塵……かまびすしき俗塵をいとひにくむこと。○懷忘歸之志……故郷に歸へるを忘れる思を懷くことで、出家の思ひを懷くこと。○南嶽……泉州の槇尾山を指す。○弱冠……二十をいふ。○親教……和尚の翻名。信靈大德を指す。○具足……比丘戒。

【筆意】勤操大德の弱冠の年までの生ひ立ちを記す。

【講義】勤操法師生れて未だ幾くもならずして父早く逝去しぬ。孤兒となりてよんどころなく、母養育す。年やつと十二歲になりて大安寺の信靈大德に就いて之を師として仰ぐ。景雲四年の秋勅ありて宮中及び山階寺に於て一千の僧を度す。法師もまたその一千の僧の中の一人である。十六にして閑寂なる境地を渴慕して、囂塵たる俗世間を厭惡するに至り、遂に忘歸の思ひ、即ち出家出塵の思ひを懷ひて南嶽の窟寺たる槇尾山寺に躋り住す。二十歲になる頃に信靈和尚しばしば大安寺に召し招きて具足戒を受けさせたのである。

入壇之後就同寺三論名匠善議大德禀學三論之幽賾勤經十餘年彼大德則故入唐學法沙門道慈律師之入室也

【講句】入壇の後、同じき寺の三論の名匠善議大德に就いて三論の幽賾を禀け學ぶ。勤めて十餘年を經たり。彼の大德は則ち故入唐學法の沙門道慈律師の入室なり。

【字訓】○入壇……具足戒を受けること。○同寺……大安寺を指す。○善議……河内の人、大和大安寺道慈に學び、後、入唐遊學し、歸へりて大安寺にありて空宗を唱ふ。弘仁三年八月寂。壽八十四。○幽賾……幽深にして見難きこと。

【筆意】具足戒を受けし後、三論を學びしを明す。

【講義】具足戒を受けしの後は大安寺の住侶にして三論の名匠たる善議大德に就いて三論の奥旨を禀け學ぶこと十餘年であつた。かの善議大德は則ち故入唐學法の沙門たる道慈律師の弟子である。

公鼓篋於毘訶之中攝念於巖藪之裏不擲寸陰二利是競鶴響易聞高天聽卑

【講句】公篋を毘訶の中に皷きて念ひを巖藪の裏に攝む。寸陰を擲たず、二利是れ競ふ。鶴の響き聞え易うして高天卑きに聽く。

【字訓】○公……勤操を指す。○鼓篋……學問のこと。○毘訶……毘訶羅で僧坊のこと。○攝念……禪定のこと。○巖藪……澤の水なきを藪といふ。山巖藪澤のこと。○二利……自利利他上求下化。○鶴響易聞……勤操の德行の高きを鶴聲に喩ふ。即ち鶴は九皐の如き低き澤に居り乍らもその聲は高き天に聞ゆること。○高天聽卑……高天は天子に喩へ奉る。即ち天子の御位は高きこと天のそれの如く無上であらせられるけれども、併し聽き給ふことは下々の低く卑しき民のことまでに及び給ふこと。

【筆意】勤操大德の德行の高きを明す。

【講義】かくて勤操大德は一面には僧坊にありて修學を勵み、他面に於ては山巖藪澤にありて禪定に耽り給ふ。更にまた寸陰を惜みて自利利他の行に精進努力し、その德行風に聞ゆ。かの鶴の聲は低き澤に居りて鳴けどもその聲は高き天に聞え易きものであるのに、更にその上に殊に天子の御位は高きこと天のそれのごとく無上のものであらせられるけれども、併し聽き給ふことは下々の低き卑しき民のことまでに及び給ふが常である。從つて勤操の德行も風に天聞に達し奉るに至つたのである。

弘仁四年拔以律師皇帝屈法師於大極殿令講最勝講了之日更於紫宸殿集諸宗大德令擧旗鼓以公爲座主即位立義三論是祖君之宗法相則臣子之教何者阿僧釋龍猛之中觀護法註提婆之百論並稱歸命阿闍梨故

【講句】弘仁四年に拔きんずるに律師を以てす。皇帝法師を屈して大極殿に於て最勝を講せしむ。講じ了るの日、更に紫宸殿に於て諸宗の大德を集めて旗鼓を擧げしむるに公を以て座主と爲す。即ち義を立つ。三論は是れ祖君の宗、法相は則ち臣子の教なり。何かんとなれば阿僧は龍猛の中觀を釋し、護法は提婆の百論を註する並に歸命阿闍梨を稱する故なり。

【字訓】○皇帝……嵯峨天皇を指し奉る。○法師……勤操を指す。○最勝……最勝王經のこと。○擧旗鼓……諸宗の大勢の僧を集め大乘小乘・有空等の宗義を張り立てゝ喧しく論說すること。○座主……『要覽』上に曰く「釋氏學解優贍穎拔の者を取つて座主と名く。謂く一座の主なり。古の高僧講者を呼んで高座とす。或は是れ高座の主なり」と。○阿僧……阿僧は阿僧伽（Asaṅga）の畧で阿僧伽を譯して無著といふ。即ち無著菩薩のこと。無著は北印度、犍陀羅國、富婁沙城の人。父は憍尸迦。世親、獅子覺はその弟なり。初め小乘化地部に入りて出家し、實頭羅（Piṇḍola）に從ひて道を得しが、後中印度彌勒菩薩より說法を聞き、得る處あり、爾後大いに瑜伽唯識の教義を唱導す。後、憍賞彌に至りて布教せしが、又阿踰遮に還りて久しくこゝに住せり。西藏傳によれば王舍城において七十五歲にて寂せりといふ。龍樹の中觀論を註釋して順中論を著はす。『西域記』第五に曰く「無著菩薩夜は天宮に昇つて慈氏菩薩の所に於て瑜伽師地論、莊嚴大乘經論、中邊分別論等を受け、晝は大衆の爲めに妙理を講宣しき」と。○龍猛……龍猛は龍樹菩薩のこと。龍樹菩薩が中觀論を著はし、それを無著菩薩が註釋せしをいふ。『西域記』第八に曰く「南印度の那伽閼剌樹那菩薩、唐には龍猛と言ふ。舊に譯して龍樹と曰ふは非なり。幼にして雅譽を傳へ、長じて高名を檀にす。欲愛を捨離し、出家修學して深く妙理を究め、位初地に登る。弟子に提婆といふ有り。智慧明敏にして機神奪悟なり。波吒釐城の諸學人等辟、外道に屈して犍稚を擊たざること十二年、提婆重ねて擊して諸の異道を摧く。王臣慶悅せざるはなし」と。○護法……唯識十大論師の一。南印度の境、達羅毘荼國、建志城の大臣の子。弱冠にして王姫を娶りしが、婚姻の夕、中心憂々として佛前に新誓せりといふ。後、出家して那爛陀寺に居り、世親の教系を繼承してその三十唯識論を註釋し、唯識の正統と稱せらる。嘗て淸辨論師と空有を諍ふ。壽三十二にて寂す。提婆所造の廣百論を註釋して廣百釋論を著はす。○阿闍梨……論主を

指して阿闍梨と稱す。

【筆意】勤操が諸宗の奥旨を極めてゐることを嘆ず。

【講義】勤操大德の德行高きことが天聞に達し奉るに到りしが故に弘仁四年に拔擢せられて律師に任ぜらる。また更に勤操を延屈して大極殿に於て最勝王經を講ぜしむ。講じ了るの日更に紫宸殿に於て諸宗の大德を集めて其の宗義を論說せしむるに當りて勤操を以て座主となす。そして論席に臨んで義理を立てゝ曰く、三論は是れ恰も祖君の宗に當り、法相は卽ち臣子の敎にも匹敵するものである。その理由如何といふに、かの法相の祖無著菩薩は、三論の祖たる龍樹菩薩の所造の中觀論を註釋するに當りてその歸敬の序に於て南無論主と稱して、龍樹に弟子の禮をとり、またかの法相宗の祖たる護法は、龍樹の弟子の提婆の百論を註釋するに當りて同じく歸敬の序に於て南無論主と稱して、提婆に弟子の禮を取つてゐるが故にである。

時敵宗名將及衂旗靡

【訓方】時に敵宗の名將、及衂り、旗靡く。

【字訓】○敵、將……戰陣に喩ふるが故に敵將の字を用ふ。○衂……挫折のこと

【筆意】論戰に勝ちしを明す。

【講義】かくの如く勤操の論陣の鋭鋒に敵宗の名將も及折れ挫け、旗を靡かせて負け退いたのである。

皇帝歎之卽任小僧都兼造東寺別當。今上膺堯之揖讓扇舜之南風。以公智而辯恭而謙。導人不倦濟物方便。擢之大僧都轉造西寺。

【訓方】皇帝之を歎じて卽ち小僧都に任じて造東寺の別當を兼ぬ。今上、堯の揖讓に膺つて舜の南風を扇ぐ。公智あつて辯なり、恭にして謙なり。人を導いて倦まず、物を濟ふに

方便あるを以て之を大僧都に擢んでゝ造西寺に轉ず。

【字訓】○皇帝……嵯峨天皇を指し奉る。○今上……淳和天皇を指し奉る。○堯揖讓……嵯峨、淳和の御兩帝を以て堯舜に比し奉り、以て御讓位の麗はしさを祝し奉る。(六十六頁參照のこと)○南風……『史記』に曰く「舜五絃の琴を作つて南風の詩を歌つて天下治る」と。

【筆意】勤操大德が自證化他の德高きを明す。

【講義】嵯峨天皇、勤操のかくの如く學德高きことを歎じさせ給ふて小僧都に任ぜられ、また東寺の別當職の兼職に就かしめらる。また今上陛下、卽ち淳和天皇に於かせられては嵯峨天皇より、堯の揖讓のそれよりも麗はしき御讓位をうけさせられ給はれて、舜が南方の詩を詠じて天下泰平を歌ひ、その泰平の御世よりもより以上に泰平の御世となされ給ふにあたりて、勤操が智慧あり妙辯に勝れ、恭謹にして謙退、自行の德積み、そして更に人を敎化敎導して倦まず、然も人を濟ふに方便の妙を極むるの化他の德具はれるを以て拔擢して大僧都に任じ、更に造西寺の別當に轉ぜらるゝに至る。

公位彌高志逾下。如晏嬰之守雌。似羅云忍辱。四量爲衣一如爲座。乘無住之騎。唱此不二。慨有爲之人。談彼三空。

【訓方】公位彌高うして志逾下れり。晏嬰が雌を守るが如く、羅云の忍辱に似たり。四量を衣と爲、一如を座とす。無住の騎に乘つて此の不二を唱ふ。有爲の人を慨んで彼の三空を談ず。

【字訓】○位……僧綱の位。○晏嬰守雌……質素なる義。『韓子春秋』に云く「晏嬰字は平仲、齊に相として常に脫粟の飯を食す。食味ひを重くせず」と。○羅云……羅云は羅睺羅尊者で釋尊十大弟子の中に忍辱第一と稱せらる。故に羅睺羅尊者の忍辱の如しの意。『羅云忍辱經』に曰く、「闍の時に羅云輕薄者に向つて食を乞ふ。悋惜にして與へず。羅云頭を打ち破られて血出づ。また沙を擡つて鉢の中に入す。羅云忍を含んで心に報を加へずして云く、我は忍辱を寶とす」と。○四量……慈・悲・喜・捨の四無量心。○一如……『法華經』第四法師品に曰く、「柔和忍辱を衣とし、諸法空を座とす」と。○無住……『金剛般若經』に曰く「無所住にして其の心を生ずべし」と。○不二……『大乘玄論』第二に曰く「今明さく八不の不戲論はたゞ戲論を滅するのみに非ず。不戲論も亦滅す。只八不不二の善是れ戲論に非ず。若し是れ不二ならば還つて戲論を成ず。不二不戲論なりと謂ふには非ず。八不の不に非ずよりんば卽ち戲論滅せず」と。○有爲之人……人は是れ有爲の法なるが故に有爲の人といふ。○三空……無性空・異性空・自性空。

【筆意】勤操大德彌々學德高きを嘆ず。

【講義】勤操大德僧綱の官位彌々高く昇進するに從つて、その心根は益々謙恭にして低く下り、そして更にかの晏嬰の守雌のその如くに質素であり、またかの羅云が忍辱第一とせしその如くに忍辱を守り、更にまた慈悲喜捨の四無量心を衣とし、一切萬法皆空の一如の理を座とし、無所得の空理を騎として乘り、以て八不正觀を唱導して有爲の人を慨み救ひ、三空の理を談じて空理を證らしむ。

所有善業悉皆鑽仰。或勸造煖子諸寺普施。或設老僧衣一心敬供。或調倭曲以沐浴義成。或奏漢樂而詞亨能仁。

【訓方】所有の善業悉く皆鑽仰す。或は勸めて煖子を造りて諸寺に普く施し、或は老僧の衣を設けて一心に敬供す。或は倭曲を調べて以て義成を沐浴し、或は漢樂を奏して能仁に詞亨す。

【字訓】○鑽仰……なす所の善業皆悉く凡人の眞似し、及び難き立派なものばかりで仰ぎたゝへるばかりの意。○煖子……炬燵か若しくば火桶かといへり。○倭曲……『便蒙』に曰く「或る人の曰く、今の和讃其の流なり。浴佛の和讃なるべし。今は傳はらず。爾して或る人の曰く、今の伽陀の曲譜是なり」と。○漢樂……『便蒙』に曰く「大唐の樂なり」と。○詞亨……詞は嗣の寫誤。嗣は祀と同じ。祭なり。亨は獻ずること。○能仁……佛世尊のこと。

【筆意】勤操大德の行爲は皆麗はしき善業にして凡人の眞似し能はざることを明す。

【講義】勤操大德のなす所の行爲は皆悉く麗はしき善業にして凡人の到底眞似し能はざる所のもので衆人の等しく仰ぎたゝへる所である。卽ち或は勉めはげみて煖子を造りて諸寺に普ねく施し、或は老僧の衣服たる綿入れの如きを作りて心を籠めて之をさゝげ供養し、或は倭曲の和讃を唱へて以て義成卽ち釋尊に供養し奉り、また漢樂を奏して佛世尊を祭り供養するなど、どれ一つにしても凡人の思ひもよらぬ善業ばかりである。

禮三千佛名二十一年。講八座法華三百餘會。師吼雅音聽者絕腸。迦陵哀響見者愛死。男女角奔發心。華野忘產設會。職悲調之感也。如來所使非公而誰矣

【訓方】三千佛の名を禮すること二十一年、八座の法華を講ずること三百餘會、師吼の雅音聽く者腸を絕ち、迦陵の哀響見る者愛死す。男女角ひ奔て發心し、華野に產を忘れて會を設く。職して悲調の感なり。如來の使す所公に非ずして誰ぞ。

【字訓】○三千佛……佛名會をいふ。○八座法華……法華八講。○絕腸……哀感のさま。○迦陵……加陵は迦陵頻伽の略で譯して妙音鳥といふ。音聲美妙にして身體常よりも殊なり。之を聞く者耳を側て心を傾け、之を見る者は神ひを恰しめ思を悅しむと稱せらる。○哀……哀は淸なり、愛なり。○角……鬪ふこと。○華野……都鄙。○設會……講じて齋會を設くること。○職……もとより。

○悲調……曲調の哀婉なるものをいふ。○如來所使……『法華經』第四法師品に曰く「如來の遣はす所、如來の事を行ぜしむ」と。

【案意】勤操の所作これ如來の所作に等しきことを明す。

【講義】三千佛の御名を誦じ、禮佛すること二十一年、法華八講を講ずること通計三百有餘席に及び、その說法の音誠に麗はしくして聽く者喜悅し感動すること恰も斷腸する程であり、またその聲の愛音は迦陵頻伽、即ち妙音鳥の如くに美妙にして見聞するものをして恍惚として消え入るが如くならしむ。從つて男女競つて走り來つて聽聞して發心し、かくて都會の者も田舍の者も共に皆仕事を忘れて齋會を設けて大德を請ず。もとより悲調哀婉の妙音によりて人々を感動せしむ。經には如來は使を遣はして如來の事を行はしむと說かれてゐるが今大德こそは如來の遣はされたその使にして、大德を他にして如來の差遣された人は誰れもない。大德こそまさしくその人であるといふべきである。

若乃紫雲涌塔表忠孝之感。神艇泛海現觀聲之應。

【訓方】若し乃し紫雲塔に涌いて忠孝の感を表し、神艇海に泛んで觀聲の應を現ず。

【字訓】○紫雲涌塔……『開書』に曰く「佛名會、八講等の會には塔上に紫雲涌くは忠孝感を表すること。○神艇等……『便蒙』に曰く「或鈔に曰く、勤操嘗て海を渡るときに中ごろにして惡風に遇ふ。是に於て乃ち、或漂流巨海、龍魚諸鬼難、念彼觀音力、波浪不能沒と唱ふ。時に忽ちに神艇海に泛んで其のまさに溺れんとするを拯ふ」と。

【案意】勤操大德の靈瑞を明す。

【講義】勤操が嘗て佛名會及び法華八講を國家のため、親の爲に修し奉るにあたりては紫雲塔上に涌き起れるはこれ忠孝の至誠天に通ぜしの奇瑞であり、また渡海の途、風難に際して觀音を念ずることによりてその危難より救はれたるもこれ法力によく通達し給へるによりて觀念稱名の加持力を蒙れるものである。

無心待扣不簡貴賤。韞響應呼不論晝夜。於戲如知醫王因狂子而滅影。大士弘誓逐醉兒以顯迹。此界憂苦他境歡喜。電影難駐幻化誰久。以天長四年五月七日於中京西寺北院奄然而化矣

【訓方】心無うして扣くを待つこと貴賤を簡ばず。響を韞んで呼ばふに應ずること晝夜を論せず。於戲如知の醫王は狂子に因つて影を滅し、大士の弘誓は醉兒に逐つて以て迹を顯す。此の界には憂苦すれども他境には歡喜せん。電影駐り難し。幻化誰か久しからん。天長四年五月七日を以て中京西寺の北院に於て奄然として化す。

【字訓】○待扣、應呼……問を待つこと。○如知……如實知で佛のこと。○狂子醉兒……『法華經』に於ける譬で迷人をいふ。一切衆生のこと。○電影、幻化……有爲の身をいふ。○中京……上都ともいひ、王都を謂ふ。

【案意】化他の德と入寂とを示す。

【講義】怨心自他の心なくして質問に從つて貴賤を簡ばずして敎化敎導し、如何なる質問にも答へ得る圓明の智を藏して譽きの聲に應同するその如くに怨ちに答へ導くこと晝夜を云ふことなく熱心に敎誨してゐたのである。あゝそれだのに、かの如實知の醫王たる佛は衆生のための故に滅度を示現し、如來大士は弘誓に從つて世間に出興し給ふとか言はれてゐるが、今勤操大德入滅に當りて此の世界に於ては勤操大德の入滅を愁ひ悲しむと雖ども他境に於ては大德の如き如來にも等しき者の來ることを定んで歡喜することであらう。思へば電影駐り難く、幻化の身誰れか久しく保ち得ようや。天長四年五月七日を以て中京西寺の北院に於て奄然として入滅したまふ。

春秋七十夏臘四十七。以十日茶毘東山鳥部南麓。是日有勅贈僧正。詔旨慇懃。九重哀悼四衆含悲。行路掩淚。尊卑爛肝。知與不知誰不哀痛。

【訓方】春秋七十、夏臘四十七。十日を以て東山の鳥部の南の麓に茶毘す。是の日勅有つて僧正を贈らる。詔旨慇懃なり。九重哀悼し、四衆悲しみを含む。行路淚を掩ひ、尊卑肝を爛らす。知ると知らざると誰か哀痛せざらん。

【字訓】○鳥部……京都東山阿彌陀が峯なり。その麓を鳥邊野といふ。○行路……途上を行く他人の義。

【案意】入滅を哀悼す。

【講義】勤操大德入滅の歳は、春秋七十、法臘四十七であつた。五月十日に東山の鳥部の南の麓に於て茶毘に附す。是の日畏くも勅を下し給ふて僧正を贈られ、且つ詔旨慇懃を極はめさせられ、宮中に於かせられても哀悼の意を表せられ給ふ。四衆等しく悲しみ、途上を行く他人も淚を流して悼み、尊卑も等しく肝を爛らす程に哀悼し、勤操を知るものも知らざるものも皆哀痛し、誰れ一人として哀痛せざる者なき程に、勤操大德の入滅を哀痛せし次第である。

弟子僧等願丁氏之孝感。刻于邦之檀木。欲懸日月。憑詞余翰。

【訓方】弟子の僧等、丁氏が孝感を顧て于邦の檀木を刻む。日月に懸けんと欲して詞を余が翰に憑す。

【字訓】○丁氏孝感……丁蘭の孝行を指す。孫盛の『逸人傳』に曰く「丁蘭少くして父母を喪ふ。乃ち木像を刻んで親の形となし、生ける親の如くに事ふ。或る時隣家の張叔の妻來りて借財せんことを乞ふ。丁蘭が妻跪いて木像に報ぜしに、木像悅ばず。以て之を借さず。張叔泥醉して來り、木像を罵り杖を以て其の頭を打つ。丁蘭家に歸りて木像の顏色怡ばざるを見て妻に問ふ。妻具さに始終を告ぐ。丁蘭怒つて劍を奮つて張叔を殺す。吏、丁蘭を捕ふ。丁蘭家を去るに當りて木像に挨拶す。木像丁蘭を見て之れが爲めに淚を垂る。郡縣其の至孝、神明に通ずることを嘉して其の形像を靈臺にうつしたり」と。○于邦之檀木……優塡王が佛像を造りし故事を指す。『西域記』に曰く、「城內の故宮の中に大精舍あり。刻檀の佛像あり。上に石蓋を懸けたり。鄔陀衍那王の作る所なり。初め如來天宮に昇つて母の爲めに說法したまふ。三月還へらず、其の王思慕して形像を圖んことを願ふ。乃ち尊者沒特伽羅子を請じて神通力を以て工人を接て天宮に上り、親ら妙相を觀たてまつつて栴檀を彫刻す。如來天宮より還りたまふときに刻檀の像起つて世尊を迎ふ」と。○日月……日月の天に懸れるが如く永く朽ちざること。

【案意】勤操大德の弟子等より、勤操大德の影讚の文章の作製の依頼を受けしを明す。

【講義】弟子の僧等、かの丁蘭が親の像を刻みて生ける親の如くに事へてその至孝、神に通ぜしとかといふ逸話を顧み思ひ、またかの于塡王が佛を敬慕するの餘り、像を刻みしその如くに、師たる勤操大德の像を刻む。そして更に日月の天に懸れるその如くに永久に勤操大德の行蹟を傳へんものと、その文章の作製を余に憑み來る。

貪道與公蘭膠春秋已久

【訓方】貪道と公と蘭膠なること春秋已に久し。

【字訓】○貪道與公……『便蒙』に曰く「或人の曰く、勤操の大師に於ける沙彌戒の師、三昧耶戒の責なり。故に大師、責位に居らず、亦師位に處らず。貪道と公と蘭膠なりと稱すは以て平交なり」と。○蘭膠……交りの麗はしく堅きこと。

【案意】交友の深くして長きを明す。

【講義】貪道と公と蘭膠の交りを續くることを既に年久しきに亘る。

弘仁七年孟秋率諸名僧於高雄金剛道場授三昧耶戒。沐兩部灌頂。況復祖宗是一法派昆季。含筆欲述不覺潸然。佛城之將人間之導。一何早歸。遺我如睡。哀哉

【訓方】弘仁七年孟秋に諸の名僧を率ゐて、高雄の金剛道場に於て三昧耶戒を授け、兩部の灌頂に沐す。況んや祖宗は是れ一にして法派は昆季なり。筆を含んで述べんと欲するに覺えずして潸然たり。佛城の將、人間の導、一に何ぞ早く歸つて我を遺ること唾の如くにする。哀れなる哉、悲しい哉。

【字釈】○率諸名僧……職衆を率ゐること。○祖宗是一……三論宗も密教もその祖を一にすること。即ち三論宗も龍樹を祖とし、密教も龍樹を祖とするが故に。○法派昆季……法派は法の支流。昆季は兄弟。三論は龍樹の資たる提婆之を弘め、密教は龍樹の資たる龍智之を受傳す。よりて祖は同じであるけれどもその支流に到りては兄弟の關係にあること。○潸然……涕の流るゝさま

【筆意】勤操大德と法緣の深きことを顧思して感慨無量なる義を明す。

【講義】弘仁七年孟秋に諸の名僧を職衆として高雄山寺の金剛道場に於て三昧耶戒を授け、兩部の灌頂を傳授す。思ふにこれ密教と三論とはその祖は同一人たる龍樹であり、その法派に至りて三論は提婆、密教は龍智之を傳ふに至りて恰も昆季の關係となりたるものである。これらの法緣の淺からぬことを文章の上に書き表はさんとするに彼れを思ひ出し、此れを思ひ出されて覺えず涙流るゝ有り樣である。佛城の將、人間の導師たる勤操大德、何ぞかくも早く涅槃に歸入して、我れを殘し捨つること唾を吐き捨てるが如くに無情なるや。誠に哀れなるかな、悲しいかな。

徳廣而繁、跡道淵而事多。述者蔽之三爻含義、而說偈言

【訓方】徳廣うして跡繁し、道淵うして事多し、述者之を蔽す・三爻義を含まん。而も偈を說いて言く。

【字釈】○三爻……『吳志虞翻列傳』第十二の立易注奏に曰く「易道天に在り、三爻にして足んなん」と。三爻は三極を統ぶ。即ち今の義は三爻に天地人三才の一切の義を含藏してゐるその如くに義を含むが如しの意。

【筆意】德行廣繁なるが故に文章に述べ難き義を明す。

【講義】勤操大德の德行たるや廣繁にして事跡誠に多く、その心内に證得せる道たるや誠に深淵にして事跡また多し。かく樣にすべてに亘りて廣繁多事なるが故に述者たる余はその一部分のみしか書き記さず、その大部分は書き洩らし、反つて蔽してゐるであらうことを恐るゝのである。上來述べ來りしすべての事情を、かの三爻に天地間の一切の義を含藏してゐるその如くに偈文の中に攝在せしめ以て次の如く偈を說いて言はく。

菩薩菩薩體何似　顏容酷似世間人
佛陀佛陀是何色　面孔宛如諸趣倫

【訓方】菩薩菩薩體何にか似たる、顏容は酷だ世間の人に似たり。佛陀佛陀是れ何の色ぞ。面孔は宛かも諸趣の倫の如し

【字釈】○面孔……眼、耳、鼻、舌をいふ。

【筆意】菩薩佛の相貌も人間に似たるを明す。

【講義】菩薩達の體及び顏容はどうしてやよく世間の人々似たる。また佛達の色身及び面孔にどうしてやかくも凡夫さながらに似てゐることであらう。

吾師相貌等凡類　心行天殊志若神
三論滿懷悲幻影　一乘韞應愛梁津

【訓方】吾師の相貌は凡類に等しけれども心行は天に殊にして志は神の若し。三論懷に滿ちて幻影を悲しみ、一乘應に韞んで梁津を愛す。

【字釈】○幻影……有爲の人に喩ふ。○愛梁津……好んで世の梁津、即ち救濟者となること。

【筆意】勤操大德の相貌は凡夫に等しきもその心行は懸かに殊なるを明す。

【講義】吾が師の相貌は凡夫に等しきもその心行はるかに殊なりて、志は恰も佛菩薩のそれに等し、即ち三論の妙旨を胸臆に滿たして有爲の一切の衆生を哀れみ悲しみて救ひ、また法華一乘の深旨を胸臆に藏して好んで世の梁津即ち化導者となる。

空裡浮雲幾生滅　園中紅藥爾許春
團團水鏡空而假　灼灼空華亦不眞
爲他而說常談此　聽者歔欷厭苦身
去歲鴻鴈今歲至　東流河水返何辰

【訓方】空裡の浮雲は幾か生滅する、園中の紅藥は爾許の春ぞ。團團たる水鏡は空にして假なり。灼灼たる空華は亦眞にあらず。他の爲に而も說いて常に此れを談ず。聽く者歔欷して苦身を厭ふ。去歲の鴻鴈は今歲も至りなん。東流の河水返んこと何れの辰ぞ。

【字釈】○團團水鏡……團團は圓きさま。水中に寫れる圓月をいふ。○灼灼……盛んなるさま。○歔欷……なげきいたむこと。或はすすりなくこと。○東流河水……逝水逝去の義。○返何辰……死して二度と返り難きをいふ。

【筆意】四譬を擧げて八不中道の觀を述ぶ。

【講義】大空に於ける浮雲は生じては滅し、滅しては生じ轉變極まりなく、また園中の紅の花咲きては散り、散りては咲くこと幾何回ぞ、されど年々歲々同じ花にあらず、有爲無常はこれ浮世の世相である。浮き世の世相はかの水中に於ける團團たる圓月のその如くに假のものであり、灼灼たる空華のその如くに眞實のものならざるなり。他の爲めに常に此の理りを說いて敎化敎導これ勤む。聽聞するもの此の理りを聞きて歔欷して無常におのの苦身を厭ふに至る。去年の鴻鴈今年も亦來る。されど同じ鴻鴈にあらず、東流の逝水流れ去りて再び返へらず。その如くに勤操大德入滅して再び返り難し。

夜臺寂寂星霜久　擧世風誦是公塵
松栢颯颯猿響切　青鸞妙法向誰陳
天長五年四月十三日

【訓方】夜臺寂寂として星霜久し。世擧つて風誦す。是れ公の塵。松栢颯颯として猿の響切なり。青鸞の妙法は誰に向つてか陳ぶ。天長五年四月十三日。

【字釈】○夜臺……長夜臺で墳墓のこと。○風誦……諷は通じて風に作る。諷誦のこと。○公塵……塵は德音のこと、また勤操の作れる偈曲を指すか。○鸞……風の吹き行く聲の形容。○青鸞……人の聲の麗はしきに喩ふ。

【筆意】勤操大德入滅後の哀惜の情を明す。

【講義】勤操大德を葬れる長夜臺の墳墓は靜寂たること年已に久し。世擧つて大德の在りし日の德音を讃ふ。墳墓に植ゑし松栢風に吹き鳴らされ、樹上に鳴く猿の聲も一入哀れである。在世の間は青鸞の妙音を以て說法せしに、入滅の今は何處に於て誰れに向つて說法し給ふや。天長五年四月十三日

一〇四　暮秋賀元興僧正大德八十詩幷序

暮秋賀元興僧正大德八十詩幷序　沙門遍照金剛

【訓方】暮秋に元興の僧正大德の八十を賀する詩幷に序。沙門

遍照金剛。

字訓　○元興僧正……元興寺の護命僧正『元亨釋書』第二に曰く「釋の護命、姓は秦氏、美州各務の郡の人、五歳にして吉野山に入つて晏坐すること數年父母に屬省す。十五にして元興寺の萬耀に依る。十七にして得度。同寺勝虞に從つて唯識を學ぶ。白月には山に入て虛空藏の法を修し、黑月には寺に歸りて誦習す。普光寺に於て唯識論の疏を講ず。忽ちに頂上に舍利を得。弘仁七年僧都に任ぜらる。表を上つて辭讓す。上許さず。山田寺に屏居す。天長四年に僧正と爲る。承和元年九月十一日に元興寺の小塔院に終る。年八十五時に華守法師來つて疾を問ふ。親り音樂天に奮き、薰香室に盈つるに逢ふ」と。

章意　初に題名を揭ぐ。

講義　天長六年暮秋九月に元興寺僧正護命大德の八十を賀する詩井に序文。沙門遍照金剛

夫翔天之鴈不失次第。蚊地之螘亦守陳列。何況天地最靈含識爲首。誰遺尊長老貴眉壽乎。著鄕飲經稱供宿。良有以也

訓方　夫れ天に翔るの鴈も次第を失はず。地に蚊ふの螘も亦陳列を守る。何に況んや天地の最靈、含識の首たる誰れか長老を尊び。眉壽を貴ぶことを遺れんや。禮には鄕飲を著はし、經には供宿と稱す。良に以有り。

字訓　○蚊……虫の行く貌。○最靈……人をいふ。○含識……人をいふ。○眉壽……長壽のこと。○禮……『禮記』を指す。『禮記』に曰く「鄕飲酒の禮は長を尊び老を養ふを明す所以なり」と。○經稱供宿……『月燈三昧經』第六に曰く「當に其の夏腊を問ふべし。若し是れ尊宿ならば供養恭敬し、頭面接足禮すべし」と。

章意　長老の尊ぶべきことを明す。

講義　夫れ天に翔ける鴈も先後次第してその列を乱さず、また地上を行ける螘も亦一列に並びて列次を守りて乱さず。智なき動物に於てすら然り、まして況んや天地間に於ける最靈たる人間、心識を有するものゝ中でその首位に位する所の人間に於ては誰れか長老を尊び、長壽者を貴ぶことを忘れ得ようや從つて『禮記』には鄕に飲酒の禮といふことを明せり、即ち長を尊び、老を養ふ所の飲酒の禮を說けり。また佛敎經典の中には夏腊に長じ、尊宿なるものをば供養恭敬せよと說かれてゐるのも此の理由に基くのである。

元興寺大德僧正。年登八十。智明十二。無著世親之論探奧語。旨

訓方　元興寺の大德僧正年八十に登んで、智十二に明かなり無著世親の論、奧を探り、旨を諳んず。

字訓　○登……段々と進み登ること。○十二……十二部經のこと。『名義集』第九十二分敎篇に曰く「長行、重頌、授記、孤起、無問而自說、因緣、譬喩、及び本事、本生、方廣、未曾有、論義共に十二の名を成ず」と。

章意　護命大德が一切契經并に諸論に通達せるを明す。

講義　元興寺の大德護命僧正、年は八十になり、其の習は佛一代の敎法たる十二部經悉くに就いて究明し、また更に無著、世親等の諸論の奧旨を極めて己心中のものとなせる大德の長老である。

慈恩惠沼之章括文綜義

訓方　慈恩惠沼の章、文を括り、義を綜べたり。

字訓　○慈恩……『佛祖通載』第十二に曰く、「慈恩法師窺基卒す。世壽五十有一。基親豐碩にして長八尺。氣槩萬夫、項上に玉枕あり。十指の紋皆整折して印の如し。見る者霽伏す。心慈あつて善く人を誨ふ。晚節に內院に生れんことを祈る。戒に循ふこと彌々篤し。初め南山の宣律師、律を弘むるを以て有名、五天に震ふ。天厨供饌を感ず。每に基の三車の玩を薄んず。甚だ禮をなさず。基嘗て宣を訪ふ。其の日、午を過ぎて天神乃ち降る。宣責むるに時に後るゝを以てす。天の曰く、適々大乘の菩薩此に在るを見る。翊衛殿なること甚し。故に自つて入ることなし。宣之を聞いて大に驚く。是より先き非公親り西域戒賢師の瑜伽師地唯識宗を授く。基盡く其の妙を領す。源流を恢廓す。天下後世之を尊んで目けて三乘法相顯理宗とし、之を慈恩の敎といふ」と。○慈沼……『宋高僧傳』第四に曰く「釋の慈沼は何れの許の人といふことを知らず。少ふして聲悲なり。始め青衿に預り、庠序に依り、誦習該勉す。法に入つて身を修し、戒範に違せず。乃ち時誘を沼園梨に被る。次に壓きを經論に攻め、善く翻傳に達す。非三藏京に到つて自り、恒に壺奧を窺ふ。後に大乘の基師を親んで更に精博を加ふ。後に諸の疏義を著はす。淄州の沼と號す」と。

章意　諸章の奧義を極め居りしを明す。

講義　更にまた慈恩、慈沼等の諸章に至るまでその文を充分に括囊して、所詮の義理を綜べ居る所の大學者である。

畫則對筌蹄而忘食。夜則觀魚兎而廢寢。是故問津者遠近雲集。懷疾者小長霧合。二美兼修六度具行。可謂佛家之棟梁法門之良將者也

訓方　畫は則ち筌蹄に對して食を忘れ、夜は魚兎を觀じて寢を廢つ。是の故に津を問ふ者遠近雲のごとくに集り、疾を懷く者小長霧のごとくに合る。二美兼修し、六度具に行す。謂つべし佛家の棟梁、法門の良將なる者なりと。

字訓　○筌蹄……能詮の文。○魚兎……所詮の理。○疾……心疾のこと。○二美……福智のこと。或は二利の行をいふ。

章意　護命大德の高德を嘆ず。

講義　畫は筌蹄、即ち能詮の經文を食を忘れて一心不亂に讀誦してその奧旨の体得に之れつとめて佛果の体得にひたすら專念すること甚だ懇ろなるを以て、夜は魚兎即ち所詮の義理を觀念することに甚だ懇ろなるを以てをつとめて佛果の体得にひたすら專念す。是の故に法門を問ふ者遠近より雲の如くに大勢集り來り、心疾に惱む所の青年も老人も共に霧の如くに大勢こぞつて集り來る。また他面には大德は福智の二門を兼ね修し、六度の行を具に行じて菩薩行にこれつとむ。誠に大德こそ佛家の棟梁、法門の良將なりと謂ふべき人である。

銳鋒易脫皐響則達。弘仁太上拔大僧都。天長今上任僧正。人能弘道聞之古。道能通人見于今

訓方　銳鋒脫し易く、皐響則ち達す。弘仁の太上大僧都に拔んで、天長の今上僧正に任ず。人能く道を弘むといふ。之を古に聞けり。道能く人を通すること今に見つ。

字訓　○銳鋒易脫……囊中の銳き錐は其の末外に現れ易し。その如くに勝れたる人は其の名聲が聞え易きに喩ふ。○皐響……九皐の低き澤に於て鳴ける鶴の聲、高き天空に響き亘る義で、名聲天聞に達し來るに譬ふ。○人能弘道……『論語』に曰く「人能く道を弘む」と。

章意　名聲天聞に達し來りて榮進せしことを明す。

講義　かの囊中の銳錐は外に現はれ易きとか、その如く勝れたる人は其の名聲聞え易し。今護命大德の高德の名聲天聞に達し來りて、弘仁の太上は大僧都に拔擢し、淳和帝は僧正に任じ給ふ。古語に人よく道を弘むといふことがあると聞き及んでゐるが、今護命大德の場合に於てはよく道を体得せることによりて官に進む。これ即ち道が人を通ぜしむといふを今現に見ることが出來た。

貧道忝備下菜思齊上聖。慨澆醨於禮義。悲陵遲於道德。是故取鄕飲上齒之禮。仰大士供尊之義。聊與二三子設茶湯之淡會。期醍醐之淳集

【講方】貧道、忝く下棜に備つて上聖に齊しからんことを思ふ。澆醨を禮義に慨んで陵遲を道德に悲しむ。是の故に鄉飲上齒の禮を取つて大士供尊の義を仰ぐ。聊か二三子と與に茶湯の淡會を設け、醍醐の淳集を期す。

【字訓】○下棜……『私記』及び『開書』に曰く、「棜は棜邑とて天子より賜ふ所の地なり、同じ下に居するの義なり。棜は棜に通ず。又宗の字か。此の義ならば『文選』に曰く寮宗を同じうせり」と。善が曰く、寮宗は官なりと。○澆醨……澆も醨も共にうすきこと。○陵遲……丘陵の勢漸く緩慢なること。即ち道德の陵遲が大に廢れたること。○上齒之禮……『禮記』に曰く「昔は有虞氏は德を貴んで齒を尚ぶ。夏后氏は爵を貴んで齒を尚ぶ。殷人は富を貴んで齒を尚ぶ。周人は親を貴んで齒を尚ぶ」と。齒は上のこと。○大士供尊……上にいふ所の稱供宿の義を指す。○醍醐淳集……『大日經疏』第一に曰く「猶醍醐の淳味第一なるが如し」と。今は勝集をいふ。

【事意】護命大德の長老なることを二三子と共に席を設けて慶祝する義を明す。

【講義】貧道、忝なくも護命大德と同じ樣に僧綱の官に補せられ、その下位の官の末席に列つてゐるものであつて、その高德の大德たる護命僧正の如き上聖にも等しき高德者たらんことを常に思ふてゐるものである。近來の世上禮義の道澆醨としてうすらぎ、道德の大道陵遲として癈れて下を憐れみ、上を尊ぶの風習癈る。是の故に禮記に於ける長を尊び、老を養ふ所の鄉の飲酒の禮を思ひ、また經に說かれたる夏爾に長じ、尊宿なるものをば供養恭敬せよとの敎訓を仰ぎ尊び、聊か二三子とともに茶湯の如き麁薄なる會を設けて長壽を祝さんとす。願ふらくはかくの如く貧弱なる會なれどもその志を汲み取つて醍醐の淳味を集めたるが如くなされんことを。

是日也。金風入管玉露泣菊。闍婆奏樂緊落則舞。八音寥亮四衆忘味。言之不足故事詠歌。乃作詩曰

【講方】是の日金風管に入り、玉露菊に泣く、闍婆樂を奏し、緊落則ち舞ふ。八音寥亮として四衆味ひを忘る。之を言ふに足らず。故に詠歌を事とす。乃し詩を作つて曰く。

【字訓】○金風……秋の風○入管……野に立つ竹の穴に風が入つて鳴ること。○玉露泣菊……菊の上に露の玉の浮べるは恰も涕を浮べるに等しきが故にかくいふ。○闍婆……闍婆は乾闍婆で、帝釋天の俗樂神。○緊落……緊落は緊那羅で、天の伎樂神。○八音……金、石、絲、竹、匏、土、革、木の八種類の樂器の音で、今は種々の樂器の音をいふ。○寥亮……聲の高きさま。○言之不足……今奏樂等の會上の儀式の優雅にして麗はしさ之を言語で言ふ能はざること。

【事意】祝賀の會の有り樣を記す。

【講義】是の祝賀會の當日には秋風の金風自然に竹の穴に入りて優雅の音を鳴らし、玉の如き露菊に浮べるは喜びの涕を浮べるに似たり。また天には乾闍婆神が樂を奏し、緊那落神が舞を舞つて居り、種々の音樂寥亮として高らかに鳴つて居り、四衆食を忘れて恍惚とし、その會場の儀式の優雅にして麗はしさは言葉を以て言ひ表はすこと能はざる所であり、また他面に護命大德の高德を逸べるには餘りにもその高德が大にして麗はしく之れを讃へ說き盡くすこと能はざる有り樣である。そこでことさらに詠歌を事とするのみ。よりて詩を作りて之を表はさんとすること左の如くである。

寂業遺敎　轉授其人
三藏稽古　六宗惟新

【講方】寂業の遺敎其の人に轉授す。三藏古を稽へ、六宗惟れ新なり。

【字訓】○寂業……寂業師子で釋迦如來のこと。即ち覺苑の『演密鈔』第五に曰く「疏に鍵爲寂業師子とは釋迦の言、尋常の翻譯には或はたゞ能と云ひ、或は能仁と云ふ。今寂業と云ふは蓋し字門に依つて其の名を立つ。奢字門は一切法寂の義なり。迦字門は一切法造作の義を詮す。造作は即ち業なり。故に寂業師子と云ふなり」と。○其人……『孔叢子』上卷居衛篇に曰く「子思の曰く、苟くも其の人に非れば道傳はらず」と。○六宗……南都の六宗で律、倶舍、成實、法相、三論、華嚴。

【事意】六宗の流布を明す。

【講義】釋迦如來の說き遺されたる敎法を傳授するには、其の敎を受け繼ぐに堪え得る人即ち三藏の玄徵に通曉せる人を選びて之を傳授す。また其の宗敎に於ては、經、律、論の三藏を菩薩聖者がよく考察して如來の眞意を說きて此處に六宗が新に流布せらるゝに至る。

法相之將　推師當仁　瑚璉其體　龍象其身

【講方】法相の將、師を推すに仁に當れり。其の體を瑚璉にし其の身を龍象にす。

【字訓】○當仁……『論語』に「仁に當つては師にだも讓らず」といへり。○瑚璉……黍稷を盛りて宗廟に供ふる器。夏には瑚、殷には璉と云ひ、周には簠簋といふ。轉じて貴き人物に喩ふ。今は貴く安んずること。

【事意】護命大德を法相宗の將に推擧せられたるを明す。

【講義】その六宗の中の法相宗の將に師は推されてその任に於ては他の人々の追隨を許さぬ程傑出して居り。常に戒法を守つて其の体を安んじ、以て海中の龍が他に勝れたるが如く、陸の象が衆に勝れたるその如くに德行人に勝れさせ給ふ。

辯挫邪鍔　智明正因　講經講論　乍秋乍春
聽者市井　學徒雲臻　著世幽趣　非公不陳

【講方】辯は邪鍔を挫き、智は正因に明らかなり。經を講じ、論を講ずること、乍ときは秋、乍ときは春なり。聽く者市井のごとし。學徒雲のごとくに臻る。著世の幽趣公に非れば陳べず。

【字訓】○鍔……刀の刃。○正因……佛法の正因緣。○市井……市井の人、庶人をいふ。○著世……無著と世親。

【事意】護命大德の德を讃ふ。

【講義】その說く處の理論は正しくして邪鍔の邪論を挫き折り、その智は佛法の正因緣を悉く究め明して居り、經を講じ、論を講ずることは或は秋に或は春にと一年中絕ゆることなし。その高德と學識を慕つて庶人も學徒も雲の如くに大勢集り來る。無著、世親の幽遠なる敎理、公によつて始めてその幽趣を說き明されるに至つたといふべきである。

兩帝仰止　四衆梁津　名賓僧正　實德佛隣
伊余尙德　設饌迎賓　絲竹金土　感動鬼神

【講方】兩帝仰止し、四衆梁津とす。名の賓は僧正、實德は佛に隣れり。伊に余德を尙んで饌を設けて迎へ賓す。絲竹金土、鬼神を感動せしむ。

【字訓】○名賓……『莊子』に名は實の賓なりと。護命といふ名に寓味されたる如く長壽なること。○佛隣……菩薩のこと。○絲竹金土……八音の中の四音を擧げて他を畧す。

【事意】賀宴の樣を明す。

【講義】兩帝に於かせられては之を賀みし給ふて官を授け給ひ、四衆は梁津の如くに慕ひ賴りとす。護命といふ名が示すその如くに長壽に在す。その德行は菩薩そのものである。ここに於て余等二三子は高德長壽を尙び尊んで賀宴を設けて迎請して賀意を表す。賀宴の會場には諸天、大德の高德に感動して八音の如き種々の音樂を奏し、舞を舞ふ。

怨親既歡　何況眦親　卓彼人寶　可謂國珍

天長六年九月二十三日沙門遍照金剛上

【訳方】怨親既に歡ぶ。何に況んや眤親をや。卓たる彼の人寶謂ふべし國の珍と。天長六年九月二十三日沙門遍照金剛上つる。

【字釈】○卓……高くすぐれたること。○人寶……『維摩經』に曰く「孰れか人寶を聞いて敬承せざらん」と。

【事意】結文を示す。

【講義】怨も親も既に護命の高德長壽を歡びことほぐ、ましていはんや眤近、親類のもの、喜び壽ぎ祝ふことはいかばかりであらうや。卓偉たる大德はこれ人の寶であり、國の寶といふべきである。天長六年九月二十三日沙門遍照金剛上つる。

一〇五　秋日奉賀僧正大師詩幷序

秋日奉賀僧正大師詩幷序　弟子苾芻中繼

【訳方】秋の日、僧正大師を賀し奉つる詩幷に序、弟子苾芻中繼。

【字釈】○僧正大師……護命僧正を指す。○中繼……中繼の爲めに弘法大師が之の文を草し給ふ。

【事意】題名を掲ぐ。

【講義】秋の日、恩師護命僧正の長壽を賀し奉る詩幷に序文。弟子の僧中繼。

若夫三老五更至尊致肉袒之養

【訳方】若し夫れ三老五更は至尊、肉袒の養ひを致し。

【字釈】○三老五更……『禮記』に曰く「遂に三老五更群老の席位を設く」と。『鄭氏註』に曰く、三老五更は各一人なり。皆年老、事を更て致仕する者なり。天子老を以て先づ之を養つて天下に孝悌を示すなり。名くるに三五を以てすることは象を三辰五星に取る。天の因て天下を照明する所の者なり」と。○肉袒之養……『禮記』に曰く「三老五更に大學に食せしむ。天子袒いで牲を割く。諸侯に弟を敎ふる所以なり」と。

【事意】長老の士を養ふべきことを禮記を引きて明す。

【講義】かの支那の『禮記』の説く所によれば、三老五更の如き長老の臣の爲めには至尊の天子自らが衣を袒いで料理して御馳走して之を敬せし。

崆峒溪水天子遣齋戒之問

【訳方】崆峒溪水天子齋戒の問ひを遣せり。

【字釈】○崆峒……『莊子』第四在宥篇に曰く「黃帝立て天子たること十九年、今天下に行はる。廣成子崆峒の上に在りと聞いて故らに之に見えて曰く、我れ聞く、吾子至道に達せりと、敢て道の精を問ふ。廣成子南首して臥す。黃帝下風に順つて膝行して進んで再拜し稽首して問ふ」と。○溪水……『列仙傳』第一に曰く「呂尙西の方周に適いて南山に匿る。磻溪に釣す。文王聖人を得と夢て尙を問ふて遂に載せて歸る」と。また『六韜』第一文師篇に曰く「文王乃し齋すること三日」と。

【事意】黃帝や文王が賢哲の師を敬せし故事を引きて師の敬すべきことを明す。

【講義】かの黃帝は廣成子を再拜稽首して之に問ひ、また文王は齋戒すること三日にして呂尙に問ふと稱せらる。

況復巖下投身藪中捨位斷臂示誠割體表信竭求法之思恥殉道之慇乎三世索哆因之得果十方如知修之證道

【訳方】況んや復、巖下に身を投じ、藪中に位を捨つ。臂を斷つて誠を示し、體を割いて信を表はし、求法の思ひを竭くし、道を殉るの慇なることを恥するをや。三世の索哆之に因つて果を得、十方の如知之を修して道を證す。

【字釈】○巖下投身……雪山童子が諸行無常等の四句の半偈を聞かんが爲めに身を羅刹に施せし說話で、法及び師を重んずること。『涅槃經』の故事。既に第七卷清丹州達嚫文に出づ。○藪中捨位……善無畏三藏が王位を藪中、卽ち佛門に避けし故事を指す。既に第二卷憲果碑に出づ。○斷臂……慧可禪師が雪中に臂を斷ちて師に敎を乞ひし故事。第七卷に出づ。○割體……常啼菩薩が般若を求むる時、その左臂を割りて血を出し、また右の髀を割りて皮骨を地に置き、骨を破りて髓を出せし故事。第七卷に出づ。

【事意】求法の志の深切なる義を明す。

【講義】さればましてやかの雪山童子が、求法の爲めに巖下に身を投じたるが如き、またかの善無畏三藏が寶位を佛門の林中に避けたるが如き、またかの慧可禪師が雪中に臂を斷ちて求法の誠心を示せしが如き、またかの常啼菩薩が求法の爲めに體を割きて信心を表はせしが如き、何れも皆求法に思ひを竭し道に身も心も捧げて殉ずる志を有する人に於ては猶更ら敬養すべきである。三世の薩埵は之れによりて佛果を得られたのであり、十方の如來は之を修して道を證得し給はれたのである。

粤我大師僧正親敎。稟氣清了智則逾藍。體居非巨心則入神。三學兼洞六度周備。緇素之歸憑人天之導師。○○三公師之事之。四海六趣父之母之

【訳方】粤に我が大師僧正、親敎氣を稟けたること清了にして智は則ち藍に逾えたり。體非巨に居て、心則ち神に入る。三學兼ね洞かにして六度周く備ふ。緇素の歸憑、人天の導師なり。○○三公之を師とし、之に事ふ。四海六趣之を父とし、之を母とす。

【字釈】○親敎……和尙のこと。○逾藍……青きこと藍より出でゝ藍よりも青しの義で、師よりも勝れたるに喩ふ。○非巨……『抄』によれば人体は常の人の如くなれども心は廣大にして神通に入るとの意であると。一說には巨は臣の寫誤ならんかと云へり。

【事意】護命僧正の高德を讚ふ。

【講義】こゝに我が恩師僧正護命和尙、稟性清了にしてその智慧師よりも勝れ給ひ、その體は常人の如くなれどもその心は廣大にして神變不思議の神通を證得し給ふ。戒定慧の三學に兼ね通じ、六度周ねく修し、以て智德兼備し給ふ此の故に僧俗の歸憑とする所であり、人天の大導師として仰信せらる。三公之を師とし、之に事ふ。四海六趣の一切の有情之を父の如くに、之を母の如くに慕ひ、敬ひ、尊ぶ。

弟子中繼幸遇大師。執茅灑水三十餘年于今矣。提我童耳開我蒙心。日夕不憚示法門之奧義。寒暑不倦賜成佛之徑路。一句一偈越滿界之財。片言片字誰忘捨命之恩。每念此事寢食不安

【訳方】弟子中繼、幸に大師に遇ひたてまつつて茅を執つて水を灑ぐこと今に三十餘年。我が童耳を提み、我が蒙心を開く。日夕に憚からずして法門の奧義を示し。寒暑に倦まずして成佛の徑路を賜ふ。一句一偈滿界の財に越えたり。片言片字誰れか命を捨つるの恩を忘れん。此の事を念ふ每に寢食安らかならず。

【字釈】○執茅灑水……灑掃をいふ。茅の草座を敷き、水を灑ぐこと。○提我童耳……童耳を提げて面前に之を命ずることで、事を諭すに詳說にして懇切なる

をいふ。○蒙心……昧心のこと。○偈越……偈越の間に『大師全集』には「盡」の字あり。○湍界之昏……三千大千世界に滿つる處の七寶聚のこと。○捨命之恩……法の爲めに身命を惜まずして敎化敎導せし恩德。

【會意】懇切なる提撕の師恩を明す。

【講義】弟子中繼幸ひに恩師護命大德に遇ひたてまつつて弟子となり、灑掃して事へること今日に至るまで三十有餘年に及ぶ。その間、我が童耳を提げて懇切に諭し、我が闇昧の心を開明するに日夕を顧ることなくして常に法門の奧義を示說し給ひ、寒暑に於ても倦まず、捲ゆまず成佛に至る要道を敎へ給ふされば師より敎へ賜ふ所の一句一偈といふものは自分にとつては三千大千世界に滿てる七寶聚よりも貴きものであり、その片言片字にも師の尊き熱情が籠つてゐるのであるが故に、誰れかこの不惜身命の師恩を忘れようや。此の師恩の高大さを思ふ毎に寢食も安らかならざる有り樣である。

加以大師壽則隣重耳現生之壽齡則及釋尊示終之年一喜一悲心魂易感

【講方】加以、大師壽は重耳、生を現せしの壽に隣り、齡は釋尊終を示すの年に及ぶ。一びは喜び、一びは悲んで、心魂感じ易し。

【字訓】○重耳現生之壽……老子が八十一才にして生れしことの故事を指す。『史記』老子列傳第三に曰く、「老子は楚國苦縣の瀨鄉、曲仁里の人、姓は李、名は耳、字は伯陽、一名重耳、外の字は聃」また『河上公老子經序上』に曰く「八十一歲にして天の太陽の曆數に應じて生る」と。また『玄妙內篇』に曰く、「李母懷胎八十一歲李樹の下に逍遙す。廼ち左腋を割て生ず。生じて白首なり。故に之を老子と謂ふ」と。○釋尊示終之年……『最勝王經』第一壽量品に曰く「何の因緣を以てか釋迦牟尼如來壽命短促にして唯八十年なる」と。

【會意】師の長壽を祝ぐと共に他面にまた老年を氣遣ふ旨を明す。

【講義】更に加ふるに、大師命長き點からいへば未だ老子の生年の八十一歲に屆かぬものであるが故に老子の如くまだまだ長命することであらう、併しその年齡からいへば釋尊入滅の年齡たる八十歲に相當するものなるが故に心配に堪えぬ。彼此思ひ合はすとき一びは喜び、一びは悲しみ、悲喜交々に心に感ずる心第である。

謹捧十八種之道具表不共之佛法

【講方】謹んで十八種の道具を捧げて不共の佛法を表し。

【字訓】○十八種之道具……大乘菩薩の修行する道具。卽ち『梵網經』下卷菩薩心地品に曰く「若し佛子常に二時に頭陀し、冬夏に坐禪し、結夏安居すべし。常に楊枝、澡豆、三衣、瓶鉢、坐具、錫杖、香爐、漉水囊、手巾、刀子、火燧、鑷子、繩床、經律、佛像、菩薩形像を用ふ。此の十八種のものは常に其の身に隨ふこと鳥の二翼の如くすべし」と。○不共之佛法……小乘に共せざる所の大乘の法。

【會意】正しく師訓を體し、師の敎を奉ず旨を明す。

【講義】謹んで大乘菩薩修行必携の十八物を捧持し、以て大乘の法の修行者たることを表はし。

調二四音之伎樂顯正道之法味伏乞大師慈哀納受

【講方】二四音の伎樂を調へて正道の法味を顯はす。伏して乞ふ、大師慈哀納受したまへ。

【字訓】○二四音……八音のこと。今は說法に喩ふ。○正道……正しき佛道の妙理。一說には正道は八正道分なりともいふ。

【會意】恩師の訓諭に從つて授り得た所の宗旨を宣布せんことを誓ふ。

【講義】更に八音を調へて正しき佛法の妙理を顯揚し、宣布せんとす。伏して乞ひ奉る、恩師大德よ慈愛哀愍を垂れ給はんことを。

于時天氣清山林錦蔡沈壁傍鴈翔雲端松竹懸琴桂影瑩鏡對斯節物誰不述懷乃賦詩曰

【講方】時に天氣清く、山林錦のごとし。蔡、壁の傍に沈み、鴈、雲端に翔る。松竹琴を懸け、桂影鏡を瑩けり。斯の節物に對つて誰れか懷ひを述べざらん。乃ち詩を賦して曰く。

【字訓】○蔡……こほろぎ。○桂影……月のこと。

【會意】恩師を自然の景物に響へて感慨深きことを明す。

【講義】時に正に晩秋の候、秋氣清く、山林紅葉して錦を織れるが如し。蟋蟀壁の傍らに潛み、鴈雲間を飛び去る。松竹秋風に鳴りて琴を懸けたるが如く、月鏡の如くに清く澄めり。此の風景景物に接するとき誰れか抱懷を述べずに居られようや。乃ち詩を賦して曰く。

秋風颯颯飄黃葉　桂月團團泣白露
蟲響悲哀愍草間　鴈聲斷續疎天路

【講方】秋の風颯颯として黃葉を飄へす。桂月團團として白露に泣く。蟲の響き悲哀して草の間に愍しみ、鴈の聲斷續して天路に疎かなり。

【字訓】○颯颯……風の聲。○桂月……月の異名。○團團……圓きさま。○泣白露……白露涙の如きをいふ。

【會意】自然の景物を叙ぶ。

【講義】秋の風颯颯と吹き來りて黃葉を飄へし、桂月團團として白露に影じ恰も涙の光るが如し。晩秋の蟲息も絕え絕えに草間に鳴けるは一入悲哀をそそり、鴈の聲まま斷續して天空に響き、ぽつぽつと飛んでゐるのも哀れである。

大師今歲臨重九　經論講談幾許度
悲智津梁比舟筏　怨親兼愛濟緇素

【講方】大師は今歲重九に臨めり。經論講談すること幾許の度ぞ。悲智の津梁は舟筏に比す。怨親兼愛して緇素を濟ふ。

【字訓】○重九……九を重ねる義で、八十一をいひ、今は概數をいふ。○兼愛……兼愛して私なきこと。怨親平等の愛。

【會意】護命大德の德を讚ふ。

【講義】恩師大德は今年八十歲となる。その間經論を講談すること幾許回數なりし。大悲大智を以て人々をして此岸より彼岸に導き渡すこと恰も舟筏に等し怨親平等に兼愛し、緇素を論ずることなく皆悉く拔濟し給ふ。

提我童蒙灑醍醐　開余生瞽示正路
粉身碎體何能答　唯憑風疾白牛輅
天長六年九月十一日

【講方】我が童蒙に提みて醍醐を灑ぐ。余が生瞽を開いて正路を示す。身を粉にし、體を碎いても何ぞ能く答せん。唯風のごとくに疾き白牛の輅を憑む。天長六年九月十一日。

【字訓】○醍醐、白牛……一乘法華の敎理を指す。

【會意】恩師の鴻恩に報ぜんことを期して結言とす。

【講義】我が蒙昧の童耳を提げて法華一乘の醍醐の妙理を灑ぎ敎へ給ひ、余が生瞽の闇昧の心を開明して佛道の正路を啓示し給ふ。この高大無邊の貴き師恩に對しては身を粉にし、體を碎いて一生懸命に報恩致すとも何ぞ能く報答し奉り得ようや。たゞ風の如き疾き大白牛車の法敎たる法華一乘の法門の功德を憑みて恩師に報ひ奉らんことを期するのみ。天長六年九月十一日。

一〇六　爲泰範答叡山澄和尙啓書一首

泰範叡山の澄和尚に答ふるが爲の啓書一首

【題方】○泰範……初め寂澄に師事し、天台を學びて聲譽あり。乃ち弘仁元年正月十九日比叡山に在りて寂澄と相謀り、住持佛法の三章を立てゝ寺規を定む三年十二月十四日高雄山に到り、寂澄等と共に弘法大師に從ひて胎藏界灌頂を受け、四年三月六日圓澄光安等と共に更に金剛界灌頂に浴す。爾來弘法大師に隨侍して密乘を究む。寂澄之を惜み屢々書を致して歸山を勸むれども遂に叡山に歸へらず。此の一文はその時の寂澄に對する返書で、弘法大師がその文を撰し給ひしもの。

【音意】初に題名を掲ぐ。

【講義】泰範、比叡山の寂澄和尚に返答せんが爲の啓書一首。

泰範言伏奉今月一日誨。一悚一慰。兼蒙貺十茶。喜荷無地。仲夏陰熱。伏惟和尚法體如何

【講方】泰範言す。伏して今月一日の誨を奉つて一びは悚き一びは慰す。兼て十茶を貺ることを蒙る。喜荷するに地無し。仲夏陰熱す。伏して惟れば和尚法體如何ん。

【字訓】○今月……五月のこと。○誨……命のこと。○悚……怖るゝこと。○貺……たまもの、たまふ。○十茶……十袋の茶を指すならん。○喜荷……荷は荷恩、恩を荷つて喜ぶこと。○仲夏陰熱……仲夏は五月、陰熱は光線熱することで、暑熱をいふ。

【音意】寂澄和尚の厚宣を謝すると、時候の挨拶とを明す。

【講義】泰範言す。伏して今月一日の書面による命を受け奉つて一びは怖き、一びは自ら慰さむ。また同時に十茶を送り賜ふ。御厚情忝けなく恐縮に堪えざる所である。さて時下仲夏、暑熱甚し。法體安否如何でありますや、御伺ひ申し上ぐ。

此泰範蒙恩。今月九日從馬州還便過乙訓寺。即承遊化北院。便擬就謁。緣客中煩碎。不遂志願。悚息何言。恕非故怠幸甚幸甚

【講方】此に泰範、恩を蒙つて今月九日に馬州從り還る便りに乙訓寺に過ぎる。即ち北院に遊化することを承はる。便ち就いて謁せんと擬するに客中の煩碎に緣つて志願を遂げず悚息何んが言さん。故怠に非ることを恕らば幸甚幸甚。

【字訓】○蒙恩……上の今月一日誨を奉るといへるを指す。○馬州……但馬國のこと。○乙訓寺……京都府乙訓郡乙訓村今里にあり。○北院……何れの北院なるや明白ならず。北白川の北院、西寺の北院、西大寺の北院等の說あり。○煩碎……多忙のこと。○悚息……懼れて長息すること。

【音意】乙訓寺に逗留するに至りし所以を明す。

【講義】こゝに泰範今月一日の命を蒙つて今月九日に但馬國より還へり來るついでに乙訓寺を訪ふ。然るに和尚は北院に遊行化益したまふと承る。よりて北院に參上して拜眉せんと欲してゐたのであつたが來客等ありて多忙を極めたるを以てその志願も果すこと能はざりし次第である。かゝる有り樣で思ふことならざるを以て悚息として懼れ嘆息するのみにて何をか申さん。たゞ故意に怠けたるに非ざることを御賢察下されば幸甚至極である。

告中云。共住生死。荷負衆生。同遊四方。宣揚天台宗者。伏奉慈約。喜躍難喩。若使附龍尾以揚名。寄鳳翼以顯行。則蚊蝱之質。不勞而凌雲漢。無筋之蝗。無功而飲清泉。鄙陋之望。於此足矣。何亦更加珍重珍重

【講方】告の中に云く、共に生死に住して衆生を荷負し、同じく四方に遊んで天台宗を宣揚せん者り。伏して慈約を奉るに喜躍喩へ難し。若し龍尾に附いて以て名を揚げ、鳳翼に寄つて以て行を顯はさしめば、蚊蝱の質勞せずして雲漢を凌ぎ、無筋の蝗功無うして清泉を飲まん。鄙陋の望み、此於足んぬ。何ぞ亦更に加へん。珍重珍重。

【字訓】○共住――天台宗者……寂澄和尚の詞。○荷負衆生……一切衆生を救濟すること即ち『華嚴經』第二十三十廻向品に曰く「一切衆生を荷負して解脫せしめんと欲するが故に」と。○慈約……慈悲の契約。○龍尾、鳳翼……龍及び鳳を傳敎に比す。『文選注』に曰く「龍鱗に攀し、鳳翼に附くに非ずんば趁り競つて何んが爲めにか忽に此に遊ばん」と。○蚊蝱……蝱は蚋の寫誤ならん。蚊蚋は蚊も蚋も共に蚊。泰範に喩ふ。○蝗……螟の寫誤ならむ。螟はミミズのこと。泰範に喩ふ。

【音意】寂澄和尚の恩命を謝する旨を明す。

【講義】五月一日の恩命の中に仰せられるに、共に生死に住して一切の衆生を荷負して救濟し、同じく四方の國に遊化して天台宗を宣揚せんと。泰範伏して此の慈悲の契約を受け奉つて喜躍すること此の上もなく有り難く思ふものである。若し和尚の如き大德、即ち龍尾に附攀して名を揭げ、和尚の鳳翼にとまつて以て他の行を顯はさしむるといふことは、自分の蚊蚋の如き微力の器の者も何等勞せずして雲漢に上り、また自分は螟の如き無力のものであるけれども功勞なくして淸水を飲むに至り得ることであつて鄙陋の自分としては望み此れに過ぎたるはなく、此れ以上に更に何をか加へんや。誠に有り難き極みである。

又云。法華一乘眞言一乘有何優劣者。泰範智昧菽麥。何辨玉石。敢當高問。深以悚息。雷音難忍。敢陳管見。

【講方】又云く、法華一乘と眞言一乘と何の優劣か有るや者り泰範智菽麥に味し。何ぞ玉石を辨じて敢て高問に當つて深く以て悚息す。雷音忍び難うして敢て管見を陳ず。

【字訓】○法華――優劣……寂澄和尚の書中の詞。○菽麥……まめとむぎで形異る故に別ち易し。故に以て愚者に喩ふ。

【音意】寂澄和尚の高問に對して答ふる旨を明す。

【講義】又仰せられるに、法華一乘と眞言一乘と何の優劣淺深あるやと。泰範淺智愚昧にして菽麥すらも辨じ難く、況んや何ぞ玉石を辨じ得んやといへる程に愚かな者であるが故に、和尚のかゝる高問に當つては深く懼き嘆息するのみ。されど來る所の和尚の雷音高うして捨て置き難き故に、管を以て天を窺ふ程の淺智を以て今陳答せん。

夫如來大師隨機投藥。性欲千殊藥種萬差。大小並鑣。一三爭轍。權實難別。顯密易濫。自非知音。誰能別之

【講方】夫れ如來大師は機に隨つて藥を投げたまふ。性欲千殊にして藥種萬差なり。大小鑣を並べ、一三轍を爭ふ。權實別ち難く、顯密濫し易し。知音に非ず自んば誰か能く之を別たん。

【字訓】○性欲……本性欲望のこと。『大日經疏』第一に曰く「性欲とは欲をば信意好樂に名く。性をば積習に名く。相は性に從つて生ず。欲は性に隨つて行を作す」と。○一三……一乘と三乘。○知音……知法の人に喩ふ。『呂氏春秋』第十一仲冬記に曰く「晉の平公、大鐘を鑄る。師曠が曰く、調はず。請ふ更に之を鑄らんと。平公の曰く、工皆以て調へりとす。師曠が曰く、後世知音の者あらば臣切に君の爲に之を聆づ」と。

【音意】佛の說法は隨機說法なるが故に法門に多種ありて、而もその分ち難き義を明す。

【講義】夫れ佛世尊は機根に隨つて敎藥を設けたまふ。然るにその機根の性欲千殊萬差なるが故に、その敎藥も亦千殊萬差となる。即ち大乘、小乘數多並び

一乘三乘その教法を鎔ひ、權教實教別ち離く、顯教密教濫雜し易し。知法の人にあらざれば誰れかよくこの區別を辨別せんや。

雖然法應之佛不得無差顯密之教何無淺深法智兩佛自他二受顯密別說權實有隔所以耽執眞言醍醐未遑瞰嘗隨他之藥又自行有則化他有位澄瑩應物非時不能泰範未逮六淨除蓋之位誰能堪出假利物之行利他之事悉讓大師伏乞垂寬恕弟子深幸也

【讀方】然りと雖ども法應の佛差無きことを得ず。顯密の教何ぞ淺深無からん。法智の兩佛、自他の二受、顯密說を別にし、權實隔て有り。所以に眞言の醍醐に耽執して未だ隨他の藥を瞰嘗するに遑あらず。又自行則有り、化他に位有り澄瑩して物に應ずること時に非れば能はず。泰範未だ六淨除蓋の位に逮ばず。誰か能く出假利物の行に堪へん。利他の事は悉く大師に讓りたてまつる。伏して乞ふ。寬恕を垂れば弟子が深き幸ひなり。

【字釋】○法應……法身如來と應化身。○法智……理法身と智法身。○自他……自受用身と他受用身。○顯他之藥……隨他語の方便門の教藥。○自行有則……自ら修行するには何れの宗にてもそれ〴〵軌則あること。○有位……六淨除蓋を指す。即ち衆生を化益するためには密乘には二地以上、大乘には初地以上。此れまでは自證分に屬す。○澄瑩……修行に喩ふ。即ち一心を鏡の如くに淸淨に瑩がくこと。○六淨……六根淸淨の位にして初地をいふ。即ち『摩訶止觀』七之三に曰く「若し六根淸淨に至るを初依の人と名く。所說の法あるを亦信受すべし。一音遍滿し、聞く者歡喜す。是れ化他の位なり」と。要するに六根淨は圓教の十信位にして、界內外、見思塵沙の惑を盡し、從空入假して假觀現前す。故に出假といふ。○除蓋……除一切蓋障三昧にして眞言行者初地に入りて法明道を證する三昧をいふ。此の三昧に住するとき、煩惱障、業障、生障、法障、所知障の五蓋障を除き、煩惱業苦の三道悉く淸淨に除滅す。此れより密教利物の位に當る。

【會意】能說の佛身に優劣あり、隨つて所說の教說に淺深勝劣ある義を明す。

【講義】然りと雖ども法身佛と應身佛との間には優劣の差別なきことを得ず、從つてまた顯教と密教との間にどうしてや淺深の隔てなきを得んや。理智二法身の說法と自受他受二身の說法とは自らそこに異りがあり、權教と實教とはそこに隔りがある。この故に自分は今勝れたる眞言の醍醐の妙教に耽り執着してゐるために隨他意の教藥たる顯教を味ふ暇もなき有り樣である。また凡そ修行にはそれ〴〵宗に從つて軌則があり、また化他せんにはそれ〴〵宗に從つて定められたる地位がある筈であつて、自心を澄瑩して利他の行に應ずるにはその時節の至るを待たねば能はざる所である。泰範は未だ六根淨、除一切蓋障三昧等の位に及ばず、未だ自行に滿たざる故に利他利物の行を堪ふること能はざる故に、利他の事業は悉く寂澄和尙に讓りたてまつる。伏して乞ふ用捨を垂れたまへば我が深幸とする所である。

所前期建崇天台一乘今則諸佛加護國主欽仰百官崇重四部耽翫四海同仰三千達者先願已足踊躍踊躍珍重珍重

【讀方】前に期せし所は天台一乘を建て崇めんと。今は諸佛加護し、國主欽仰す。百官崇重し、四部耽翫す。四海同じく仰ぎ、三千の達者あり。先の願ひ已に足んぬ。踊躍踊躍珍重珍重。

【字釋】○四部……比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。○達者……好く理に通達せるもの。○踊躍……をどりたちてよろこぶこと。

【會意】初期の目的を果せし故に歸へらざる旨を明す。

【講義】最初期せし所は天台一乘の教理を建て、崇めんことであつた。然るに今や天台宗は諸佛の加護を蒙り、畏くも、國主の欽仰を得奉り、他面には百官崇重し、四部の衆耽翫し、四海の同胞同じく仰ぐに至り、宗義に通達せる者にても三千の多きに及び、その繁盛たるや、此の上もなし。從つて前に誓ふ所の願は事足んぬ。これ慶賀に堪へず、踊躍たり。珍重珍重。

泰範自行未立日夕劬勞若不責狂執弟子望足身避山林丹誠何忘謹因某甲奉狀不宣弟子泰範和南

【讀方】泰範自行未だ立せず、日夕に劬勞す。若し狂執を責めずんば弟子が望み足りなん。身山林に避るとも丹誠何ぞ忘れん。謹んで某甲に因て狀を奉る。不宣。弟子泰範和南。

【字釋】○劬勞……苦勞すること。○狂執……狂亂して眞言宗に耽執することで謙退の語。○避山林丹誠等……和尙と我れと山川を隔てども和尙の恩澤の丹誠決して忘れぬの意。○和南……禮拜のこと。

【會意】師の下へ歸へらざることの許諾を乞ふて結言とす。

【講義】泰範自行未だ滿足せずして日夕に修行し、これ苦勞に務む。若し幸ひにも狂亂して眞言に耽執することを責め給はざれば弟子が望み足りる所であらう。我れと和尙と遠く山川を隔つれども和尙の恩澤の丹誠いかでか忘れようや、終生忘れ得ぬ所である。謹んで某甲に托して狀を奉る。不宣。弟子泰範和南。

一〇七　答叡山澄法師求理趣釋經書

答叡山澄法師求理趣釋經書一首

【讀方】叡山の澄法師、理趣釋經を求むるに答ふる書一首。

【字釋】○理趣釋經……理趣釋又は釋經とも云ふ。大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋の異名。金剛薩埵の撰。二卷。不空譯。金剛頂經第六會の說なる理趣經を釋するに十八會を以てし、各段に品名を附し、又各々曼荼羅を說く。理趣經註疏中極めて重要なるものである。

【會意】初に題名を揭ぐ。

【講義】比叡山の寂澄法師が理趣釋經を借用せんことを求め來るに對してその返答の書一首。

書信至深慰下情雪寒伏惟止觀座主法友勝常貧道易量

【讀方】書信至つて深く下情を慰む。雪寒し、伏して惟れば止觀の座主法友勝常なりと、貧道量り易し。

【字釋】○書信……書狀音信のこと。○下情……謙退の御詞。○止觀……所觀の法を以て能觀の人を著はす。即ち寂澄法師のこと。○勝常……常に堪へて無事なること。○易量……思量を安んずることで安心すること。

【會意】時候の挨拶を明す。

【講義】書狀の音信來りて深く余が心をなぐさめ安んず。時下雪深うして寒冷酷し、止觀座主法友には此の寒冷に堪へて御安泰なりとの旨を聞きて、貧道安心致せり。

貧道與闍梨契積有年歲常思膠漆之芳與松栢不調乳水之馥將芝蘭彌香

【讀方】貧道、闍梨と契れること積んで年歲有り。常に思はく膠漆の芳松栢と與に調まず、乳水の馥、芝蘭と將に彌香

しからん。

【字訓】○膠漆……交はりの堅きこと。○芝蘭……香しき交はりのこと。

【會意】大師と寂澄法師と交友の堅く香しきことを明す。

【講義】貧道と寂澄闍梨とは交はりを結んでより既に年久し。常に思ふに、その交友の堅きこと膠漆の如くにして、松栢の如くに凋まず、益々堅からんとしまたそれは乳水の交りの如くにして、一味和合し、芝蘭の如くにますます香しからんとする間柄である。

舒止觀羽翼高翥二空上駟定慧驥騮遠跨三有之外。分多寶座弘釋尊法。此心此契誰忘誰忍。雖然顯教一乘非公不傳。祕密佛藏唯我所誓。彼此守法不遑談話。不謂之志何日忘矣

【譯方】止觀の羽翼を舒べて高く二空の上に翥り、定慧の驥騮を駟せて遠く三有の外に跨らん。多寶の座を分ち、釋尊の法を弘めんと。此の心此の契り誰れか忘れ、誰れか忍ばん然りと雖ども顯教一乘は公に非れば傳へず、祕密佛藏は唯我が誓ふ所なり。彼れ此れ法を守つて談話に遑あらず。不謂の志、何れが日にか忘れん。

【字訓】○二空……人法二空。○驥騮……駿馬のこと。○三有……三界。○分多寶座……二佛同座を以て自ら相共に弘通するに喩ふ。『法華經』第四見寶塔品に曰く「爾の時に多寶佛、寶塔の中に於て半座を分ちて釋迦牟尼佛に與へて是の言を作したまはく、釋迦牟尼佛此の座に就きたまふべし」と。

【會意】共に佛法を宣布せんと約束せしことを明す。

【講義】止觀の羽翼を舒べて高く人法二空の上に飛び至り、定慧の驥馬に乘りて遠く三界の外に跨り越え、かくて多寶の座を分ちて相共に釋尊の法を弘布せんと約束せし、その心、その契り誰れか忘れ、誰れか忍びん。然りと雖ども顯教の一乘の法は公にあらざれば傳へず、祕密佛教はたゞ我れのみ誓ひを立てゝ傳受せし所である。公に於ても余に於ても共にその法を受け守つて、多忙を極め、共に談話するの遑とてもなき有り樣である。併し逢つて話す機會はなくとも平生に於て互に心にいつくしんで居ればその志は永久に忘れざる所であらう。

忽開封緘具覺覺理趣釋。雖然疑理趣多端。所求理趣指何名相。夫理趣之道釋經之文。天所不能覆。地所不能載。塵刹之墨河海之水誰能敢得盡其一句一偈之義乎。自非如來心地之力。大士如空之心豈能信解受持乎

【譯方】忽に封緘を開いて具に理趣釋を覺ることを覺んぬ。然りと雖ども疑ふらくは理趣端多し。求むる所の理趣は何れの名相を指すぞや。夫れ理趣の道、釋經の文、天も覆ふふこと能はざる所、地も載ること能はざる所なり。塵刹の墨、河海の水も誰れか能く敢へて其の一句一偈の義を盡くすことを得んや。如來の心地の力大士如空の心に非ず自りんば豈能く信解し、受持せんや。

【字訓】○理趣之道……理趣の所詮の理。○釋經之文……理趣の能詮の文。○所不能覆等……理趣の義の廣大さを喩を以て明す。○塵刹之墨……三千大千世界を盡抹して墨となすこと。○如來心地之力……心に能生の可依止の義あり故に心を地に喩ふ。即ち佛の心力をいふ。○大士……菩薩のこと。○如空……智慧の平等なるをいふ。

【會意】理趣の廣大なる義を明して、所求の理趣何れにあるかを徵したまふ。

【講義】さて書狀に接し直ちに封緘を開いて具さに理趣釋を覓められてゐるといふことを知りぬ。然りと雖ども此處に疑義の生ずることは一口に理趣といへども理趣にはその含む處の義理多種多端なるを以て求めらるゝ所の理趣はその中の何れの名相を指してゐられるのか判然せぬことである。夫れ思ふに理趣の道たる所詮の理、また釋經の文たる能詮の文は廣大にして天も覆ふこと能はざる所であり、地も載することは能はざる所であり、また三千世界の地を墨とし、三千世界の河海の水を以つて磨つて、之を盡くとも、能く其の一句一偈の義趣を盡し能はざる所である。それは如來の心力の力菩薩大士の如空の心でなかつたならばいかでか能く信解し、受持するを得んやといふ程に廣大である。

余雖不敏略示大師之訓旨。冀子正汝智心淨汝戲論。聽理趣之句義密教之逗留。夫理趣妙句無量無邊不可思議。攝廣從略。棄末歸本。且有三種。一可聞理趣。二可見理趣。三可念理趣。若求可聞理趣者。可聞者則汝聲密是也。汝口中言說卽是也。更不須求他口中。若覓可見理趣者。可見者色。汝四大等卽是也。更不須覓他身邊。若索可念理趣者。汝一念心中本來具有。更不須索他心中。

【譯方】余不敏なりと雖ども略大師の訓旨を示さん。冀くは子、汝が智心を正しくし、汝が戲論を淨めて理趣の句義、密教の逗留を聽け。夫れ理趣の妙句無量無邊にして不可思議なり。廣を攝して略に從へ。末を棄てゝ本に歸するに且く三種有り。一には可聞の理趣、二には可見の理趣、三には可念の理趣なり。若し可聞の理趣を求めば聞く可き者は則ち汝が聲密是なり。汝が口中の言說卽ち是なり。更に他の口中に求むることを須いざれ。若し可見の理趣を覓めば見つ可き者は色なり。汝が四大等卽ち是なり。更に他身の邊に覓ること須いざれ。若し可念の理趣を索めば汝が一念の心中に本より來た具さに有り。更に他心の中に索むることを須いざれ。

【字訓】○大師……佛を指す。或は惠果を指すともいふ。○聲密……語密のこと

【會意】已下は理趣の大畧を示す。これに五科あり。今は初に見聞念の三種に約して說き明す。

【講義】余不敏なりと雖ども大畧、理趣の義につき大師の訓旨を示さん。冀くは子、汝が智慧の心を正しくし、汝が戲論を淨めて理趣の句義、密教の流傳の妙理を聽かれんことを。夫れ理趣の妙句の妙理無量無邊にして不可思議なりかく無量無邊なれども今廣を攝して畧につき、末を棄てて本に歸して之を言はゞ且く三種となる。即ち一には可聞の理趣、二には可見の理趣、三には可念の理趣である。此の三種の中、初の可聞の理趣に就いて明さば、若し汝が可聞の理趣を求めてゐるとせば、聞くべきものは即ち汝の語密がそれに當るのであり、汝が口中の言說が取りも直さずそれに當るのであるが故に、汝の言說を除いて更に他の口中の言說を求めるには及ばない筈である。次に若し汝が可見の理趣を覓むるとせば、見るべきものは色である。色とは汝が身體を構成する所の四大等が卽ちそれである。從つて汝自身の身體を除いて他身に之を求むべきではない。次に若し汝が可念の理趣を索むとせば、汝が一念の心中に本よりこのかた具さに具足してゐる筈である。從つて汝の心中に具足せるを除いて他心中に求むべきではない。

復次有三種。心理趣。佛理趣。衆生理趣。若覓心理趣者汝心中有。不用覓別人身中。若求佛理趣者汝心中能覺者。卽是。又可求諸佛邊。不須覓凡愚所。若覓衆生理趣者汝心中有無量衆生。可隨其覓

【述方】復次に三種有り、心の理趣、佛の理趣、衆生の理衆なり。若し心の理趣を覚めば汝が心中に有り。別人の身中に覚ることを用いざれ。若し佛の理趣を求めば汝が心中に能覺者あり、卽ち是なり。又諸佛の邊に求むべし。凡愚の所に覚ることを須いざれ。若し衆生の理趣を覚めば汝が心中に無量の衆生有り、其に隨つて覚むべし。

【字釈】○心中有無量衆生……心は是れ十界輪圓の曼荼羅なり。衆生も亦心に有り。『六祖大師法寶壇經』に曰く「心中の衆生は謂はゆる邪迷の心、諂妄の心不善の心、嫉妬の心、惡毒の心、是の如き等の心盡く是れ衆生なり」と。

【章意】第二に心佛及び衆生に約して理趣の義を明す。

【講義】また次に三種あり。卽ちその三とは心の理趣、卽ち行者の一心、修證の理趣と、佛の理趣、卽ち願ひ祈る所の理趣と、衆生の理趣卽ち緣ずべき理趣とである。若し此の三の中で汝が心の理趣を覚めてゐるとせば、この心の理趣とは汝が心中に存する處の一心なるが故に汝自身の心中に存するを捨てゝ置いて別人の身中に是を求むべきではない。また若し汝が佛の理趣を求めてゐるとせば、汝が心中に先天的に能覺者が潜んでゐる筈である。その能覺者が卽ち是れ佛の理趣たるものである故に、從つて此れは諸佛の邊に求むべきで、凡愚の所に求むべきではない。次にまた汝が若し衆生の理趣を求めてゐるとせば、汝が心中には既に無量の衆生がある筈である。されば衆生の理趣は汝の心中に求むべきである。

又有三種。文字觀照實相也。若覚文字則聲上屈曲。卽是不對不碍。若紙墨和合生文字彼處亦有。又須覚筆紙博士邊。若求觀照則能觀之心所觀之境。無色無形誰取誰與。若求實相則實相之理無名相。無名相者與虛空冥會。彼處有空更不用外

【述方】又三種有り、文字觀照實相なり。若し文字を覚めば聲の上の屈曲なり。卽ち是れ不對不碍なり。紙墨和合して生ずる文字の如き、彼の處にも亦有り。又須く筆紙と博士との邊に覚むべし。若し觀照を求めば能觀の心と所觀の境と色も無く、形も無し。誰れか取り、誰れか與へん。若し實相を求めば實相の理は名相無し。名相無ければ虛空と冥會せり。彼の處には空のみ有り、更に外に用いざれ。

【字釈】○不對不碍……聲は不可見有對色に屬して色蘊の收に在り、文は不相應行に屬して行蘊の攝に在り。故に不對不碍といふ。○彼處……紙墨の所。

【章意】第三に文字觀照實相の三種般若に約して理趣を明す。

【講義】また三種あり。云ふ所の三種とは文字般若卽ち眞教と、觀照般若卽ち眞惠と、實相般若卽ち眞理とである。若しこの三種の中で汝が文字般若の理趣を求めてゐるとすれば、文字は聲の上の屈曲であり、不相應行にして不對不碍である。紙墨和合して出來る所の文字の如きは紙墨和合の處にもあり、されば筆紙と博士の邊に求むべきである。また若し觀照般若の理趣を求めてゐるとせば、觀照般若は能觀の心と所觀の境とより成れるものであるが、その能觀の心も所觀の境も俱に無色無形のものなれば誰れかよく之を取り來りて與へ得ようや。また若し汝が實相般若の理趣を求めてゐるとせば、實相の理卽ち眞理には名相なし。名相なければこれ虛空と冥會せるものであつて、紙墨の處には空のみしかなし。されば更に他に求むべきではない。

又所謂理趣釋經者汝之三密則是理趣也。我之三密卽是釋經。汝身等不可得。我身等亦不可得。彼此俱不可得。誰求誰與

【述方】又謂所る理趣釋經は汝が三密則ち是れ理趣なり。我が三密卽ち是れ釋經なり。汝が身等不可得なり。我が身等も亦不可得なり。彼れ是れ俱に不可得なり。誰れか求め誰れか與へん。

【字釈】○身等……等の字に口、意の二を含意せしむ。○理趣と釋經……一往の義の上より理趣と釋經とに分ち、此れを自他に配し、今釋經は大師の邊にあるが故に能詮の文を我身に比し給ふ。

【章意】第四に自他の三密不可得に就いて說き明す。

【講義】又謂はゆる理趣釋經とは三密の理趣を說き明せるものであるが故に、汝の三密が卽ち是れ理趣に當り、また我が三密が卽ち釋經に當る。然るに汝が身等の三密はこれ不可得であり、我が身等の三密も亦不可得である。かく汝が身等の三密も不可得であり、我が身等の三密も不可得なるが故に誰れがよく此を求得して與へ得られようや。

又有二種。汝理趣我理趣卽是也。若求汝理趣則汝邊卽有。不須求我邊。若求我理趣則有二種我。一五蘊假我。二無我大我。若求五蘊假我理趣。則假我者無實體。無實體者何由覚得。若求無我大我則遮那三密卽是也。遮那三密何處不遍。汝三密卽是不合外求。

【述方】又二種有り、汝が理趣と我が理趣と卽ち是れなり。若し汝が理趣を求めば汝が邊に卽ち有り。我が邊に求む須らず。若し我が理趣を求めば二種の我有り。一には五蘊の假我、二には無我の大我。若し五蘊の假我の理趣を求めば、假我は實體無し。實體無くんば何に由てか得ることを覚めん若し無我の大我を求めば遮那の三密卽ち是れなり、遮那の三密は何れの處にか遍せざらん。汝が三密卽ち是れなり。外に求む合らず。

【字釈】○我……我には諸蘊の假和合になれる世俗の我と、無我の大我との二義あり。『大日經疏』第一に曰く「此の宗の辯ずる義は卽ち心を以て如來應正等覺とす。謂はゆる內心の大我なり」と。

【章意】第五に汝と我とに就いて理趣の道を說き明す。

【講義】又二種あり。卽ち汝が理趣と我が理趣とが卽ちそれである。此の二つの中で若し汝が汝の理趣を求めてゐるとせば、それは卽ち汝の邊にあるのであるが故に我が邊に求むべきではない。また若し汝が我が理趣を求めてゐるとせば、我が理趣には二種の我がある。卽ち一には五蘊の假であり、二には無我の大我である。この中若し五蘊の假我の理趣を求めてゐるとせば、假我は因緣合成のものなれば實體なし、實體なければ如何にしてか此れを取得しようや。また若し無我の大我を求めてゐるとせば、無我の大我とは遮那の三密がそれである。而もその遮那の三密は何れの纖芥大虛として遍ぜる所なきが故に、汝が三密も此れ亦無我の大我に等同せるものである。されば汝自身に求むべきであつて他身に求むべきではない。

又余未知。公是聖化耶。爲當凡夫耶。若佛化則佛智周圓。有何所闕。更事求覚。若權故求覚則如悉達事外道。文殊事釋迦。

【述方】又余未だ知らず。公は是れ聖化なりや。爲當凡夫なりや。若し佛化ならば佛智は周圓なり、何の闕けたる所有つてか更に求覚を事とする。若し權の故に求覚せば悉達の外道に事へ、文殊の釋迦に事へしが如くならん。

【字釈】○悉達事外道……悉達太子が婆羅門を師として學びしこと。卽ち『釋迦

譜』第二に云く「太子の年七歳に至つて父王、國中聰明の婆羅門諸の書藝に善きものを請じて太子に教へしむ。爾の時に一りの婆羅門あり、跋陀羅尼と名く五百の婆羅門を以て眷屬とす。來つて王の請を受く。時に更に太子の爲に大學堂を起て、七寶莊嚴の床榻學具極めて精麗ならしむ。吉日を卜擇して太子を以て婆羅門に與へて之を教へしむ。爾の時に婆羅門四十九書字の本を以て教へて之を讀ましむ。又阿羅羅迦摩羅鬱陀羅羅摩子に依つて修學したまふ」と。○文殊事釋迦……『方等陀羅尼經』第二に曰く「我れ今また更に略して往生の因緣を說かん。佛を栴檀華如來と號す。王を栴檀と名く。佛、彼の王宮に生じて等正覺を成じ、而も涅槃を取りたまふ。次にまた佛あり、釋迦牟尼如來と名く。次第に二萬億の釋迦牟尼佛香悉く供養す。初の佛は我を全うする堅固陀羅尼なり。豈異人ならんや。今即ち文殊師利法王子是れなり」と。また『處胎經』第四文殊身變化品に曰く「昔は能仁の師たり。今は乃ち弟子たり」と。

會意 已下凡聖を詰問するに就いて、今は聖化なるや否やを問ふ。

講義 また余未だ公が聖化たる佛なりや、はたまた凡夫なるやを知らず。若し汝が佛化たる佛ならば汝は佛智を體得してゐる筈であるが、その佛智は法界に周圓して一切智を圓備してゐる筈である。一切智を圓備してゐるのに何の闕けたる所あつてか更に求めんとするのであるや。若し權方便のために求むるとせば、それはかの悉達太子が外道婆羅門に事へ、文殊菩薩が釋迦牟尼佛に事へしが如くなすべきものである。

若實凡求則應隨佛教。若隨佛教則必須慎三昧耶。越三昧耶。卽傳者受者俱無益也。夫祕藏興廢唯汝我。汝若非法而受。我若非法而傳。則將來求法之人何由得知求道之意。非法傳受是名盜法。卽是誑佛

語方 若し實の凡にして求めば佛教に隨ふ應し。若し佛教に隨はゞ必らず三昧耶を慎む須し。三昧耶を越すれば傳者受者俱に益無し。夫れ祕藏の興廢は唯汝と我となり。汝若し非法にして受け、我れ若し非法にして傳へば將來求法の人何由てか求道の意を知ることを得ん。非法の傳受是を盜法と名く。盜法即ち是れ佛を誑くなり。

字訓 ○三昧耶……三昧耶に多義ある中、今は要誓の義に就いていふ。『大日經疏』第十五に曰く「三昧耶とは人あつて國王大臣所尊重の處に於て自ら言を發して大要誓を作すが如し。若し違する所あれば即ち重罪を得。是の故に三昧耶とは即ち是れ違越すべからざる義なり」と。要するに戒のこと。○非法而受……『一字頂輪王時處儀軌』に曰く、「傳法の阿闍梨先づ弟子の淨信決定する者を簡擇し已つて佛性戒を授與し、まさに輪壇に引入すべし。灌頂受職已つて苦ろに三摩耶を示めせ。今より成佛に至るまで菩提心を捨つることなかれ。親く阿闍梨に從つて諸儀軌印契及び密語微妙の三摩地を對受すべし此の教法の中に於て一字も未灌頂の者に向つて說くべからず。設ひ諸の同行の人なりとも亦爲めに說くことを得ざれ、假ひ已に成就を得たりとも纔かに說かば便ち散失しなん。現には諸の殃禍を招き、中夭して地獄に墮ちん。學ぶべからんには違越すること勿れ」と。

會意 實の凡に就いて明す。

講義 若し汝が實の凡にして理趣を求めるならば、佛の教訓に隨ふべきである若し佛の教訓に隨ふならば必らず戒を慎しみ守るべきである。戒を違越すれば傳授せしものも、受法せしものも俱に利益なし。夫れ思ふに祕密の法門の興廢するか、廢頹するかは實に汝と我とにかゝつてゐる。然るに汝若し非法にして法を受け、我れ若し非法にして法を傳へば、今後將來に於ける求法の人何に由てか求道の正意を知ることを得んや。非法の傳受是を盜法と名く盜法は即ち是れ佛を誑くものである。

又祕藏奥旨不貴得文。唯在以心得心。文是糟粕文是瓦礫。受糟粕瓦礫則失粹實至實。棄眞拾僞愚人之法。愚人之法汝不可隨。亦不可求

語方 又祕藏の奥旨は文を得ることを貴しとせず。唯心を以て心に傳ふるに在り。文は是れ糟粕、文は是れ瓦礫なり。糟粕瓦礫を受れば則ち粹實至實を失ふ。眞を棄てゝ僞を拾ふは愚人の法なり。愚人の法には汝隨ふべからず。亦求むべからず。

會意 祕藏の奥旨は心に在つて文にあらざることを明す。

講義 又祕藏の奥旨は文を得ることを貴しとせず、たゞ心を以て心に傳ふることにある。文章は是れ古人の糟粕であり、瓦礫にも等しきものである。糟粕瓦礫たる文章を得て、その文章に盛られたる粹實至實の精要を體得しなかつたならば、それは恰も其を棄てて僞を拾ふに等しきもので、これ愚人のなす所である。愚人の法には汝隨つてはならぬし、亦かゝる愚人の法を求めてはならぬ。

又古人爲道求道。今人爲名利求。爲名之求不求道之志。求道之志忘己道法。猶如輪王仕仙

語方 又古の人は道の爲に道を求む。今の人は名利の爲に求む。名の爲に求るは求道の志にあらず、求道の志は己を道法に忘る、猶輪王の仙に仕へしが如し。

字訓 ○古人等……『論語』に曰く「古の學者は己が爲にし、今の學者は人の爲にす」と。○輪王等……『法華經』第五提婆品に曰く、「吾れ多劫の中に於て常に國王と作り、願を發して無上菩提を求む。國位を捐捨し、政を太子に委せ、鼓を擊ち、令を宣て四方に法を求む。時に仙人あり、來て王に白して言さく、我れに大乘あり、妙法蓮華經と名く。若し我に違せずんば當に爲に宣說すべし。王即ち仙人に隨つて所須を供給す。菓を採り、水を汲み、薪を拾ひ、食を設く、乃至身を以て床座と作して身心倦むことなし」と。即ち釋尊が因位に於て法の爲めに仙人を禮敬せし故事を指す。

會意 名利の爲に法を求むるは眞の求道にあらざる旨を誡しむ。

講義 古の人は道の爲めに道を求めたのであつたが、今の人は名聞利欲の爲めに道を求む。名利の爲めに道を求むるのは眞の求道の志あつてなすのではない。眞の求道の志あつて法を求むるならば法の爲めに己れの一身を忘れ、時としては一身を犧牲に供してまでも法を求むるものである。即ちそれは恰もかの釋尊が因位の輪王たりしとき、法の爲めに仙に仕へしが如きものであらねばならぬ。

途聞途說夫子亦聽。時機不應我師默然。所以者何。法是難思信心能入。口唱信修心則嫌退有頭無尾。言而不行如信修不足爲修。合始淑終君子之人

語方 途に聞いて途に說くをば夫子聽さ亦。時機應せざれば我が師默然す。所以何んとなれば法は是れ難思なり。信心あつて能く入る。口に信修を唱うれども心則ち嫌退すれば頭有つて尾なし。言つて行せざれば信修するが如くなれども修とするに足らず。始を合し、終を淑するは君子の人なり。

字訓 ○亦……亦は不の字の寫誤なり。○夫子不聽……『論語』陽貨篇に曰く、「子の曰く、道に聽いて途に說くは德の棄つるなり」と。注に王氏の曰く「君子は多く前言往行を識つて其の德を畜ふ。道に聽いて途に說くは之を棄つるなり」と。○信心能入……『智度論』第一に曰く「佛法の大海には信を能入とす」と。○言而不行……『顏氏家訓』上に曰く「世人の書を讀む者、たゞ能くこれを言へども之を行ふこと能はず」と。○爲修……一本には爲の下に信の字あり。即ち爲信修とある。○淑……善のこと。○合始……合の字は令の字の

寫語ならむ。今始は善始で、始を善くすること。

【摩】夫子と我が師とは俱に誠無きを斥くことを徵して信心能入の旨を明す。

【講】孔子は途に聞いて其を身に實行せずして他に說くことを許さずとか、また我が師は時機相應せざれば默して說き給はずと。その理由如何といふに、法は是れ難思のもの、たゞ信心ある者のみよく證入して知悉するのである。徒らに口に信修を說くとも心に厭退の氣分あれば頭有つて尾無きに等しきもの、即ち龍頭蛇尾に終るものであり、口に言つて身に實踐せざれば、信修するに似たれども本當の修行ではない。始を善くし、終りを善くし、始めの如くに終を全うする人、それは君子の人である。

世人厭寶女而愛婢賤。咲摩尼以緘燕石。好僞龍失眞像。惡乳粥寶鍮石。瘻者是鑽左手則是

【講方】世人は寶女を厭ふて婢賤を愛し、摩尼を咲つて燕石を緘む。僞龍を好んで眞像を失ひ、乳粥を惡んで鍮石を寶とす。瘻ある者は是れ左の手を鑽るといふ則ち是れなり。

【字】○寶女等……眞實を捨てゝ僞に趣くの喩をいふ。即ち『涅槃經』第二十に曰く、「寶女を捨てゝ卑陋を愛念するが如く、金器を捨てゝ瓦礫を用ふるが如く、甘露を捨て、毒藥を服食するが如し」と。○摩尼……如意寶珠。○燕石……玉に似て玉にあらざる石。○僞龍……葉公が龍を好むは、眞の龍を好むに非ずして、僞龍を好むの故事を指す。（第一卷慕仙詩に出ヅ）○惡乳粥……乳粥を嫌つて最上味を好みし故事。即ち『佛本行經』第二十五苦行品に曰く「一りの天子有り、速かに善生村主二女の邊に往いて告げて言く、菩薩今最上の美食を須めて食し已つて阿耨菩提を證せんと欲す。汝今十六分の乳糜を辦足すべし」と。○鍮石……石の名。金に似たるもの。

【摩】喩を以て世人の好む所のものは僻なるを明す。

【講】世人は眞實に貴きものを愛好せずして、僞假なるものを愛好すること恰も、寶女を厭ふて婢賤を愛するごとく、摩尼寶珠をあざ笑つてつまらぬ燕石を包藏するごとく、僞龍を好んで眞像を失ふに似、乳粥を惡んで鍮石の如

きつまらぬ石を寶とするが如きものであつて、瘻ある者は左の手を鑽るといふは則ちこのことである。

涇渭不別醍醐誰知。欲知面妍媸不如磨鏡。不可論金藥有無。欲達心海岸不如棹船。不合談船筏虛實。不拔毒箭空問來處。聞道不動千里何見

【講方】涇渭別たずんば醍醐誰れか知らん。面の妍媸を知らんと欲はゞ鏡を磨かんには如じ。金藥の有無を論ずべからず心の海岸に達せんと欲はゞ船に棹さんには如じ。船筏の虛實を談ず合らず。毒箭を拔かんには空しく來處を問はざれ道を聞いて動せずんば千里何んか見ん。

【字】○涇渭……涇渭は共に水の名。今の陝西省にあり。涇水は澄み、渭水は濁る。故に區別の明らかに定れるにいふ。○妍媸……妍は美、媸は醜。○金藥……鏡を磨く爲めに必要な品々をいふ。『淮南子』第十九に曰く「明鏡の始めて型に下すときは朦然として未だ形容を見ず。其の粉するに玄錫を以てし磨くに白旃を以てするに及んでは鬚眉微毫得て察すべし」と。○毒箭等……『涅槃經』第十五梵行品に曰く「譬へば人あつて身に毒箭を被るに其の人の眷屬即ち良醫に命じて爲に箭を拔かしむ。彼の人方に言く、且く待て、觸るゝこと莫れ。我れ今まさに觀ずべし。毒箭何くより來るや。誰れが射る所ぞと是の如の癡人等て便ち命終するが如し」と。

【摩】上來の總結として、道を知らんと欲せば但ちに學ぶべきを喩を以て顯はす。

【講】かの涇渭をはつきりと區別することによりて清濁を知り得るのであるがその如くに正法か邪教かを分別しなかつたならば誰れか醍醐の妙教を知り得ようや。自らの面貌の美妍醜媸を知らうと思ふならば、一心の鏡を磨くといふことが先決問題であり、鏡を磨く爲の金藥の有無などを論ずべきではないまた心をして彼岸に達せしめんと思はゞ修行の船に棹さして精進することが最も良い方法なのであつて、船筏の虛實などを論談すべきはない。また毒箭を射込まれし場合には、その毒箭を拔くことが第一であつて、毒箭を拔かないで空しく來處を問ひ尋ぬべきではない。その樣に道に惱む者が道を聞いてその道を體得すべく但ちに修行に動き應じなかつたならば、いかでか千里の佛果を證見し得うや。

雙丸足以却鬼。一匕可以得仙。若使千年讀誦本草大素。四大之病何曾得除。百歲談論八萬法藏。三毒之賊寧調伏乎

【講方】雙丸は以て鬼を却るに足れり。一匕以て仙を得つ可し若使千年本草大素を讀誦すとも四大の病何ぞ曾て除くことを得ん。百歲、八萬の法藏を談論すとも三毒の賊寧ろ調伏せんや。

【字】○雙丸、一匕等……僅かの丸藥を服することを意味す。即ち『抱朴子』內篇第一に曰く「黃帝九鼎神丹經を按ずるに第四の丹を名けて還丹と曰ふ。一刀圭を服すれば百日僊す。此丹を以て凡人の目上に書すれば百鬼走り避く」と。○四大之病……『維摩經注』第二方便品に僧肇の曰く「一大增損するとき四百四病生ず。四大增損するときは四百四病同時に俱に作る」と。○八萬法藏……『俱舍論』第一界品に曰く「牟尼の法蘊を說くに數八十千有り」と。

【摩】學ぶと雖も修せざるときは益無きことを警しめ明かす。

【講】されど學ぶと雖ども之を修せざれば益なし。修すれば必らず益あることかの還丹を僅か二粒兩眼に塗ることによりて病翳を除くことを得、また僅か一匙服藥することによりて仙となり得るが如くである。さればたとひ千年本草經や大素經を讀誦するとも四大の病どうしてや除くことを得ようや。百年八萬の法藏を談論してゐるとしても三毒の煩惱の賊どうしてや調伏することを得んや。

自非酌海之信磨鎚之士。誰能信一覺之妙行修三磨之難思。止止舍舍吾未見其人

【講方】海を酌むの信、鎚を磨するの士に非ざる自は誰れか能く一覺の妙行を信じて三磨の難思を修せん。止みね、止みね、舍りね、舍りね。吾れ未だ其の人を見ず。

【字】○酌海之信……不屈不退の信心をいふ。『智度論』第十六に曰く「好施菩薩の如きは如意珠を求めて大海水を抒む。正しく筋骨をして枯盡せしむれども終に懈廢せず。如來珠を得て以て衆生に給す。是を菩薩の精進波羅蜜とす」と。抒は酌む義。○磨鎚之士……精進努力の故事。即ち『修禪要決』に曰く「烏萇國に一りの僧あり。久しく坐して定を得ること能はず。遂に其の業を廢せんと欲す。忽ちに天有り、化して人となりて其の前に來て一の鐵鎚を磨す。僧問ふ、何を用てかする。答へて曰く、以て針を作らんと欲す。僧の曰く、何に由てか成る可し。天の曰く、休まずんば即ち成らん。遂に豁悟して還てまた禪を習ふ。因て道果を得たり。故に減定に住す。減定に住するが故に今に迄まで猶在り」と。○一覺……『起信論』に曰く「而も實には始覺の異りあること無し。本來平等にして同一覺の故に」と。○三磨……三摩地、即ち瑜伽の法のこと。

【摩】其の人あること鮮きを明す。

【講】かの好施菩薩は不撓不屈勇猛精進の信力を以て海水を酌み盡せしが如きまた鐵鎚を磨して針になすの士の如き精進努力不屈の信念を持てる人にあらざれば誰れかよく同一覺體の妙行を信じて三摩地瑜伽難思の法を信修し得ようや。止みね、止みね、思ひとどまりね、思ひとゞまりね。吾れ未だかゝる信念の人を見ず。

其人豈遠乎。信修則其人。若有信修。不論男女。皆是其人。不簡貴賤。悉是其器。其器來扣鐘谷則響。妙藥盈篋不嘗無益。珍衣滿櫃不著則寒。阿難多聞不足爲是。釋

本方 其の人豈遠からんや。信修すれば則ち其の人なり。若し信修すること有らば男女を論せず皆是れ其の人なり。貴賤を簡はず悉く是れ其の器なり。其の器來り扣くときは鐘谷則ち響く、妙藥篋に盈つれども嘗めざれば益無し。珍衣櫃に滿つれども著ざれば則ち寒し。阿難多聞なつしかども是と爲るに足らず。釋迦精勤なつしかば伐柯遠からず

字訓 ○阿難多聞不足等……『法華經』第四人記品に曰く「我れ阿難と等しく空王佛の所に於て同時に阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に勤精進す。是の故に我れ已に阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と。○伐柯……柯は斧の柄。斧の柄を取り代へるに以前の古き柄を以て寸法を合はせて切れば能くその柄が合ふといふことの意で、今は釋尊が精勤修行して居られたるが故に正覺を成ずること必らず近きにありとの義である。

會意 信修を勸奬す。

講義 實修實行の人、即ち三塵地瑜伽の法の修行の人と雖ども豈異人ならんや信修すれば、信修せしその人そのものが、取りも直さず實修實行の人なのである。若し信修さへ致しなば男女を論ぜず、皆その人であり、貴賤を簡はずして悉く皆その機根に當る。かゝる機根の者が來りて法を求むるならばそれは恰も鐘に響きあり、幽谷に山彦あるその如くに必らず感應ありて妙果を成就するに至る。妙藥篋に盈つといへども之を嘗めざれば効驗なき如く、また珍衣を櫃に滿ち滿ちて所持してゐるといへども之を着ざれば寒きが如く、法に於ても亦かくの如くである。即ちかの阿難は多くの弟子の中で多聞第一と稱せられる程に無量無數の法聞を聞いてゐるのであるけれども、それはたゞ單に聞くのみで實修實行なき故に未だ悟らず、然るに釋尊は精勤にして修行せしが故に間もなく妙果を體得するに至つたのであると法華經には記されてゐる。されば實修實行こそ佛道體得に就いては最も大切なことである。

舉代皆然。悲哉濁世。化佛所以棄入。五千所以退者

本方 代舉つて皆然なり。悲しい哉、濁世の化佛所以に棄てゝ入り、五千は所以に退く者なり。

字訓 ○舉代皆然……世皆多聞を好んで行修せざるを指す。○棄入……衆生を捨てゝ涅槃に入ること。○五千退……『法華經』第一方便品に曰く「爾の時に世尊、舍利弗に告げたまはく汝已に懲默に三び請ず。豈說かざることを得んや。此の語を說きたまふ時に會中に比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人あり。等しく即ち座より起つて佛を禮して退く。所以何んとなれば、此の輩罪根深重にして及び增上慢なり。未得を得と謂ひ、未證を證と謂つて此の如くの失あり、是を以て住せず、世尊默然として制止し給はず」と。

會意 末世の澆季を歎ず。

講義 世人皆舉つて多聞を好んで行修せざる有り樣である。そこで濁世に出現し給ひし應化佛は衆生を棄てゝ涅槃に入り給ひ、五千の衆生は開法不解にして退墮せりとは誠に悲しき極みである。

雖毒鼓之慈廣而無邊。而干將之誡高而有淬。師師誥訓不可不慎

本方 毒鼓の慈み廣うして無邊なりと雖ども干將の誡め高うして淬ふすること有り。師師の誥訓慎まずんばあるべからず。

字訓 ○毒鼓之慈廣……功德甚深廣大無邊なるを云ふ。即ち『涅槃經』第九菩薩品に曰く「譬へば人有つて雜毒藥を以て用て大鼓に塗つて衆人の中に於て之を擊つて聲を發せば聞かんと欲する心無しと雖ども之を聞けば皆死す。たゞ一人不橫死の者を除くが如く、是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。在在處處諸の行衆中に聲を聞く者所有の貪欲瞋恚愚癡悉く皆滅盡す。其の中に心に思念すること無きもの有りと雖ども是の大涅槃因緣力の故に能く煩惱を滅して結して自ら滅す。四重禁及び五無間を犯すものも是の經を聞き已ればまた無上菩提の因緣を作し、漸く煩惱を斷ず。不橫死の一闡提を除くなり」と。○干將之誡等……未入壇の者に眞言敎を傳へざる義を指す。即ち『大日經疏』第九に曰く「未だ漫荼羅に入らざる者には讀誦受持せしめじ。還つて布薩の盥み聽いて翻つて重罪を招くに同じ。世人稚子を慈育するに復情に惜む所無しと雖ども干將莫耶を授與せず。運用の方便を知らざるを以ての故に必ず其の體を傷るが如し。今此の法門も亦復是の如し。即心成佛の旨趣知り難し。恐くは未來の衆生法を輕慢するが故に三密の加持を蒙らずして自ら心を師とし、文を執して輙く自ら修學するに久しく功用を用ふれども能く成ずる所無ければ翻つて此の經を謗して佛說に非ずと謂へり。是の如き等の因緣を以て匱法の業を感じ、無量劫に於て惡趣の中に墮せん」と。○淬……『便蒙』に曰く「淬の字古來より訓じて固とす。未だ詳かならず。或る人の謂く、恐くは書誤ならん。疑らくは誶の字歟、誶は責なり、誚なり」と。○誥……告に同じ。

會意 甚深の祕藏容易に傳ふべからざることを明す。

講義 かの毒鼓が鳴り響けばすべての聞かんと欲する人も、欲せざる人々も耳に入り、耳に入りしすべての人々を死せしむると稱せられてゐるその如くに今此の妙法を聞けば有緣無緣を論ずることなく等しく濟度するに至る程に甚深廣大の功德を具ふるものであるが、併しかの干將の名刀は子供に與ふればその利用の方法を知らざるが故に自身を傷くに至るのであるその如くに、今此の妙法も未入壇の者に授傳せざれと固く誡しめてゐる所の師師の訓告は慎しみ從ふべきで、亂りに人に傳へてはならぬ。

子若不越三昧耶護如身命。堅持四禁愛均眼目。如敎修觀臨坎有績。則五智祕璽旋踵可期。況乃髻中明珠誰亦祕惜

本方 子若し三昧耶を越せずして護ること身命の如くし、堅く四禁を持つて愛すること眼目に均くし、敎の如く修觀し坎に臨んで績有らば五智の祕璽踵を旋らすに期しつ可し。況んや乃ち髻中の明珠誰れか亦祕し惜まん。

字訓 ○四禁……佛性三昧耶戒の四種の重禁のこと。不應捨正法戒・不捨離菩提心戒、不應慳悋正法戒、不應不利衆生行戒。『大日經疏』第九の三昧耶の偈に曰く「佛三昧耶を說きたまふ。汝善く戒に住る者自の身命を護るが如く戒を護ることも亦是の如し」と。○愛均眼目……法を愛念すること眼目を愛するに譬ふ。即ち『寶篋印陀羅尼經』に曰く「一切如來加持護念したまふこと猶し眼を愛するが如し」と。○臨坎……盟をなすこと。『禮記鄭注』に曰く「坎りて牲を用ひて臨んで其の盟書を讀む」と。○祕璽……密印のこと。○髻中明珠……今は理趣釋を指す。髻中明珠の故事は第一卷に出づ。

會意 若し篤信あらば傳授すべき旨を明す。

講義 子若し佛制の戒を違越せず、否その佛戒を自己の身命を護るその如くに堅く守り、佛性三昧耶の四重禁戒を持ち愛すること恰も眼目を愛するに等しくし、敎の如くに修觀し、盟を立てゝ法を求むるだけの志あらば但ちに之を傳授し、五智の密印踵を旋らすその如くにたやすく成就するに至る。五智の密印すらかくたやすく受くることを得、況んや理趣釋の經本何ぞ祕し惜しまんや。必らず但ちに貸與し、祕旨を傳授せん。

努力自愛。因還此示一二。釋遍照

本方 努力自愛せよ。還に因つて此に一二を示す。釋の遍照

字訓 ○還……使者の還るを指す。○釋……釋子で釋尊の弟子、僧侶のこと。『彌沙塞律』に曰く「汝等比丘雜類出家しては皆本姓を捨てゝ同じく釋子と稱すべし」と。

會意 結言として使者の還へるに此の書を托する旨を明す。

講義 汝努力自愛せよ。使者の歸還するに際して此處に一二の微志を記して以て托す。釋の遍照。

一〇八　見還俗人詩

見還俗人作

【訓方】還俗の人を見て作す。

【字訓】○還俗……『涅槃經』第一壽命品に曰く「若し出家の禁戒を毀ぶる者あらば我れ當に罷めて俗に還へらしめて策使すべし」と。

【要意】初に題名を掲ぐ。

【講義】還俗の人を見て、感あつて作れる詩。

昔日剃頭今長髮　出家二種心惟重

【訓方】昔日は頭を剃り、今は髮を長くす。出家二種の心惟れ重れり。

【字訓】○二種心……昔は剃髮して身の出家をなし、今は長髮にして道を修するはこれ心の出家なり。されば二種の心重なる故にかくいふ。

【要意】還俗すれども道德堅固の有り樣を示す。

【講義】昔は嘗て頭を剃りて出家の身なれども、今は還俗して長髮の身となる。かく還俗して長髮の姿なれどもその志德行に厚くして道を修す。されば二種の心重ねたるに等し。先きには身の出家、今は心の出家なればこれ二種の心重ねたるに等し。

紅花綠實一株物　君見春秋顏色同
世理無常人如此　心緣不動大道通

【訓方】紅花綠實は一株の物、君見よ、春秋顏色同じや。世理無常、人此の如し。心緣動せざれば大道に通ず。

【字訓】○紅花綠實等……一本の木に於て春は紅花、秋は綠實と變化ある如く、一人の上に出俗の異りあるを指す。○顏色……花の色を指す。○心緣……緣慮心。

【要意】前章の二句を釋す。

【講義】一本の木に於ても紅花、綠實の變化あり、ましてや人生に於ては猶更ら變化あり、それは一木の上に於て春秋の變化あるその如くで、君は春に花咲き秋に葉落る所の一木上の變化を見ざるや。世上これ無常は宇宙の眞理である。されば人も亦かくの如く無常である。されど緣慮心不動なればこれ諸法實相の大眞理に通達することが出來るのである。

長江萬里以相答　雖爾處身如虛空

【訓方】長江萬里以て相答す。爾りと雖ども身を處くこと虛空の如し。

【字訓】○長江萬里以相答……長江の萬里にして遠きも水不動なれば彼此相通ずる如く、心緣不動なれば出家も俗家も共に大道に相通ずること。相答とは相通のこと。

【要意】結句として出俗共に心を虛空無相淸淨の境地に安住せしむべきことを勸誡せしもの。

【講義】長江萬里にして遠くとも水不動なれば彼此相通ずる如く、心緣不動なれば出家も俗家も共に大道に相通ず。然れども世間に住著すれば大道に通達すること能はざる、故に身を世間に處することは恰も虛空の無相淸淨なるが如くなすべきである。

一〇九　後夜聞佛法僧鳥詩

後夜聞佛法僧鳥

【訓方】後夜に佛法僧の鳥を聞く。

【字訓】○佛法僧鳥……鳥の鳴く聲佛法僧と謂ふに等し。よりて三寶鳥と稱す。

【要意】初に題名を掲ぐ。

【講義】後夜に三寶鳥の聲を聞きて感じて作れる詩。

閑林獨坐草堂曉　三寶之聲聞一鳥
一鳥有聲人有心　聲心雲水俱了了

【訓方】閑林に獨坐す草堂の曉、三寶の聲一鳥に聞く、一鳥聲有り、人心有り、聲心雲水俱に了了。

【字訓】○草堂曉……草堂は庵室のこと。曉は後夜に當る。○有心……一體三寶の心を指す。○有聲……法寶。○有心……佛寶。○聲心雲水……僧寶に當る。○俱了了……鳥聲人心雲光水色等皆悉くこれ法身の三密に外ならず、平等の理を具現せる覺りの境界に外ならぬことの意。

【要意】十界の依正悉く皆法身三密の佛德に外ならぬことを三寶鳥にことよせて詩になし給ひしもの。

【講義】閑靜な林中の草堂に晨朝獨り坐禪三昧に耽り居るに、折柄思ひがけもなく佛、法、僧の三寶といへる聲を一鳥に聞き得たり。かく一鳥に於てすら法を說く、人間に於て何ぞ佛心を發起せざらんや。必らずその胸中に具有する處の佛心を發動すべきである。ともあれ法身の境界より眺むれば鳥聲人心雲光水色俱にこれ法身三密の顯現にして、法身如來の佛德を開顯し給ふてゐるに外ならぬ。

一一〇　十喩詩并序

詠十喩詩　沙門遍照金剛文并書

【訓方】十喩を詠する詩。沙門遍照金剛の文并に書。

【字訓】○十喩……十喩は『大日經』第一に之を說き、疏の第三に委釋あり。十喩は空に喩ふ。空は必らず此の喩を待つて言を借つて意を會す。意盡きて會處無く既に長羅を出づることを得て此の無所住に住す。若しよく斯に映じ照せば萬象去來なしと羅什三藏は云へり。

【要意】初に題名と作者并に書者の名とを掲ぐ。

【講義】十喩を詠ぜし所の詩。沙門遍照金剛の文并に書。

詠如幻喩

【訓方】如幻の喩を詠ず。

【字訓】○幻喩……幻とは幻術師が衆人の前に於て種々の事物等を現ずる幻相を云ふ。此の幻相は因緣生にして實體あることなし。眞言行者瑜伽の境に於て自身より光明を放ち、佛相を現じ、種々の神變を現はすに至る時、此の幻喩を觀じて、今所現の神變も畢竟三密力因緣の所生なりと覺りて愛慢の心を遠離すること。

【要意】十喩の中の第一幻喩の題を掲ぐ。

【講義】幻相の喩を詠ずる詩。

吾觀諸法譬如幻　總是衆緣所合成
一箇無明諸行業　不中不外惑凡情

【訓方】吾れ諸法を觀ずるに譬へば幻の如し。惣べて是れ衆緣の合成する所なり。一箇の無明と諸の行業と中にあらず、外にあらず凡情を惑はす。

【字訓】○諸法……五蘊の法。○衆緣……五蘊假和合の諸因緣を指す。廣く云へば十二因緣、約せば煩惱、業、苦の三、其の中にても深因なるは無明の一つ

なり。○諸行等……十二因緣の中の無明と行とを擧ぐ。無明は初起の故に一箇といひ、業の位は差別して分るゝ故に諸行業といふ。

【摩訶】諸法の如幻なることを明す。

【講義】吾れ五蘊の諸法を觀ずるに譬へば幻の如くである。即ち一切のものはすべて皆衆因緣の假和合によつて成れるものである。その衆因緣とは一箇の無明と諸の行業とであり、それは自身の心中にあるにあらず、また自身を離れて他にあるにもあらずして凡夫の心を惑はす所のものである。

三種世間能所造　十方法界水蓮城
非空非有越中道　三諦宛然離像名

【講方】三種世間能所造、十方法界水蓮城、空に非ず、有に非ず、中道を越えたり。三諦宛然として像名を離れたり。

【字釋】○三種世間……『探玄記』第一に曰く、「一には器世間、所依處とす。二には智正覺世間、能化の主とす。三には衆生世間、所化の機とす」と。○能所造……三種世間は所造、五大は能造。今所造を擧げて能造を畧す。○水蓮城……蓮華藏世界のこと。○三諦……空、假、中。天台の旨趣を指し、中道迄は華嚴の教旨を指す。

【摩訶】華天兩一乘の教旨に約して如幻の旨を明す。

【講義】能造の五大によりて造られたる三種世間の中、智正覺世間はこれ十方法界蓮華藏世界の佛界にして、その境界は非空非有非中にして而も即空即有即中にして、即ち三諦宛然として思議を離れたる絶對の境地である。

春園桃李肉眼眩　秋水桂光幾醉嬰
楚澤行雲無復有　洛川廻雪重還輕

【講方】春園の桃李は肉眼を眩かす。秋水の桂光は幾くか嬰を醉はしむ。楚澤の行雲は無にして復有なり。洛川の廻雪は重うして還つて輕し。

【字釋】○秋水桂光……水月のこと。○醉……昏迷のこと。○嬰……嬰兒で一切衆生に喩ふ。○楚澤行雲……楚澤は楚の七澤を指し、今はその七澤の中の雲夢を指し、その雲夢の臺に於て楚の襄王が宋玉と遊んで神女に遇へる說話を開きし故事を指す。即ち『宋玉高唐賦』に曰く「楚の襄王、宋玉と雲夢の臺に遊んで高唐の觀を望む。其の上に獨り雲氣あり、崒として直ちに上り、忽として容を改む。須臾の間に變化すること窮りなし。王は宋玉に問うて曰く、此れ何の氣ぞや、宋玉對へて曰く、謂ゆる朝雲といふものなりと。王曰く、何をか朝雲といふやと、宋玉曰く、昔先生嘗て高唐に遊びき、怠みて晝寢ねたり。夢に一婦人を見る。曰く妾は巫山の女なり。高唐の客たり。君、高唐に遊ぶと聞く、願くは枕席を薦めんと。王因つて幸す。去る時に辭して曰く妾は巫山の陽、高丘の岨に在り、旦には朝雲となり、暮には行雨となる朝朝暮暮陽臺の下にありと。且朝これを見れば言の如し。故に廟を立てて號して朝雲といふ」と。○洛川廻雪……洛川は洛水の神女を指し、廻雪はその神女の麗はしさをいふ。即ち『曹子建洛神賦』に曰く「黃初三年餘、京師に朝して還へるときに洛川を濟たる。古人言へること有り。斯の水の神の名を宓妃と曰ふ。宋玉が楚王に對せる說神女之事に感じて遂に斯の賦を作る。其の詞に曰く、其の形、髣髴たること輕雲の月を蔽すがごとく、飄颻たること流風の雪を廻らすがごとし」と。

【摩訶】世間の喩を取つて諸法は不固不實にして執着すべからざる義を顯はす。

【講義】春の園中の桃李の花は絢爛として人の眼を眩惑し、池中の水月を見ては嬰兒幾度か之を取らんと昏迷さる。かの雲夢の行雲は生じては沒し、沒しではまた生じ。またかの洛水の飄颻たる廻雪の如き麗はしき神女も有るが如くにして無きに似、かくの如くに一切の物はこれ幻に似たり。

封著狂迷三界熾　能觀不取法身清
咄哉迷者執觀此　超越還歸阿字營

【講方】封著して狂迷すれば三界熾んなり。能く觀じて取らざれば法身清し。咄い哉、迷者執か此を觀ず。超越して阿字の營に還歸せよ。

【字釋】○封著……固く執着すること。○清……清らかに顯現すること。○咄哉……叱する語。○營……宮の意。韻を調へんが爲めに營の字を用ひしのみ。

【摩訶】如幻の觀を勸む。

【講義】一切の物は幻に似たるものであるのに、然るにそれに固く執着して狂迷すれば益々三界に盛んに輪廻し、益々迷執を深うするに至る。そこで若し此の理りをよく觀じて執着を離んぬれば法身佛を顯現し、體得するに至るのである。然るに此の理を覺らずして三界に迷へる者達は誠に咄いものだ。迷者にして離れか此の理を觀ぜしや。皆この理を觀じて三界如幻の浮世より超越して阿字本覺の宮に還歸せよ。

詠陽燄喩

陽燄の喩を詠ず。

【摩訶】○陽燄喩……『大疏』第三、『釋論』第六に曰く「日光に風、塵を動ずるを以ての故に曠野の中に動ずること野馬の如し。無智の人初めて見て水と爲へり。衆生も亦爾なり。結使の煩惱の日光に諸行の塵邪憶念の風に動ずるを以て生死の曠野の中に於て轉ず。無智慧の者謂つて一相をば男とし、一相をば女とす」と。要するに陽炎とは熱空塵等の因緣和合して曠野の中に水相等を現ずるを云ふ。眞言行者瑜伽の境界に於て諸佛の海會無盡莊嚴殊勝の相を感見する時、此の觀を修してかゝる殊勝の相は三力加持の因緣生にして無自性なりと悟るべきを敎ふる喩をいふ。

【摩訶】十喩の中の第二の陽燄の題名を掲ぐ。

【講義】陽燄の喩を詠ずる詩。

遲遲春日風光動　陽燄紛紛曠野飛
擧體空空無所有　狂兒迷渴遂忘歸
遠而似有近無物　走馬流川何處依

【講方】遲遲たる春の日風光動く、陽燄紛紛として曠野に飛ぶ體擧つて空空にして所有無し。狂兒迷渴して遂に歸らんことを忘る。遠しては有に似たれども、近うしては物無し。走馬流川何れの處にか依る。

【字釋】○遲遲……日長くして遲き貌。○風光……風には本來光色なけれども、草上に光色あつて風吹いて之を動かす。之を眺むれば恰も風に光あるが如し故に風光といふ。○紛紛……盛んなるさま。○曠野……廣々としたる野原。○遠而似近等……『智度論』第六に曰く「飢渴悶極して熱氣の野馬の如くなるを見て之を謂つて水とし、疾く走つて之れに越くに轉た近づけば轉た減す」と。○走馬流川……陽燄の幻影のさまを指す。

【摩訶】陽燄の喩を說き明せしもの。

【講義】遲遲たる春の日光草上に照り輝き、風吹き來りて之を搖り動かし、此處に陽燄紛紛として盛んに曠野に生ず。かく盛んに陽燄起れどもその實體は空空漠漠として存在するものではない。然るに狂兒は之に迷はされ渴望して之を遠くにいつまでも追ひ求めて遂に本覺の鄉に歸ることを忘るゝに至る。陽燄は遠方から見れば實在してゐるかの觀を呈せども、之を求めんと近くに行けばその物實在せず。或は走馬となつて現はれ、或は流川となつて現はれるけれども一體何處にその本體があるのであらうか。

妄想談議假名起　丈夫美女滿城圍
謂男謂女是迷思　覺者賢人見則非
五蘊皆空眞實法　四魔與佛亦夷希

【講方】妄想談議して假名起る。丈夫美女城圍に滿てり。男と謂ひ、女と謂ふ。是れ迷へる思ひなり。覺者と賢人と見るに則ち非なり。五蘊皆空は眞實の法、四魔と佛と亦夷希たり。

字訓　○妄想談議等……『大日經疏』第三に曰く「此の經の意の曰く、世人の遠く曠野を望みて徒らに此の炎を見て强ちに假名を立つれども其の實事を求むるに都べて不可得なるが如し。故に妄想成立有所談議と云ふ」と。此の文の意は衆生妄想を起して種々差別の名相を立てるけれども、それらは皆眞實の法にあらず虛妄に過ぎずといふにある。○丈夫美女……妄執が男女の二相を見ること。○謂男謂女等……『心地觀經』第四に曰く「男女性相本來空なり。妄執緣に隨つて二相を生ず。如來永く妄想の因を斷じたまへり。眞性には本男女の相なし」と。○五蘊……色、受、想、行、識の五蘊。○四魔……蘊魔煩惱魔、死魔、天魔。○夷希……『老子經』に曰く、「之れを視れども見えざるを名けて夷と曰ひ、之を聽けども聞えざるを名けて希と曰ふ」と。今は不可得の義に用ふ。不可得とは中道實相の義を詮はす空の異名なり。

會意　有爲の五蘊の諸法は陽炎の如くなるを明示す。

講義　衆生は妄想を起して一切のものに執着し、種々の分別をなして種々の假名を立て、即ち丈夫と美女と城中に滿てりと見、また男と思ひ、女と思ふ。是れらは即ち迷へる思ひにして本來法爾としてかゝる差別なき筈である。また覺者と賢人と見るも皆非にしてこれ妄境界に外ならぬ。それらは皆五蘊假和合のものであり、眞實の性なきこと恰も陽炎の如し。五蘊は本來皆空にして、眞實の淨眼を以て之を觀ずれば四魔といふも佛といふもそれらの相は不可得空のものである。

瑜伽境界特奇異　法界炎光自相暉
莫慢莫欺是假物　大空三昧是吾妃

講方　瑜伽の境界は特に奇異なり。法界の炎光自ら相暉く慢ずること莫れ、欺くこと莫れ。是れ假物大空三昧は是れ吾が妃なり。

字訓　○瑜伽境界等……『大日經疏』第三に曰く「眞言行者瑜伽の中に於て種種殊特の境界乃至諸佛の海會無盡莊嚴を見るが如きは爾の時に此の陽燄の觀を作して唯是れ假名なりと了知して慢著を離るべし。心地に近づくときは加持神變種種の因緣は但是れ法界の焰なりと悟る」と。又同疏第六に曰く「行者十緣生句を觀察して即ち是の如くの海會皆悉く衆生從り生じて鏡像水月乾城等の如しと悟る。然れども尙空病未だ空ぜざるを以ての故に未だ名けて大空となることを得ず、自ら心性を證する時即ち是の如くの加持の境界は皆是れ心の實際なりと知る。爾の時に心、相に住せず、亦空に依せずして空と不空と畢竟無相にして一切の相を具すと照見するが故に大空三昧と名く」と。○妃……定の稱。

會意　瑜伽の境界に就いて陽燄の觀を示す。

講義　眞言行者瑜伽の觀行の中に於て種種殊特の曼荼羅境界、諸佛の海會無盡莊嚴の炎光自ら照暉せるを見るに至る。此の時に於て眞言行者佛果を得たりと慢心を起すことなく、また此の假相に欺かれることなく、但ちに此の陽炎觀を作して此れ假物なりと悟つて大空三昧の定に修入すべきである。

詠如夢喩

講方　如夢の喩を詠ず。

字訓　○如夢……『大日經疏』第三、『釋論』第六に曰く「夢中に都て實事無けれども之れ實有りと謂つて覺め已つて無なりと知つて還つて自ら笑ふが如く、人も亦是の如し。諸の結使の眠りの中に實無けれども而も著せり。道を得て覺るとき、乃ち無なりと知つて、覺つて亦自ら笑ふ」と。要するにこれは眞言行者喩伽の夢境に於て須臾の間に無量加持の境界を見、或は座を起たずして多劫を經、或は遍く諸佛の國土に遊び親近し、供養すと思ふことあり。此時行者夢喩を觀じて是の如き境は一心の變作にして不生空寂なりと知り、執情を除去すべきことを敎ふるにあり。

會意　十喩の中の第三として如夢の題を掲ぐ。

講義　如夢の喩を詠ずる詩。

一念眠中千萬夢　乍娛乍苦不能籌
人間地獄與天閣　一哭一歌幾許愁

睡裏實眞覺不見　還知夢事虛狂優
無明暗室長眠客　處世之中多者憂

講方　一念の眠の中に千萬の夢あり。乍ちに娛しみ、乍ちに苦しんで籌ること能はず。人間と地獄と天閣と、一びは哭し、一びは歌つて幾許の愁ひぞ。睡りの裏には實眞にして覺むれば見えず、還つて知んぬ、夢の事は虛狂にして優なることを。無明の暗室の長眠の客、世の中に處て多かる者は憂なり。

字訓　○一念眠中千萬夢……『大日經疏』第三に曰く「夢中の如きは自ら住壽一日乃至無量歲にして種種の國土及び衆生有り、或は天宮に昇り、或は地獄に在つて諸の苦樂を受くと見る。覺むる時には但し一念の間のみ」と。○優……『便蒙』には「慕本には憂に作る」と註せり。優は戲に同じく、たはぶれごと。○暗……『便蒙』には「慕本には闇に作る」と註せり。

會意　初の六句は夢の喩を說き、次の二句は法說を擧示す。

講義　暫時の眠りの中に種々雜多千萬ほどの夢を見る。卽ち或は樂しき夢、或は悲しき夢等籌り知ること能はざる程である。或は人間界の、或は地獄界の或は天上界の人となることを夢見て、一びは悲しみ哭し、一びは樂しみ歌つて幾許愁へ悲しむことであらうや。か樣に種々雜多のことを夢見るけれどもそれは睡眠中にのみ實眞らしく思はれることで、睡眠より覺むれば何事も見えず。そこで知んぬ。夢のことは虛狂にして、それは恰も戲れごとなることを。その如くに衆生は我我所に著して無明の闇室に住し、醒むることなく永久に眠る所の客となりて三界に住し、恰も虛狂の夢事の如き諸事に戲れてたゞ多かるものは憂へのみ。

悉地樂宮莫愛取　有中牢獄不須留
剛柔氣聚浮生出　地水緣窮死若休
輪位王侯與卿相　春榮秋落逝如流
深修觀察得原底　大日圓圓萬德周

講方　悉地の樂宮も愛し取ること莫れ。有中の牢獄には留るべからず。剛柔氣聚れば浮生出づ。地水緣窮まれば死して休するが若し。輪位と王侯と卿相と、春は榮え、秋は落つ。逝くこと流るゝが如し。深く修して觀察すれば原底を得。大日圓圓として萬德圓し。

字訓　○悉地樂宮等……眞言行者の瑜伽中に於ける悉地の相を夢事に喩ふること。『大日經疏』第三に曰く「今此の眞言行者瑜伽の夢も亦復是の如し。或は須臾の間に備さに無量加持の境界を見、或は座を起たずして多劫を經、或は遍ねく諸佛の國土に遊ぶ。行者是の如くの境界を得るときは但し當に夢の喩を以て之を觀じて心に疑怪せず、亦著を生ぜざるべし」と。○有……三有のこと。○剛柔……儒家の說を假つて受生の初を云ふ。卽ち陰陽の二氣のこと。○地水……佛敎の意を以て四大離散の終りを顯はす。○輪位……轉輪聖王。○王侯……公侯。○原底……一心の原底。○圓圓……初の圓は理にして胎藏曼荼に當り、次の圓は智にして金剛界の曼荼羅に當る。

會意　初の一句は瑜伽の境界を說き、次の五句は夢の喩に依つて世の無常を觀じ、深修已下の二句は夢の觀を示す。

講義　眞言行者瑜伽觀行中に於て悉地成就の妙境界を現出するに至らば、但ちに此の夢の喩を觀じてその相に愛著すること勿れ。凡そ三界は牢獄にも等しきものなればそれに愛著して留るべからず。陰陽二氣聚つて我々の生が始りそして地水等の四大、緣盡くれば離散して死し、休するがごとし。轉輪聖王も公侯も卿相も、春は榮え、秋は凋落し、逝くこと流るゝ水の如く、恰もそれは夢に似たり。そこでこの夢喩の觀を深修觀察してその理に體達すれば一心の源底を體得し、大日如來の理智圓滿具足の萬德を成就するに至る。

詠鏡中像喩

鏡中の像の喩を詠ず。

【題方】 ○鏡中像喩……『大日經疏』第三、『釋論』第六に曰く「經に云く、復次に祕密主影の喩を以て眞言の能く悉地を發くことを解了す。面の鏡に緣つて面像を現ずるが如く、彼の眞言の悉地も當に知るべし」と。要するに此は眞言行者瑜伽の境に住して祕密曼荼羅を感見するに、端嚴柔和の相あり、可畏忿怒の相ありて諸尊の像雜多なるを見る。此の時影喩を觀じて定心の鏡中に現ずる諸尊の影像は自性なしと悟りて戲論を生ずべからざるを敎ふるにあり。

【參考】 十喩の中の第四として影喩の題を揭示す。

【講義】 鏡中の影像の喩を詠ぜし詩。

長者樓中圓鏡影　秦王臺上方丈相
不知何處忽來去　此是因緣所生狀
非有非無離言說　世人思慮絕籌量
莫言自作共他起　外道邪人繞虛妄
心神衆生不同異　因緣而顯猶如響

【題方】 長者の樓の中の圓鏡の影、秦王の臺の上の方丈の相、知らず何れの處よりか忘ちに來去する。此は是れ因緣所生の狀なり。有に非ず、無に非ず、言說を離れたり。世人思慮するに籌量を絕つ。言ふこと莫れ、自作と共と他起と外道邪人は虛妄に繞はる。心神と衆生と同異にあらず、因緣にして顯るゝこと猶響の如し。

【字讀】 ○長者樓中圓鏡……『首楞嚴經』第四に曰く「佛、富樓那に告げたまはく汝豈開かずや、室羅城中の演若達多忽ちに晨朝に於て鏡を以て面を照らして鏡中の頭の眉目の見つべきを愛す。己が頭の面目を見ざることを嗔責して以て魑魅なりと爲して狀無うして狂走す。竟に於て云何ん。富樓那の言く。是の人心狂す。佛の言はく、演若達多が如き豈に因緣有らんや。自ら頭を怖て走れり。忽然として狂歇みぬれば頭、外より得るに非ず。縱ひ未だ狂歇きずとも亦何ぞ遺失せん。富樓那、妄の性も是の如し。何に因つてか在とせん」と。併し今は此の故事の意味を取るにあらず、單に鏡を擧示するのみ。○秦王臺上方丈相……秦王の方鏡中に影ぜし相をいふ。秦王の方鏡に就いては既に第一卷慕仙詩（本書一四頁參照）に出づ。○因緣……鏡と面と和合して生ずる因緣のこと。

【參考】 初の七句は鏡像の喩を擧げ、外道以下の三句は法の因緣生なることを明す。

【講義】 かの演若達多長者の樓中の圓鏡に映れる影像、またかの秦王の樓臺上の方鏡に映れる影像の如きはこれ、鏡の作にもあらず、面の作にもあらず、鏡を執る者の作にもあらず、自然作にもあらず、亦無因緣作にもあらず、然らば一体何れの處よりか來去せるや、思ふに此れは是れ鏡と面との因緣和合によりて生ぜし所の狀である。さればその因緣離ぬれば滅するが故にこれ有にあらず、無にあらず、その關係は言說を離れた不可得のものであり、世人が思慮してもはかり知ること能はざる所のものである。されば自作のものであるとか、自他共作のものであるとか、他作のものであるとかと言つてはならぬ。要するに諸法は因緣生のものである。然るに外道邪人は虛妄に執着して或は自作といひ、或は他作といひ、或は自他共作と稱してゐるけれどもこれ迷妄に外ならぬ。心神と衆生とはこれ同にもあらず、異にもあらず、これ因緣によりて顯はれしもので、恰も響に響の應ずるが如きものである。

閑房攝念無明斷　蘭室焚香讚響暢
三密寥寂同死灰　諸尊感應忽來訪
莫喜莫嗔是法界　法界與心無異詳

【題方】 閑房に攝念して無明斷え、蘭室に香を焚いて讚の響き暢ぶ。三密寥寂として死灰に同じ。諸尊感應して忽ちに來り訪ふ。喜ぶこと莫れ、嗔ること莫れ、是れ法界なり。法界と心とは異詳無し。

【字讀】 ○攝念……妄念を攝めること即ち禪定のこと。○蘭室……佛堂をいふ。○三密寥寂……行者の三業と本尊の三密と相應するをいふ。○死灰……心の活動を停止して無念無想の境地。『莊子』に曰く「心固に死灰の如くならしむべし」と。○諸尊感應等……『大日經疏』第三に曰く「行者瑜伽の中に於て自心を以て感とし、佛心を應となして感應の因緣の即時に毘盧遮那所證見の身を現じ、所宜開の法を說く」と、また曰く。「如來の三密の淨身を以て鏡とし、自身の三密の行を鏡中の像の因緣となして悉地生ずること有るは猶し面像の如し」と。○法界與心等……『大日經疏』第七に曰く「夫れ法界とは即ち是れ心界なり。心界本不生なるを以ての故に當に知るべし。法界も亦本不生なり。法界とは唯是れ自證の常心なり。別の法なし」と。○異詳……詳の字については『便蒙』に曰く「詳の字まさに況に作るべし。況は昧なり」と。

【參考】 瑜伽の觀を說示す。

【講義】 閑靜な房室に於て禪定三昧に耽りて無明を斷じ、佛堂に香を焚いて讚經して至心に佛を念じ、自の三業と佛の三密と相應して無想無念の境地に體達すれば、諸尊感應して忽ちに來り訪ふに至る。されど此の時に於て眞言行者此の相を見て喜ぶことも亦嗔ることもなかれ、これ佛心と自心との感應は因緣上のものにして恰も鏡中の影像に等しきものなることを悟るべし。かく悟れるに至る境地が即ち自證の常心であり、自證の常心はこれ法界に異らず、法界と自證心とは異れる境地ではないのである。

乾闥婆城の喩を詠ず。

【題方】 ○乾闥婆城喩……『大日經疏』第三、『釋論』第六に曰く「日初めて出る時城門樓櫓宮殿ありて行人出入すと見る。日轉た高ぬれば轉た滅す。此の城は但し眼に見る可くして實有無し。人初めより未だ曾見せざる有つて竟に實と謂ひ、樂んで疾く行つて之に趣くに近けば遂に失し、高ぬれば遂に滅す」と。要するにこれは眞言行者道場觀に住するとき道場忽ちに密殿華藏世界となり七寶莊嚴の樓閣を現前することあり、其の時行者乾闥婆城の觀を修して、今見る所の密殿も樓閣も乾闥婆城の如く自性なし、何ぞ奇特の想をなすべけんやと觀じて著想を離るべきことを敎ふるにあり。

【參考】 十喩の中の第五として乾闥婆城の喩の題名を揭ぐ。

【講義】 乾闥婆城の喩を詠ずる詩。

海中嚴麗見城櫓　走馬行人南北東
愚者乍觀爲有實　智人能識假而空
天堂佛閣人間殿　似有還無與此同
可咲嬰兒莫愛取　能觀早住眞如宮

【題方】 海中嚴麗にして城櫓を見る。走馬行人南北東す。愚者は乍ちに觀て實有りと爲す。智人は能く假にして空なりと識る。天堂と佛閣と人間の殿と、有に似て還つて無なることこと此と同じ。咲つ可し、嬰兒愛し取ること莫し。能く觀じて早く眞如の宮に住すべし。

【字讀】 ○嬰兒……愚夫に喩ふ。○言如宮……自心の宮のこと。

【參考】 初の四句は乾闥婆城を說き、後の四句は法說を揭ぐ。

【講義】 海中に嚴麗なる城郭の蜃氣樓を見る。その城郭の前を馬走り、人行き、南北し、東行して雜沓を極む。愚者は之を望觀して眞實なりと思ひ、智人はこれ假にして空なりと能く知れり。その如く一切の天堂も、一切の佛閣も、一切の人間の家も實有に似て而も無なること此れに同じ。かゝる假にして空なるものを愛し取るが如き笑ふべきことをなすことなく、能くこの理りを觀じて早く自心の眞如の宮殿に證入すべきである。

詠響喩

響の喩を詠ず。

【訓方】

○響喩……『大日經疏』第三、『釋論』第六に曰く「若は深山峽谷の中、若は空大の舍の中に、語言の聲と相擊つを以ての故に聲に從つて聲有るを名けて響とす。無智の人謂つて實有りとなす。智者は心念すらく、但し聲轉ずるを以ての故に更に響聲有つて人の耳根を誑らかす。人の語らんと欲する時、亦咽口の中に風有り、憂陀那と名く、還り入て臍に至り、響きを出す時、頂及び齗齒、唇舌、咽胷の七處に觸れて退く、是を語言と名く。愚人は僻せずして三毒を生じ、智者は了知して心に所著無し」と。要するにこれは眞言行者瑜伽の境にあるとき、本尊の說法を聽き、或は魔軍の叫喚を聞くことあらば、此の響喩を觀ずべし。定中に聞く所の聲響は畢竟空谷の響きの實體なきが如し。これ心佛の說法なり。心魔の叫喚なり、魔佛一如にして一心を出でずと悟る可きことを敎ふるにあり。

【拿意】十喩の中の第六として響の喩の題名を揭ぐ。

【講義】響の喩を詠ずる詩

口中峽谷空堂裏　風氣相擊聲響起
若愚若智聽不同　或瞋或喜匪相似
因緣尋覓曾無性　不生不滅無終始
安住一心無分別　內風外風誑吾耳

【訓方】

口中峽谷空堂の裏、風氣相ひ擊つて聲響起る。若は愚若は智、聽同じからず。或は瞋り、或は喜ぶ。相似たるに匪ず。因緣を尋ね覓むれば曾て無性なり。不生不滅にして終始無し。一心に安住して分別すること無れ。內風外風吾が耳を誑らかす。

【字訓】

○口中……內風を指す。○峽谷……外風を指す。○內風……有情の聲。

○外風……非情の聲。

【拿意】初の四句は響を明し、後の四句は法說を明す。

【講義】口中、峽谷、空堂の中に於て風氣相ひ擊つて聲響起る。此の響を聞くに當りて賢愚その意味解悟を異にし、或るものは瞋り、或るものは喜ぶ等、響は一にしてもその解了は同一にあらず。各人各々の知識程度に應じて解をなすものである。譬つてその聲響の起る因緣を尋ね窮はむればその本體は無自性にして不生不滅、終始あることなし。その如く眞言行者瑜伽中に於て本尊の聲を聞くとも響喩を觀じて一心に安住して分別することなく、內風外風の吾が耳を誑かすことを疊るべきである。

詠水月喩

【訓方】

水月の喩を詠ず。

【字訓】

○水月喩……『大日經疏』第三『釋論』第六に曰く「月、虛空の中に在つて行くに而も影、水に現ず。實法性の月輪如法性實際虛空の中に在り。凡夫の心水には我々所の相のみ現ずること有り」と。要するに此は眞言行者三密方便によりて自心澄淨なる時、諸佛の密嚴海會悉く印現し、或は自ら如意珠身を以て一切衆生の心水中に現ずる事あり。行者其の時此の水月の無自性なるを觀じて著想を除去すべきことを敎ふるにあり。

【拿意】十喩の中の第七として水月の喩の題名を揭ぐ。

【講義】水月の喩を詠ずる詩。

桂影團團寥廓飛　千河萬器各分暉
法身寂寂大空住　諸趣衆生互入歸

【訓方】

桂影團團として寥廓に飛ぶ。千河萬器各暉を分つ
法身寂寂として大空に住す。諸趣の衆生互に入歸す。

【字訓】

○寥廓……太虛をいふ。○千河萬器各分暉……月が千河萬池に映ずるをいふ『大日經疏』第三に曰く「一切の江河井池大小の諸器に月も亦來らず、水も亦去らざれども淨月能く一輪を以て普く衆水の中に入るが如し」と。○大空……心性の大空のこと。○互入歸……諸趣の衆生同一法性（大空）、諸趣の衆生各吾我（分暉）あり、彼は此に歸入し、此は彼に歸入するが故にかくいふ。

【拿意】初の二句は喩說を明し、次の二句は法說を明す。

【講義】月團團として太虛にかゝりて千河萬器に各各影を分ち宿す。その如くに自身の身內の六大法身寂々として心性の大空に住す。諸趣の衆生皆この六大法身たる同一法性にして而も各各吾我の分暉を有して彼此涉入してゐるものである。

水中圓鏡是僞物　身上吾我亦復非
如如不動爲人說　兼著如來大悲衣

【訓方】

水中の圓鏡は是れ僞れる物、身上の吾我も亦復非なり
如如不動にして人の爲に說き、兼て如來大悲の衣を著よ。

【字訓】

○圓鏡……月のこと。○身上吾我等……『大疏』第三に曰く「無明の心の靜水の中には吾我憍慢の諸の結使の影を見る。實智慧の杖を以て心水を攪くときは見えず」と。○如如不動……『大日經疏』に曰く「既に能く自ら其の意を靜めまたまさに如如不動にして人の爲めに之を演說すべし」と。

【拿意】初の一句は喩を擧げ、次の一句は法を明し、次の二句は指勸す。

【講義】水中に映れる月は是れ僞物にして眞實のものではない。その如くに身上の吾我もまた眞實ならず。それは無自性にして不可得のものである。故に此れに著せず如如不動にして人の爲めに此の妙理を演說し、兼ねては如來大悲の心品に住すべきである。

詠如泡喩

【訓方】

如泡の喩を詠ず。

【字訓】

○如泡喩……『大日經疏』第三に曰く、「泡の起りは卽ち是れ水の起りなり。泡の滅は卽ち是れ水の滅なり。故に此を以て卽心の變化に喩ふ。行者卽ち自心を以て佛と作して還つて心佛示悟の方便を蒙り、無量の法門に轉入するが如し。是の故に行者浮泡の喩を以て之を觀じて自心を離れざることを了知す。故に著を生ぜず」と。要するに此れは眞言行者一悉地を成就せば種々神變不思議を成ずべし。其の時行者浮泡の觀を凝らして著想を離れ、不思議の所作皆行者の淨心を離れずと了知すべきこと、恰もこれ天雨降る時無量の浮泡を生滅するも、皆水に卽して生滅するが如きを敎ふるにあり。

【拿意】十喩の中の第八として如泡の喩の題名を揭ぐ。

【講義】如泡の喩を詠ずる詩。

天雨濛濛天上來　水泡種種水中開
乍生乍滅不離水　求自求他自業裁
卽心變化不思議　心佛作之莫怪猜
萬法自心本一體　不知此義尤可哀

【訓方】

天雨濛濛として天上より來る。水泡種種にして水中に開く。乍ちに生じ、乍ちに滅して水を離れず。自に求め、他に求むるに自業裁す。卽心の變化不思議なり。心佛之を作す。怪しみ猜ふこと莫れ。萬法自心本一體、此の義を知らず、尤ども哀れむ可し。

【字訓】

○濛濛……微雨の降るさま。……○裁……自業の裁成するをいふ。○猜……疑ふこと。

【拿意】初の四句は喩を說き、後の四句は法說を明す。

【講義】天雨濛濛として天上より降り來り、雨水の中に種種の水泡を生じ、それは乍ちに生じ、乍ちに滅す。乍ちに滅するけれどもそれは水の體性を離れずよりて水泡を水の体性に求むれども然らず、また雨等に他性に求むるに然らず、これ卽ち本來の水の体性が緣に從つて裁成するに外ならぬ。その如くに眞言行者悉地成就の際に心に神變不思議を成ずることあり。その時に此の如

泡の喩を觀じて自心之を作すと知りて怪しみ疑ふことなく、萬法と自心と本來一體になることを悟るべきである。此の理りを知らざれば誠に哀れむべき迷人となる。

詠虛空華喩

【讀方】虛空華の喩を詠ず。

【字訓】○虛空華喩……『大日經疏』第三『釋論』第六に曰く、「如虛空とは但し名のみあつて實法なし。虛空は可見の法に非れども遠く視るが故に眼光轉じて縹色を見る。諸法も亦是の如し。空にして所有無けれども人無漏の實智慧に遠きが故に實相を棄てゝ彼我男女屋舍城郭等の種種の雜物を見る」と。要するに此れは眞言行者道場にある時忽ち光明輝き、妙華の飄るを見ることあらば、此の喩觀をなして、淨眼の前には唯本來不生の大空あるのみと覺り、著想を遠離すべきことを敎ふるにある。

【參意】十喩の中の第九として虛空華の題名を揭ぐ。

【講義】虛空華の喩を詠ずる詩。

空華灼灼有何實　無色無形但有名
染淨元來不能動　雲霧曀晴名濁清
實相如如一味法　迷人妄見三界城
四魔三毒空之幻　莫怖莫驚除六情

【讀方】空華灼灼として何の實か有る。無色無形にして但し名のみ有り。染淨は元より來た動ずること能はず。雲霧曀晴するを濁清と名く。實相如如にして一味の法なり。迷人妄りに三界の城を見る。四魔三毒は空が幻なり。怖るゝこと莫く、驚くこと莫くして六情を除け。

【字訓】○灼灼……花の盛んなるさま。○無色無形但有名……虛空をいふ。○不能動……虛空を動ずること能はざるをいふ。○曀晴名濁清等……『大日經疏』第三に曰く「又虛空の性は常に清淨なれども人除曀を謂つて不淨とするが如く、諸法も亦是の如し。性常に清淨なれども姪欲瞋恚等の曀の故に人不淨なりと謂へり」と。曀はくもること。○四魔……蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔。○三毒……貪、瞋、癡。○空之幻……空所變の幻のこと。○六情……外書には喜、怒、哀、樂、愛、惡。佛敎では眼、耳、鼻、舌、身、意の六識。

【參意】初の四句は喩を明し、後の四句は法說を明す。

【講義】虛空中に灼灼として美花咲けるもこれ何の眞實かある。これ實には空にして無色無形の虛空のみ、但しその名のみ存せり。虛空は雲を以て動ずること能はざる如く。衆生本具の菩提心性も善惡染淨を以て動ずること能はざる次第である。たゞその表面を曀晴するを濁清と名けてゐるに過ぎぬ。その如く宇宙の實相は如如にして一味の法性たり、然るに迷人は妄りに虛妄の三界に執着して如如の實相を忘る。虛妄の三界に住し、そこに生起する所の四魔三毒も本不生阿字の理の上の因緣上の幻化に他ならぬ。されば四魔三毒も幻化なれば怖るゝことも、驚くこともなく此れを斷除して六情の迷ひを去るべきである。

詠旋火輪喩

【讀方】旋火輪の喩を詠ず。

【字訓】○旋火輪喩……『大日經疏』第三に曰く「經に云く、復次に祕密主譬へば火燼の若人執持して手に在いて空中に旋轉するに輪の像生ずること有るが如しとは、愚少は之を觀て實事とおもつて念著を生ず。但手中の速疾力、能く一火を運んで無量の相を成ずのみ。眞言行者若し瑜伽の中に於て心の所運に隨つて成就せざること無し。乃至、一の阿字門に於て旋轉無碍にして無量の法門を成ず」と。要するに此は眞言行者念誦の功熟して眞言字輪に悟入せば一音を轉して無量音となし、一義を演べて無量の法門と成すことを得。此の時行者旋火輪の自性無きを觀じて字輪の體、本來不生なり。所生の相も亦自性なしと覺るべきことを敎ふるにあり。

【參意】十喩の中の第十として旋火輪の喩の題名を揭ぐ。

【講義】旋火輪の喩を詠ずる詩。

火輪隨手方與圓　種種變形任意遷
一種阿字多旋轉　無邊法義因茲宣

【讀方】火輪手に隨つて方と圓となり。種種の變形は意に任せて遷る。一種の阿字多く旋轉す。無邊の法義茲に因つて宣ぶ。

【參意】初の二句は喩說、後の二句は法說を明す。

【講義】火輪を手にして之を方に振れば方火輪となり、圓に之を振りまはせば圓火輪となり、かくの如くしてその他種種雜多の形を意の欲するまゝに變成することが出來る。その如くに眞言行者念誦の功熟して眞言字輪に悟入せば、阿字の一音よく無量に轉じて、無量の法門を成ずるに至る。その時眞言行者旋火輪の無自性を觀じて字輪の体本不生、從つて所生の相も自性無しと覺るべきである。

此是十喩詩修行者之明鏡。求佛人之舟筏。一誦一諷與塵卷而含義。一觀一念將沙軸以得理。故揮翰札以贈東山廣智禪師。觀物思人千歲莫忘上都冀神護國祚。

【讀方】此れ是の十喩の詩は修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。一び誦じ、一び諷ずれば塵卷と與んじて義を含み、一び觀じ、一び念ずれば沙軸と將んじて以て理を得。故に翰札を揮つて以つて東山の廣智禪師に贈る。物を觀ては人を思ふ。千歲に忘るゝこと莫れ。上都神護を國祚に冀ふべし。

【字訓】○十喩詩修行者之明鏡……『大日經疏』第三に曰く「此の十喩は皆是れ摩訶衍の人の甚深の緣起なり。辟閦緣覺の安足の處に非ず」と。○塵……微塵數のことで、無數をいふ。○沙……恒河沙のことで、無數をいふ。○翰札……翰は筆、札も『文選注』によれば筆なりと。されば翰札は筆のこと。○廣智禪師……古來より未詳。但し『便蒙』には『釋書』を引きて曰く「圓仁は野の下州都賀の郡の人。同郡大慈寺の僧廣智德行彙ね優かなり。俗に廣智菩薩と號する者なり。仁の父、仁を以て智に付す。後に傳敎大師に付す」と。また『開書』には『釋書』を引きて曰く「釋書惠達の傳の下に河內國小野寺に居住す。廣智菩薩と號す。此れ時代も同じ。若し近きを取らば之を指すべきか」と。○上都等……『便蒙』に依れば、上都以下古本には「上都神護國祚眞言寺の沙門少僧都遍照金剛天長四年三月一日書す」とありと云へり。

【參意】十喩の總結を明す。

【講義】此れ是の十喩の詩は一切の佛法の歸結たる因緣生の法を說き明せるもので、これ佛道修行者の明鑑であり、求佛の修行者の舟筏たるものである。一び誦じ、一び諷じてその深義を證得すれば無量無數の經典の深義に契達し、一び觀じ、一び念ずれば恒河沙の卷軸の經典の妙理を體得せしに等し。此の故に今筆を揮つて紙に記し、以て東山の廣智禪師に贈る。此の書を見ては我が此の十喩を作りし意圖を思ひ考へて千歲の後の人々も我が意中を忘れざらんことを。上都の人々は云ふに及ばず一切の人々よ、我が此の意を体して神明佛陀の加護を願つて國王の寶祚彌榮え寿らんことを冀ふべし。

一一　九　想　詩

九想詩十首

九想の詩十首

【讀方】

【字訓】○想……『便蒙』に曰く「想の字、諸本に相に作るは非なり」と。○九想詩

……『便蒙』に曰く「或る人の曰く、此の篇、大師の文に非ず。大唐隋郡開元寺の廊の南の壁に書する所なり。誰の作なりやといふことを知らずと。或る人の曰く。此の中の第九成灰想の詩のみ獨り開元寺の廊に在り、餘は大師の草なりと。或る人の曰く。全篇大師の所製なり」と。要するに此の詩は誰れの作なるか古來より未詳である。

【要意】九想總じての題名を掲ぐ。

【講義】九想を詠ぜし詩十首。

新死想第一

【讀方】新死の想第一

【要意】九想の中の第一の題名を掲ぐ。此の觀想によりて塵塵等の執着を離れしむ。

【講義】新死の想を詠ぜし詩。九想の中の第一。

世上日月短　泉裏年歲長
速疾如蜉蝣　暫爾同落崩

【讀方】世上には日月短し。泉裏には年歲長し。速疾なること蜉蝣の如し。暫爾にして落崩しぬ。

【字訓】○世上……世間をいふ。現世。○泉裏……死後。未來。

【要意】初の二句は現當二世を明し、後の二句は人の無常短壽を明す。

【講義】死後の年歲の長きに較ぶれば、現世の人の命は誠に短時日なりといふべきである。速疾にして無常なること恰も蜉蝣の如くにして、暫時にして死去するものである。

風雲辭貪庫　火埒罷欲城

【讀方】風雲のごとくに貪庫を辭し、火埒のごとくに欲城を罷む。

【字訓】○風雲……去り易きに喩ふ。○貪庫、欲城……共に人身をいふ。○火埒……『便蒙』に曰く「埒、疑らくは書寫の誤りならん。當に烽の字に作るべし火氣なり。謂く身死すること火氣の滅するが如く速やかなり」と。

【要意】無常迅速正に死せんとするを明す。

【講義】人の命は無常にして死滅すること風雲の如くにあはたゞしく貪庫を去り火氣の如くに滅するが如くに速かに欲城を辭し去るものである。

生期既盈數　死籍方註名

【讀方】生期既に數に盈ちて、死籍方に名を註す。

【字訓】○籍……死籍の帖簿。

【要意】正に死に至るを明す。

【講義】人間の一生涯の命數も滿ちて閻魔王の死籍の帖簿に記さるゝに至れば但ちにこれ死なねばならぬが人間の命である。

諸壽命若霞　忉利非匠堂
救贖未解所　詠吟而懷傷

【讀方】諸の壽命は霞の若し。忉利の匠堂に非るも、救ひ贖はんこと未だ所を解せず。詠吟して傷を懷く。

【字訓】○忉利非匠堂等……匠堂について『抄』に曰く「恐くは匠の字、若は遣の字歟。其の故は如何となれば忉利天の堂と雖ども無常遁るゝに非ずの意歟。匠の字尤も不審なるものなり」と。要するに之は忉利天の福報の力と雖ども壽盡に至れば救贖すること能はざるをいふ。

【要意】壽命來れば如何ともなし難きを明す。

【講義】諸の壽命は霞の如くに賴り無く、無常のものである。若し壽命盡くればかの忉利天堂の福報を以てするも救贖の所置をとること能はざる所である。詠吟してたゞ傷みを懷くのみである。

肪脹想第二

【讀方】肪脹の想第二

【字訓】○肪脹……肪は脂であぶら、脹はふくらむこと。脂ぎつて腹のふくれること。

【要意】九想の中の第二の題名を掲ぐ。此の觀想によりて形貌の執著を離れしむ

【講義】肪脹の想を詠ぜし詩。九想の中の第二。

丘陵虛且廣　人跡隔猶斷
皎潔明月度　蕭瑟秋葉滿

【讀方】丘陵虛しく且つ廣し。人跡隔てゝ猶斷えたり。皎潔として明月度り、蕭瑟として秋葉滿つ。

【字訓】○丘陵……をか、人を葬る所。○皎潔……白くして清らかなこと。○蕭瑟……秋風の物寂しき聲。

【要意】墓地の淋しき有り樣を明す。

【講義】丘陵の墓地空空漠漠として且つ廣し。人里を遠く隔てゝ、訪ふ人もなし明月皎潔として照り度り、秋風蕭瑟として秋葉に吹きわたり、靜寂にして淋しき此上もなき光景である。

含悲起四望　但視屍一人
裸衣臥松丘　被髮長夜眠

【讀方】悲みを含んで起つて四に望む。但だ屍の一りあるを視る。裸衣にして松丘に臥せり。髮を被つて長夜に眠る。

【字訓】○被髮……亂れ髮が顏から肩にかけておほひかぶさつてゐること。

【要意】死體の横はれるさまを記す。

【講義】悲しき氣持を以てあたりを見渡すに、但一箇の屍の横はれるをのみ見るその屍をよく見ると裸にして松の根下に横り、亂髮肩に被りて長夜に眠る。

唯以四相遷　非投半偈人
昔時萬甡厨。　今更百獸膳

【讀方】唯四相を以て遷る。半偈に投ぜし人に非ず。昔の時は萬甡の厨、今は更に百獸の膳。

【字訓】○四相……生、住、異、滅の四相で、有爲の有り樣をいふ。○非投半偈人……釋尊の因位、雪山童子のこと。雪山童子の如く半偈を求めんが爲めに身を捨てし人には非ずして徒死のものなりの意。○萬甡厨……貪獸魚肉等非常なる御馳走のこと。○百獸膳……百獸に噉食せらるゝこと。

【要意】生前と死後の相を明す。

【講義】たゞ平凡に生住異滅の四相の變遷を經て死去せしもので、かの求法の爲めに身を捨てて死せし人には非ず。生前は貪獸魚肉の澤山の御馳走を食ひしも、死して屍を野に曝せし今日はたゞ百獸の口腹を滿すのみ。

青瘀想第三

【讀方】青瘀の想第三

【字訓】○青瘀想……『法界次第』中卷に曰く「皮肉黃赤黑瘀青黯なる是を青瘀の想とす」と。

【要意】九想の中の第三の題名を掲ぐ。此の觀想によりて色欲の執着を離れしむ。

【講義】青瘀の想を詠ずる詩。九想の中の第三。

鬼吏永無脫　死坑深無底

【讀方】鬼吏永く脫るゝこと無し。死坑深うして底無し。

【字訓】○鬼吏……獄卒のこと。○死坑……死を以て坑に比す。

【要意】死後の獄苦の果しなきを明す。

【講義】死しての後は、生前の惡業によりて地獄に墮し、獄卒の責め永く脫るゝことなく、死坑深うして果しなき有り樣である。

滿月已掩光。　寶鏡轉自敗

【訳方】滿月已に光を掩ふ。寶鏡轉た自ら敗る。

【字訓】○滿月已掩光……滿月が光りを掩ひかくすその如くに、端厳圓滿なる顔色を失ふに喩ふ。○敗……壊滅すること。

【筆意】死滅の相を明す。

【講義】滿月の如き圓滿端厳なる顔色も失せ去り、死滅の後は荒びし寶鏡も自ら壊滅して之れ無し。

既如被飄燈　復同落華枝
日往轉增爛　月來更自黛

【訳方】既に飄せ被るゝ燈の如し。復落華の枝に同じ。日往いて轉た爛を増す。月來つて更に自ら黛くる。

【字訓】○飄燈……風に飄滅せらるゝ燈をいふ。○落華枝……有爲無常に喩ふ。○自黛……死後、眉を畫く者無し。獨り月のみ黛を點ずるをいふ。

【筆意】死後の相を明す。

【講義】既に死に直面すればこれ恰も風に飄滅せらるゝ燈の如くであり、落華の枝に等し。かくて死滅後は日時の經過するにつれて爛壊す。屍爛壊するに至れば訪れるものもなく、たゞ月のみ毎夜照し來りて黛を點ずるに過ぎぬ。

白蟮孔裏蠢　青蠅飢上飛
欲尋昔日愛　一悲一可愧

【訳方】白蟮は孔の裏に蠢き、青蠅は骸の上に飛ぶ。昔日の愛を尋ねんと欲するに一びは悲み、一びは愧づ可し。

【字訓】○白蟮……うどめける白き虫。

【筆意】腐爛の相を記す。

【講義】うどめける白き虫は九孔の裏に蠢動し、青蠅は骸の上にむらがり飛ぶ。この有り様を眺めながら、生前愛好せしを尋ね思ふとき、美しき体がかくの如く醜くなりしかと思へば悲しくなり、またかくの如くに醜惡なるを愛好せしかと思へば愧づかしき次第である。

方塵想第四

【訳方】方塵の想第四。

【字訓】○方塵……この解義について二義あり、一は四方がけがるゝこと。一は身體の血汁等が四方に散亂すること。

【筆意】九想の中の第四の題名を掲ぐ。此の觀想によりて男女の色欲の執着を離れしむ。

【講義】方塵の想を詠ずる詩。九想の中の第四。

四大良可厭　五陰理難恃
風火去不還　水土將朽敗

【訳方】四大は良に厭ふ可し。五陰は理として恃み難し。風火去つて還らず。水土將に朽敗せん。

【字訓】○風火、水土……四大をいふ。『圓覺經』上に曰く「我が今此身は四大和合せり。謂はゆる髪毛爪齒皮肉筋骨髓腦垢色は皆地に歸し、唾涕膿血津液涎沫淚精氣大小便利皆水に歸し、暖氣は火に歸し、動轉は風に歸す」と。

【筆意】四大離散の相を明す。

【講義】四大は恰も毒蛇にも似て我が身命を壊つものなればこれ厭ふべく、五陰は減し易きが故にこれ理として恃み難きものである。四大和合破れば風火我が身より去つて再び還らず、水土朽敗して再び我が身なし。

青黑且寬滿　膿猶瘀爛莠
九孔所流汁　一界甚臭穢

【訳方】青黑にして且つ寬滿なり。膿んで猶瘀み爛れたる莠のごとし。九孔より流るゝ所の汁、一界甚だ臭穢なり。

【字訓】○寬滿……腹のふくれたるをいふ。○瘀……血の循環の惡しき病。○莠……『便蒙』に依ればこれ萎の寫誤ならんと。

【筆意】臭穢の相を明す。

【講義】屍日時を經過するにつれて青黑く變色して且つむくみを生じ、遂に膿んでよどみ溜り、そして恰も瘀み爛れたる莠のごとくなり、また九孔より流れ出づる所の膿汁そのあたり一面に散亂して甚だ臭穢を極む。

猛獸踞其側　禍鳥鳴一提
體留此野塵　魂爲何處歸

【訳方】猛獸其の側らに踞まり、禍鳥鳴いて一び提ぐ。體は此の野の塵に留りて魂は何れの處に歸るとか爲る。

【字訓】○禍鳥等……『法界次第』に曰く「死屍を觀るに蟲咀み啖食し、鳥其の眼を挑り、狐狗咀嚼し、虎狼齧裂す。是を喰想となす」と。禍鳥は害鳥のこと。

【筆意】屍喰食さるゝ相を明す。

【講義】猛獸死體の側らに踞まり、害鳥鳴いて死肉を提さぐ。かくて體は此の野原の塵となり、魂は何れの處にか歸來せしや。

方亂想第五

【訳方】方亂想第五。

【字訓】○方亂……骨等を四方に引き乱したる有り様のこと。

【筆意】九想の中の第五の題名を掲ぐ。此の觀想によりて愛見の煩惱を破し、形貌端正なる執着を除かしむ。

【講義】方亂の想を詠ずる詩。九想の中の第五。

見縛難超網　分段非恆報
見縛は超え難き網、分段は恆の報に非ず。

【訳方】○見縛……邪見の煩惱。○分段……三界六道の果報の依身。支分形段の故に分段といふ。○非恆報……常恆の果報にあらざること。

【筆意】迷人の境界を明す。

【講義】邪見の煩惱は斷ち難く、出離し難き網にして、この網中に於ける三界六道の果報の依身はこれ常恆に亘りて不變の果報にあらず。

命速如飛箭　身空如朝露
命の速かなること飛ぶ箭の如し。身の空なること朝露の如し。

【字訓】○朝露……『涅槃經』三十八迦葉菩薩品に曰く「是の壽命を觀ずるにまた朝露の如し。久しく停らず」と。

【筆意】無常迅速なるを明す。

【講義】壽命の短く迅速に消え去ること恰も飛ぶ箭の如し。またその身の無自性にしてはかなきこと恰も朝露の如し。

玉顏亦膿血　臭氣逐風遠
膏腹炎隨流　芳體徒敗腐

【訳方】玉顏は亦膿血なり。芳體は徒に敗腐す。臭氣風を逐て遠く、膏腹炎のごとくに隨つて流る。

【字訓】○膏……脂のこと。○炎隨流……沸き流れて炎の如きをいふ。

【筆意】死後腐敗の相を記す。

【講義】美しかりし顏も亦膿血滿ち、麗はしかりし體も敗腐しぬ。臭氣風に逐つて遠くまで惡臭をもたらし、腹に滿てる膏脂沸き流れて炎の如き有り様である。

錦衣羞其爛　光枕非人覩
悲歎無所及　拭淚還移路

【訳方】錦衣は其の爛れたるを羞づ。光枕は人の覩るに非ず。

悲歎するに及ぶ所無し。涙を拭ふて還るに路を移す。

【字訓】○錦衣羞等……其の爛壊を見て錦衣も羞づべしの意。○光枕……刻鏤彩畫せし立派な枕のこと。

【拿意】哀體を見て悲歎するさまを記す。

【講義】其の屍の爛壊を見て錦衣も羞づる程であり、また生前愛用せし麗はしき光枕も今は見えず。誠に哀れなり。されど悲歎するも如何ともなすこと能はず。たゞ涙を拭ふて還へるに際しては往路とは異れる路を取る。

鏁骨猶連想第六

【題方】鏁骨猶連の想第六

【字訓】○鏁骨猶連……肉身皆盡きて白骨と成る。然りと雖ども未だ分散離々とはならざるさま。

【拿意】九想の中の第六の題名を擧ぐ。此の觀想によりて六塵の中の觸境を破せしむ。

【講義】鏁骨猶連の想を詠ずる詩。九想の中の第六。

畏レ影不知陰　如レ蝶居二世雲一
命短電光急　作二松下塵埃一

【題方】影を畏れて陰を知らず。蝶の如くにして世雲に居り、命の短きこと電光よりも急なり。松下の塵埃と作んぬ。

【字訓】○畏影等……『莊子』に曰く「影を畏れ、迹を惡んで之を去けて走者陰に處して影を休め、靜に處して迹を息むことを知らず。愚なることの甚し」と。○如蝶……夢の如しの意。即ち莊周夢蝶の故事を指す。第四卷に出づ。

【拿意】無常の相を明す。

【講義】世上の人は無常といふことは能く知つて之れにおびえ畏れてゐるのであるけれども、併しその無常から脱脚する所の善根をなすことを知らざる有り樣である。世上の榮華は恰も、胡蝶の夢の如く浮雲のごとくにはかなきものであり、人の命は電光の如くに短きものであり、あはたゞしきものである。そして死しての後はたゞ松下の一握の塵埃となるのみ。

平生市朝華　則今白骨人
黄鵠非呼レ子　青柳復非レ田

【題方】平生には市朝の華、今は白骨の人。黄鵠子を呼ぶに非ず。青柳復田に非ず。

【字訓】○黄鵠非呼子……『安樂集』に曰く「七に黄鵠、子安を喚ぶ。子安還つて活へる。豈に其の墳下に千齡決めて甦へる可きこと無しといふことを得べけんや」と。○青柳……死人を蘇生さす楊枝のこと。『佛祖通載』に曰く「佛圖澄は天竺の人、妙に玄術に通ず、よく咒を誦じて能く鬼神を役使す。石勒其の名を聞き、召して其の術を試る。澄、鉢を取り、水を盛り、香を燒きて之を咒ず。須臾にして鉢の中に青蓮花を生ず、勒、愛子病死す。澄、楊枝水を取り、酒いで之を咒ず。遂に蘇へる」と。

【拿意】白骨となりては蘇生のすべもなき義を明す。

【講義】生前は市朝に於て榮華を極むれども、只今は白骨となりて松下に横る。かく白骨となりては、かの黄鵠は人を喚んで蘇生さすと言はれてゐるけれども、その黄鵠も施すすべもなく、またかの楊枝水も死人を蘇生さすと言はれてゐるけれども、その楊枝たる青柳は我が田になければまた如何ともなすこと能はざる次第である。

春華徒自香　明月空照レ山
呼鳴永寂寞　終獨不レ知春

【題方】春華徒に自から香し。明月空しく山を照す。呼鳴永く寂寞として終に獨り春を知らず。

【字訓】○徒、空……兩字共に其の人なきことを慨くこと。

【拿意】死後を悼む旨を明す。

【講義】春來れば庭の百花色を增し、鶯ひ咲きて馥郁たれども之を眺むる人在まさず、明月山野を照せども之をめづる人在まさず。あゝ逝きし人は永へに返へり來らざるを思へば心中寂寞を感じ、時は正に春なりとはいへ、自分一人はその春の樂しさも何んだか淋しく感ずるものである。

白骨連想第七

【題方】白骨連の想第七。

【字訓】○白骨連想……白骨にして更に潤色無し。これを菩提心未發の行者に喩ふ。即ち未發心未修行人は惡業に著す。此人白骨に潤色なき如く之を思つて執著を破するにある。此れより菩提心を願ふ觀心である。

【拿意】九想の中の第七の題名を揭ぐ。此の觀想によりて細滑肌體に著せる執を除かしむ。

【講義】白骨連の想を詠ずる詩。九想の中の第七。

寂寞希二人跡一　蕭散遠二聚落一
見有二朽敗髏一　倏然有中澤

【題方】寂寞として人跡希なり。蕭散として聚落に遠かる。見るに朽敗の髏有り。倏然として中澤に有り。

【字訓】○蕭散……靜かにして人無くさびしきこと。○聚落……村里のこと。○髏……首骨。○倏然……たちまちに。○有……在の寫誤。○中澤……澤中。

【拿意】白骨分散のさまを明す。

【講義】境地寂寞として人跡希れにして蕭散として人もなく、村里に遙か遠ざかる。あたりを見廻はすに朽敗せる髏あり、倏然として澤中に在り。

松栢作二良陰一　荒茨蓋二濕席一
風雲所二恒曝一　霜露更自漉

【題方】松栢良陰を作し、荒茨濕席を蓋ふ。風雲に恒に曝所れ霜露更に自ら漉る。

【字訓】○松栢……松栢は墓所に植うる木。○荒茨……茨は茅。乱れ生ひ茂りたる茅。

【拿意】白骨のさまを明す。

【講義】その朽敗せる髏の上には松栢茂りて良き陰を作り、荒茅生ひ茂りて濕席を蓋ふて居り、恒に風雲に曝されて朽つるに任せ、霜露おきて自然に漉つてゐる哀れな姿である。

日來隨日枯　年去逐レ年白
雖レ殖二青柳根一　豈能招二鵂鶹一

【題方】日來れば日に隨つて枯れ、年去れば年に逐つて白し。青柳の根を植ゑると雖ども、豈に能く鵂鶹を招かんや。

【字訓】○鵂鶹……また鵂鶹とも書く。古の名醫して死人を蘇生せしめし人。『史記』に曰く「鵂鶹は勃海郡、鄚の人。姓は秦氏、名は越人。鵂鶹號を過る號の太子死す。鵂鶹が曰く、太子能く之を生かさん。中庶子が曰く、先生誕りなきことを得んや。何を以てか太子生けつ可しと言ふ。臣聞く、上古の時醫に俞跗といふもの有り。疾を治するに湯液を以てせず。皮を割き、肌を解き、脉を訣し、筋を結び、腸胃を湔浣し、五藏を滌滌して、精を練り、形を易ふ。是の若くならば太子生けつべし。鵂鶹が曰く、太子の病は謂はゆる尸厥といふものなり。乃ち弟子子陽をして鍼を砥石に厲がしめ、外の三陽五會を取る。間く有つて太子蘇がへる」と。

【拿意】白骨朽敗しては蘇生さすに術なきを明す。

【講義】日が經過するに隨つて白骨は枯れ行き、年數が經つにつれて白くなりて遂に朽敗す。かく朽敗しては楊柳を植ゑてその楊枝水を以て蘇生さすべき術もなく、また鵂鶹が如き名醫を招くとも蘇生さすこと不可能である。

白骨離想第八

【題方】白骨離の想第八。

字訓 ○白骨離想……五體の骨々離散して塵土に交はるさまをいふ。

筆意 九想の中の第八の題名を掲ぐ。此の觀想によりて色愛井に總じて五欲の執著を破せしむ。

講義 白骨離散の想を詠ずる詩。九想の中の第八

永無如夢虛　塵境如泡體
娑婆可厭所　閻浮非樂寐

講方 永く無なること夢の虛しきが如し。塵境は如泡の體なり。娑婆は厭ふ可き所、閻浮は樂しみ寐ぬべきに非ず。

字訓 ○娑婆……堪忍と譯す。吾人の住する此の三千大千世界の總稱。其の堪忍と譯するは、世界の生類忍びて十惡に堪へ、敢へて此土を出離せんことを欲せざるによる。○閻浮……閻浮提で我々の世界をいふ。

筆意 無常の世を明す。

講義 魂魄我が体より拔け去れば永く其の體なくして無なること恰も夢の虛しきに等し。塵境は泡の如くに消え去る體なれば賴りなし。娑婆は苦多くして樂少なければこれ厭ふべき所。されば閻浮提は樂しんで留り居ぬべき所にあらず。

膚血異夜月　青柳非復華
爪髮各塵草　頭頸散東西

講方 膚血は夜の月に異り、青柳は復華くに非ず。爪髮各草に塵る。頭頸は東西に散ず。

字訓 ○膚血異夜月……夜の月は虧けてもまた再び元の如くに盈つ。然るに膚血は死しては再び元の如くならずとの意。

筆意 白骨離散のさまを明す。

講義 かの夜の月は虧けても亦盈つるのであるが、然るに膚血は死しては再び元の如くにならずして腐敗するのみ。腐散するに至ればかの楊枝水と雖ども再び蘇生さすこと能はず。麗はしかりし爪髮は草に塵されて遂に腐朽し、頭頸は四方に散乱としてちばるに至る。

落葉半覆體　秋菊時可愛
垂淚弗能禁　空是爲人啼

講方 落葉半體を覆ふ。秋の菊時に愛す可けんや。淚を垂れて禁ずること能は弗。空しく是れ人の爲めに啼く。

字訓 ○秋菊時可愛……かゝる悲哀のさまを目の前に於て、麗しく咲ける菊とてもいかでか愛づべきやの意。

筆意 悲哀の情を明す。

講義 五體四方に離散せるその上を落葉が半分程覆ひかぶさつてゐる。その傍らに秋の菊が麗はしく咲いてゐるけれども、かゝる時に際していかでか愛づることが出來ようや。たゞ淚流れて禁ずること能はず、たゞ徒らに人の爲めに泣き悲しむのみ。

成灰想第九

講方 成灰の想第九。

字訓 ○成灰想……新死より白骨離を一灰となして我相不可得の義を悟らしむる觀想。

筆意 九想の中の第九の題名を掲ぐ。此の觀想は、新死より白骨離に至るまでを合成してたゞ一灰と作し、總合して人法の二無我を觀ぜしむるにあり。

講義 成灰の想を詠ずる詩。九想の中の第九。

山川長萬世　人事短百年
髏膝已盡滅　棺槨猶成塵
魂尸依無所　神魄豈守墳
碑上聊題名　隴底寧斂君

講方 山川は長うして萬世なり。人事は短うして百年なり。髏膝已に盡く滅して棺槨猶塵と成んぬ。魂尸依るに所無し。神魄豈に墳を守らんや。碑の上に聊か名を題す。隴底に寧ろ君を斂めんや。

字訓 ○髏膝……髏はされかうべ。膝はひざ。○魂尸……魂魄のこと。○神魄豈守墳……『灌頂經』に曰く「阿難、佛に白して言く。若し人命終して墳塚を造立する是の人の精魄中に在りや。佛の言く、在り、亦在らず。何を以ての故に。若し人生ける時、善根を造さず。三寶を識らず。善の福を受くる無く惡の殃を受くる無く、善知識其れが爲めに福を修する無ければ、是れ其の精魄、墳の中に在り。未だ生處あらざるが故に、或は生前に在つて大に福善を修し、精勤行道すれば、或は天上人間に生ず。故に不在と言ふ。或は生前に正眞を信ぜず、謟誑して人を欺き、惡業を造作すれば畜生惡鬼地獄に墮して備さに苦惱を受くべし。故に不在と言ふ」と。今は迷人の故に惡業をなして地獄にあるが故に墳墓に在らず、守らざるをいふ。○隴……壟に同じ。つかのこと。

筆意 生より死して墓穴に入るまでを明す。

講義 山川國土の生命は長うして萬世に亘りて減せず、人間の命は短うして百年なり。百年の壽命盡くれば死して髏も膝も皆悉く腐敗して滅す。遂にはまた棺槨までも塵と化す。かくては魂魄依り住みべき所なし、生前惡業に恥り居りしことなれば恐らく神魄は地獄に墮在して墳墓の中には居ないことであらう。地獄に墮在せしむるよりは碑の裏に聊か名を刻し、塚中に寧ろ君を斂めたく希ふものである。

日月黃白土　終歸黑風山
唯有三乘寶　不修八苦人

講方 日月に黃白の土のみなり。終に黑風の山に歸す。唯三乘の寶のみ有り。修せざれば八苦の人なり。

字訓 ○黑風山……『開書』に曰く「黑風は普門品に出づ。今は北邙の風土を云ふか」と。○唯有……已下は觀心を勸む。○三乘……大小乘に通ず。常住不滅のものは三乘のものなりの義。

筆意 死滅と觀心とを明す。

講義 日日月月と年月を經過するに從つて黃白の土と化し、遂に北邙の風土に歸滅す。かゝる人體は無常假有のもの、たゞ三乘のみ常住不滅たり。若し此の三乘の法に從ひ修せざればこれ八苦の人となる。

六識今何在　四大劣餘名
寒苦緣壞綠。　夏草鑽墳生
囊中糧尙在　松下髮猶青
蒼蒼隴雲合　瑟瑟夜松聲

講方 六識今何くんか在る。四大劣にして名を餘す。寒苦壞に緣つて綠なり。夏草墳を鑽つて生ず。囊の中には糧尙在り、松下髮猶青し。蒼蒼として隴雲合ふ。瑟瑟たる夜の松の聲。

字訓 ○六識、四大……六識は心法、四大は色法、即ち心法去つてその所在知れず、色法壞滅してたゞ空しく名のみ殘る義。即ち心法は滅せざる故に勝れ色法は壞滅の故に劣る。○蒼蒼……雲の色。○瑟瑟……風の聲。

筆意 死後の有り樣を明す。此の章は八句にして庚耕清の韻を用ひ、上下韻も異る。故にこれ別に一首たり。依りて九想詩と此の一首とを合して十首となると『開書』に云へり。

講義 六識は今何くにかある、四大壞滅してたゞ空しくその名のみを殘す。冬の苦塚上に生ひて綠なり、夏の草墳の中より生ひ出でゝ墳墓も荒れ果てたり

嚢の中に糧尚在り、松下の髮猶黑く、蒼蒼たる雲集りて塚の邊り暗し。風瑟瑟と吹き來りて松の枝を炙き鳴らす。

續遍照發揮性靈集補闕鈔卷第十終

性靈集年次目次

年紀	月	日	大師御年時	題番號	題目
延曆二三 一四六四	一〇	三	三十一歲	三八	爲大使與福州觀察使書
	一〇		同	三九	請福州觀察使入京啓
延曆二四 一四六五			三十二歲	四四	爲藤大使與渤海王子書
			同	四二	青龍和尚獻納袈裟書
大同元年	一	一六	三十三歲	一三	大唐青龍寺故三朝國師惠果和尚碑
	一		三十三歲	四三	爲橘學生與本國使啓
一四六六	一		同	四一	請本國使與共歸啓
	四		同	四〇	請越州節度使內外經書啓
大同二年 一四六七	二	一一	三十四歲	六五	爲田小貳設先妣忌齋願文
大同三年 一四六八			三十五歲		
大同四年 一四六九	一〇	四	三十六歲	一九	勅賜世說屏風書畢獻表
弘仁元年 一四七〇	一〇	二七	三十七歲	二〇	請奉爲國家修法表
			同	四九	東太上爲故中務卿親王造剋檀像願文
弘仁二年 一四七一	六	二七	三十八歲	二一	劉希夷集書上表
	八		同	二二	進雜書迹表
			同	二五	劉廷芝集書上表
弘仁三年	六	七	三十九歲	二三	進眞行草筆表
	七	二九	同	二四	進雜文表
一四七二	一一		同	二七	進柑子表并詩
	一二		同	一〇一	高雄山寺擇任三綱之書
弘仁四年 一四七三	一	一	三十九歲	二六	進奉宮筆啓
	一〇	三	四十歲	九三	永忠和尚辭少僧都表
	一一	二五	同	五二	爲藤中納言大使願文
		二三	同	一〇七	答叡山澄法師求理趣釋經書
			同	一五	和尚中壽感興詩并序
			同	三三	爲大德如寶謝恩賜招提寺五十戶表
弘仁五年 一四七四	三		四十一歲	一六	奉謝賜綿彖詩詩并序
	七	八	同	二八	進悉曇等書表
	潤七	二六	同	二九	請赦元興寺僧中璟罪表
	八	三〇	同	一一	沙門勝道上補陀洛山碑
弘仁六年 一四七五	一	一〇	四十二歲	三	贈野陸州歌
	四	一	同	九八	勸請有緣衆應奉寫秘密藏法文
	一〇	一五	同		爲式部笠丞願文
弘仁七年 一四七六	五		四十三歲	一〇六	爲泰範答叡山澄和尚啓書
	六	一九	同	九四	於紀伊國伊都郡高野峰被請乞入定處表
	八	一五	同	一四	勅賜屏風書了即獻表并詩
	一〇	一四	同	八八	新誓弘仁天皇御厄表
	一二	二七	同	三六	爲藤眞川擧淨豐啓
弘仁八年 一四七七			四十四歲	九九	高野建立初結界啓白文
			同	一〇〇	高野建立壇場結界啓白文

弘仁九年 一四七八	三	一九	四十五歲	一八	與新羅道者化來詩并狀
弘仁十年 一四七九			四十六歲	九七	紀伊國伊都郡高野寺鐘知識文
弘仁十一年 一四八〇			四十七歲	六二	爲知識華嚴會願文
弘仁十二年 一四八一	九	六	四十八歲	五四	奉爲四恩圖二部大曼荼羅等願文
	九	七	同	五五	爲故藤中納言奉造十七尊像願文
	一〇	八	同	六三	爲葛木參軍設先考忌齋願文
弘仁十三年 一四八二			四十九歲		
弘仁十四年 一四八三	一	二〇	五十歲	三五	爲酒人内公主遺言
	四	二四	同	三〇	奉賀天長皇帝即位表
天長元年 一四八四	二		五十一歲	二	秋日觀神泉苑
	二		同	四	喜雨歌
	三	二	同	六〇	於東大寺供養三寶願文
	四	六	同	三一	辭小僧都表
	一〇	二二	同	五六	笠大夫爲先妣造大曼荼羅願文
天長二年 一四八五	二	一四	五十二歲	七三	爲亡弟子智泉達嚫文
	閏七	一九	同	八四	被修公家仁王講表白
	九	二五	同	一二	大和州益田池碑銘并序
天長三年 一四八六	三	一〇	五十三歲	四五	弘仁太上奉爲桓武皇帝講御札法華經達嚫
	一〇	八	同	七〇	爲弟子僧眞體設亡妹七々齋并奉入傳燈料田願文
	一一	二四	同	九一	奉造東寺塔材木曳運勸進表
天長四年 一四八七	三	一	五十四歲	一一〇	十喩詩十首并序
	五	一	同	四七	天長皇帝於大極殿請百僧雩願文
	五	二四	同	六六	大夫笠左衛左爲亡室造大日楨像願文
	七	二四	同	四八	右將軍爲左僕射設大祥齋願文
	九		同	四六	天長皇帝爲故中務卿親王施入橘寺願文
天長五年 一四八八	四	一三	五十五歲	七九	爲先師講釋梵網經表白
	四	一三	同	一〇三	故贈僧正勤操大德讚一首并序
	一二	一五	同	一〇二	綜藝種智院式并序
			同	一七	贈伴按察平章事赴陸府詩并序
			同	三七	爲人求官啓
天長六年 一四八九	七	一八	五十六歲	七七	三島大夫爲亡息女書寫供養法華講說表白文
	九	一一	同	一〇五	秋日奉賀僧正大師詩并序
	九	二三	同	一〇四	暮秋賀元興僧止大德八十詩并序
			同	五八	和氣夫人於法華寺奉入千燈料願文
			同	六八	播州和判官攘災願文
天長七年 一四九〇			五十七歲		
天長八年 一四九一	六	一〇	五十八歲	九〇	大僧都空海嬰疾上表辭職奏狀
天長九年 一四九二	八	二二	五十九歲	八五	高野山萬燈會願文
天長十年 一四九三			六十歲		
承和元年 一四九四	二	一一	六十一歲	七二	招提寺達嚫文
	八	二二	同	八六	勸進奉造佛塔知識書
	九	一五	同	九五	高野四至啓白文
	一二		同	八七	宮中眞言院正月御修法奏狀
年次不明之部			卌四歲—四十一歲	六四	爲菅平章事願文
			卌四歲—四十五歲	五〇	藤大使爲亡兒說齋願文
			卌四歲—四十五歲	五三	藤大使爲亡兒說齋願文

年次不明之部			四十三歲—五十八歲	五	贈良相公詩
			四十三歲—五十八歲	七	山中有何樂
			四十三歲—五十八歲	八	徒懷玉
			四十三歲—五十八歲	九	囍皮函詩
			五十一歲以後	三二	進李邕眞蹟屏風一帖表
				一	遊山慕仙詩
				六	入山興
				一〇	納涼房望雲雷
				三四	爲眞能送右將軍啓
				五七	僧壽勢入先師忌日料物願文
				五九	爲前清丹州亡妻達嚫
				六一	爲荒城大夫奉造幡上佛像願文
				六七	藤左近將監爲先妣設三七齋願文
				六九	林學生先考妣忌日造佛飯僧願文
				七〇	爲弟子僧眞境設亡考七々齋願文
				七四	爲弟子求寂眞際入冥扉達嚫文
				七五	孝子爲先妣周忌圖寫供養兩部曼荼羅大日經講說表白文
				七六	爲忠延師先妣講理趣經表白文
				七八	講演佛經報四恩德表白
				八一	和尙奉爲新皇帝轉讀大般若經願文
				八二	有人爲亡親修法事願文
				八三	有人爲先師修法事願文
				九六	唱鐘知識文
				一〇八	見還俗人詩
				一〇九	後夜聞佛法僧鳥詩
				一一一	九相詩

性靈集關係人名索引

ア行

安行　三七下
荒城大夫　二六一上
安敦内親王　一五五上
惟上　八〇下
伊博士　六〇上・六三下
伊豫親王　一五七下・二〇三上・三一上
惠日　八〇下
越州節度使　一七五上
小野岑守　三四上
大伴國道（伴平章事）　六七上・一〇七上

カ行

笠仲守　三三四上・三四三下・三七八上
笠仲守の先妣　二四三下
笠仲守の亡妻　一二九上
葛木魚主　二六七上
葛木魚主の先考　二六七上
紀勝長　二七一上
紀末等　六六上
紀木津雄　二七一下
義壹　八一下
義圓　八〇下
義智　八一上
義玫　六〇上・六三下
義滿　八一上
義明　八一下
清原丹波守　二五六上
清原丹波守の亡妻　二五六上
淨村淨豊　一五七上
願演　一三三上
惠果　七四上・一八七上・一八九上・三七一下
玄叡　二〇六上
玄賓　三五一下
護命　二〇六上・四一〇上
康守　三七三下
廣智　四三九上
呆隣　三八二下
勸操　三三五下・三九六上

サ行

寂澄　四一三下・四一七上
坂井名清川　二二四上
酒人内公主　一五四下
八一上
實慧　一三二下・三八二上
實敏　二〇六上
悲朝　二〇六上
壽延　二九九上
壽遠　二〇六上
壽勢　二三〇下
壽勢の先師　二〇六上
如寶　一五一下・二九六下
勝道　四七上
小内記大伴氏　一二九下
眞圓　二〇六上
眞境　二九三下
眞境の亡考　二九三下
眞濟　二上
眞際　三〇七下
眞體　二九〇上
眞體の亡妹　二九〇上
信靈　三九八上
眞朗　三五二下
晉卿　一三七下
仁主　一五七上
菅野眞道　二四〇上
施平　二〇六上
青丘上人　一二四上
善議　三九八下

タ行

田中小貳　二七四下
田中小貳の先妣　二七四下
泰演　二〇六上
泰範　四一三下
泰明　二〇六上
太賢　二一五上
戴榮　二〇六上
高階眞人　一八六下
橘逸勢　一九一下
智泉　二〇〇上・六六二下
築前太守　一一三上
忠延　三三上
忠延の先妣　三一三上
中瓊　一三九上
中繼　二〇六上・四一〇上
槻本小泉　一三九下
道慈　三九八下
道雄　二〇六上
伴弟滿　一〇七下

ナ行

能登臣廣成（眞龍）　一五三上
信滿　二二九上
春原五百枝　二七一下
般若三藏　一八七上
豊安　二〇六上
布勢海　九二上・一〇五上・一三七上
福州觀察使　一六六上・一七三上
藤原緒嗣　一六二上
藤原左近將監　二六二下
藤原左近將監の先妣　二六二下
藤原冬嗣　二二四上
藤原宗成　一六一下
藤原眞川　一五七上
藤原三守　六六上・三六六上
藤原賀能　一六六上・一九四下・二三三下・二三七下・二三〇上・二四〇上
藤廣　六七上
藤舟眞人　二七三上
藤文棄　八一上
藤弘　一九四下
渤海王子　三三五上

マ行

三島眞人助成　二七四下
村國益滿　一三〇上
明顧　二〇六上

ヤ行

永忠　三五九下
山背豊繼　二二五上

ラ行

良峯朝臣安世（良相公）　三四下・三六上・三九下・四三下・四五下
隆長　二〇六上
林學生　二八七上
林學生の先考妣　二八七上

ワ行

和氣夫人　三五四下
和氣播磨守　二八五下
王羲之（解書先生）　九六下

昭和十七年三月一日印刷
昭和十七年三月五日發行

定價五圓

不許複製

著者　和歌山縣伊都郡高野町　坂田光全

發行人　和歌山縣伊都郡高野町一三四　神保耕道

印刷人　大阪市北區天神橋筋六丁目三七　田畑秀治郎

印刷所　大阪市北區天神橋筋六丁目三七　貢文印刷株式會社

發行所　和歌山縣伊都郡高野町　高野山時報社
電話高野二四一番
振替大阪二三三九五番

日本出版文化協會　會員番號第一一〇五四八番

930
110

終